全日本リアリズム演劇会議機関誌

演劇会議

私の戦争責任——敗戦50周年を迎え——岩淵達治

文化の担い手から男が抜け落ちている！（西会議男性座談会）

戯曲『天神町一番地　広島・あの頃・消えた町』楠本幸男

88　1995年7月　¥700

みちのくの詩情豊かな大和町まほろばホールで

東日本演劇ゼミナール

日　時　'95年8月19日（土）午後6時から20日（日）午後1時まで

（運営委員会は18日午後4時半から。総会は18日午後6時半から翌日午後4時まで）

会　場　宮城県大和町　まほろばホール

（仙台駅からバスで約1時間）（宿泊は鉱泉旅館）

参加費　11,000円（1泊2食）子供割引あり

8/19　記念講演「ドラマと人間」ジェームス三木さん

モデル上演「海村」（一人芝居）劇団やませ（青森県八戸市）

大交流会　「権兵衛太鼓」京浜協同劇団　地元大和町の郷土芸能

8/20　分科会

（1）空気と遊ぶ（身体表現）里見まり子さん（宮城教育大助教授）（2）銀河ホールと文化行政　新田満さん（銀河ホール）（3）ヴォイス・トレーニング　やまもとのりこさん（ヴォイス・トレーナー）（4）太鼓教室　民族歌舞団ほうねん座（仙台市秋保町）（5）劇空間のハードウェア　小野田泰明さん（東北大建築学科）

主　催　東日本演劇ゼミナール実行委員会　　共　催　大和町

連絡先　仙台小劇場 TEL.FAX.022-264-2340

星降る里の演劇祭

西日本演劇フェスティバル

日　時　'95年8月26日（土）午後1時半から27日（日）午後3時まで

（運営委員会は25日午後3時から。総会は25日午後6時から翌日正午まで）

会　場　島根県八雲村　しいの実シアター、アルバーホール　宿泊は熊野荘

参加費　13,000円（1泊3食付）子供割引あり

8/26　モデル上演　「明日」劇団大阪　「セロ弾きのゴーシュ」劇団あしぶえ
「ブンナよ木から 降りてこい」劇団演劇街

大交流会

8/27　モデル上演　「じらい」自立の会

記念講演「私の演劇人生」有馬稲子さん

モデル上演　「操縦不能」劇団和歌山

モデル上演のあと、すぐそれぞれの劇についてパネラーの阿部好一、大川達雄両先生から劇評がなされます。

主　催　西日本演劇フェスティバル実行委員会　　共　催　島根県・八雲村

連絡先　劇団あしぶえTEL.FAX.0852-27-3050　劇団大阪TEL.FAX.06-768-9957

このお知らせは6月末時点での予定であり、変更される部分があるかもしれませんのでご注意ください。

◇関西芸術座『女の平和』（新スタジオ柿落し）
作・アリストパネス　訳・高津春繁
台本・田中千禾夫／早川寿郎　演出・河東けい

◇劇団だいこん座『すてきな三にんぐみ』
作・トミー・アンゲラー　脚色・石垣政裕
演出・五十嵐芳郎

◇劇団大阪『マンザナ・わが町』
作・井上ひさし　演出・福井晴成

公演

舞台

1995年7月10日　第88号

演劇会議

■ もくじ

●グラビア（舞台）…… 1
●私の戦争責任—敗戦50周年を迎えて—　岩渕達治…… 6
●文化の担い手から男が抜け落ちている！（西会議男性座談会）…… 12
梶本　潔／西尾臣示／清原正次／岩崎　徹
佐保田　章／恒川勝也／飴谷隆治／熊本　一
●萩さんは私たちの中に生きている!!…… 19
大橋喜一／藤沢　薫／後藤陽吉／中沢研郎／いとうエリコ
□「感謝と喜びの気持ちで」　萩坂心一…… 28
●「震災その後」…… 30
里中　真（劇団四紀会）／合田幸平（劇団どろ）
●照明家の戯言　横田元一郎／結城吉秋／早川昭二…… 38
●北から南から（劇団通信）…… 41
●文化を中心に据えたまちづくりを目指して　平田　康…… 57
●中グラビア — 顔 — …… 58
『和田澄子』（長谷川伸二）／『堀江武夫』（芳川雅勇）
『中村欽一』（久保田　穣）
●韓国との演劇交流について　加藤武夫…… 64
●＜ロシア演劇レポート３＞ — ２つの『堂々たるコキュ』 — …… 70
— 付、日本とロシア演劇Ⅲ — 桜井郁子
●劇評
虫（関西芸術座）……阿部好一…… 76
生きのさやぎを（仙台小劇場）……高橋　寛…… 77
真夜中の旅人（広島月曜会）……合田幸平…… 78
父と呼べ／四人囃し（演劇集団石るつ）……石塚幹雄…… 79
蚤とり侍（劇団1980）……境野修次…… 80
●戯曲『天神町一番地　広島・あの頃・消えた町』　楠本幸男…… 81
●事務局だより…… 119

表紙絵・中島高蔵氏　川崎市在住・画家

◇劇団名芸第四十二回公演『真夏の夜の夢』
（シェイクスピア劇場No15）
脚色・栗木英章　演出・佐野秀明

◇劇団仙台小劇場『生きのさやぎを』

◇劇団静芸『アンネの日記』
原作・アンネ・フランク　脚色・フランセスGハケット
アルバート・ハケット　訳・菅原卓　演出・伊藤幸夫

◇劇団海鳴り『結婚の申し込み』
作・伊賀山昌三　演出・青木守

◇劇団演集『アンネの日記』
（青少年のための芸術劇場）　演出・北原雅子

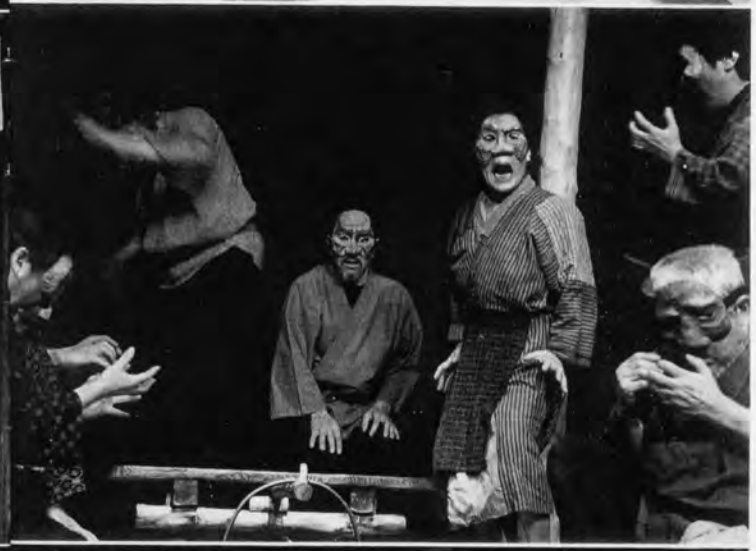
◇演劇集団石るつ『四人囃し』
原作・山本周五郎　脚色・津田伸
演出・境野修次

公演 舞台

◇テアトロハカタ『ひめゆりの塔』
作・菊田一夫　演出・野尻敏彦

◇劇団群馬中芸『ガダ・メイリン』
（地域合同企画公演）
作・中村欽一　演出・ふじたあさや

◇東京芸術座『花』
原作・田宮虎彦　脚色・平石耕一　演出・印南貞人



◇京浜協同劇団『がんとり』
こけら落し公演
作・川村光夫。演出・藤井康雄

◇演劇集団石るつ『父（ちゃん）と呼べ』
原作・藤沢周平　脚色／演出・境野修次

◇青年劇場『時間（とき）のない喫茶店』
作・斉藤樹実子　演出・堀口始

敗戦50周年を迎え

私の戦争責任

岩淵達治

岩淵達治氏のプロフィール

1927年東京生まれ。東京大学独文科卒。57～60年ドイツ留学。現在学習院大学教授。演出活動にも従事。主著「プレヒト」「反現実の演劇の論理」「三文オペラを読む」他。

戦後五十年という特集の枠で、原稿を書くことになったが、前々号のこばやしひろし氏の寄稿を排見して、特に演劇にかかわらなくてもよいようなので、氏と同じような主題で書かせていただくことにした。尤も私も演劇を業としている人間なので、当然問題はそこにもかかわっていくが、では具体的に、自分のこの問題を、具体的にどのように芝居の仕事のなかに反映するかという問題にまで具体的に拡げていくということになると、はっきりした見取図は書けないのである。二十年ほど前、私は「テアトロ」に「未清算の過去の諸問題」という原稿を載せた。（七四年一月号）これはいわば演劇における戦争責任の問題にかなり直接的にふれているが、この文章を書く契機となったのは、本誌前号に戦後の新劇状況の点検をされた宮岸泰治氏と原千代海氏の論争であった。岸田国士の戦争中の戯曲について刻明に批判された宮岸氏の論文に対して、岸田氏の弟子である原氏が全く客観性を欠く反論をなさったので、私は宮岸さんに頼まれたわけでもないのに、勝手に原氏に反撃を加えたのである。たゞその文のなかでも触れたことだが、先人の戦争中の態度を批判することは易しいが、私自身が敗戦の時には十八歳に達していたのだから、人を責めるだけでなく、自分のなかにも責められるべきものを十分に意識していなければいけない、ということは少し触れたつもりである。「未清算の過去」というのは、私がかかわっているドイツ演劇でもしばしば問題とされるテーマであり、〈未清算〉ということばは、本来は〈克服されていない〉〈十分にきわめつくされていない〉という意味で、ドイツの大統領ヴァイッセッカーが戦後四十年の演説で「過去に目をつぶる者は…」と言ったときの、あの過去に目をつぶるなという部分ともほぼ同じ意味である。

尤も日本には、「過去に目をつぶらず」に、意識して過去を肯定するどうしようもない連中がいる。今年私にとってサリン事件以上にショックだったのは、八十一歳になる奥野誠亮という政治家が、十五年戦争は侵略戦争ではなく、（アジアの）解放戦争だった。などという世迷い言をほざき、それに同調して二二一名もの議員が反不戦決議への策動を始めたことなのだろう。二十年前に私が原稿を書いたころは、賀尾興宣という戦争犯罪人が釈放されて「贖罪」のつもりで政治活動をすると発言したが、その贖罪の内容たるや、今日奥野誠亮のやっているような政治行動と全く同じものだったのである。こういうような、日本には戦争責任は全くなく、それを明らかにすることが自分の責任だと考えるような化石的な人物がいまだに山のように存在し、戦争を知らない世代でそれに同調するものがでてくるとなると、これは私にとっては、今騒がれている知的エリートがなぜオウム教に走るのかという問題と同質、あるいはそれ以上に危険な問題に思えてくる。そこで戦争を知らない戦後世代の人たちに警鐘を鳴らしたくなるのだが、その一方で自分自身に感じている戦争責任の問題をきちんと掘り起こしてみなければならない。

ドイツで私とまったく同年生まれの作家マルティン・ヴァルザーは、（統一後はややナショナリストになったが）かつて「自分がアウシュヴィッツの加害者にならなかったのは全く偶然のおかげだった」と自己反省している。つまり偶然強制収容所に配属されていたら、ユダヤ人虐殺者の一員になっていたかもしれない、という意味である。私だって戦争犯罪人になっていた可能性はある。戦時中、墜落した米軍機のパイロットが落下傘でおりてきたのを、激昂した住民が襲いかかって虐殺してしまったという例はいくつかあり、それで処刑された人もいる。爆弾を雨霰と投下され、家を焼かれ同胞を殺傷されて気の立っている人々の側にいれば、そこに落ちてきた当の爆弾の投げ手、現実の加害者に狂気に馳られて残酷な報復をしてしまう。ということは当時の私の精神状況から考えて大いにありえたことである。私も偶然幸いにもそういう場に居合わせなかっただけだ。

日本が原爆を受けたことは私にとっては二重の意味で悲しいことであった。私は基本的に原爆反対の姿勢については人後に落ちるものではないと思っているが、日本が原爆の被爆国であるということが、免罪的に働き日本の戦争責

任の追求を弱めている側面があるように思えてならない。それに、こんなストーリーはありえないことであくまでも仮説だが、もし日本が原爆を先に開発し、それによって勝利を占めていたとしたら、日本人は、原爆投下側としてのアメリカ側が抱いたほどの良心の呵責を感じていただろうか、という疑問がある。私の答は「否」である。戦争中に私は、たぶん「新青年」だったと思うが、今風にいうならばSPの「桑港（サンフランシスコ）けし飛ぶ」という小説を読んだ。これがSF原爆小説だったのだ。日本が原爆製造に成功し、サンフランシスコにあらわれたたった一機の爆撃機の爆弾投下によって市を壊滅させ、戦争を一気に勝利に導くという話だった。ヒロシマより二年ほど前だったのではなかろうか。でもそのころは戦況はかなり悪化し、こういう気死回生の一発勝負をしなければ勝利は飾れないだろうという気がしたから、この小説には説得力があり、わたしはそういう爆弾が日本で開発されることを熱望した。そしてもし、日本の原爆によってアメリカ人が百万人死んだとしても、私はその良心の傷みなど全く感じなかっただろう。それに勝利に驕った日本が、原爆投下の良心の痛みをひきずったりしただろうか。これはドイツが原爆を投下したと仮定してもいえることであって、アメリカにそういう良心を代表する部分が見られるということは、少くともわれわれより立派なことであり、アメリカ人だってインディアンを虐殺したではないか、というような安手はレベルで相対化できる問題ではない。

こういう部分が、具体的に私の身に覚える戦争責任である。それを確認した上で言うのだが、戦争中に似たような運命を辿ったドイツと比較して、どうも日本では戦争責任の追求がドイツほど徹底的に行なわれていないという考え方をつねにもってきた。

原爆と似た逆説的な言い方をすれば、ドイツがナチスという肯定しようのない犯罪組織と、ユダヤ人絶滅というような明白な犯罪行為をもったことが、戦争責任の追求を徹底させることになったのだともいえる。日本は戦争犯罪の裁判は占領軍によって行われ、その東京裁判で終りだったから、五十年代の終りには戦争犯罪人岸信介を首相にいただく世界にも稀な国になることが起こってしまったのである。ドイツはニュルンベルク裁判のあと、ドイツの司法の手によって、何十年もユダヤ人迫害の裁判を行ってきた。

私の同業者で、ドイツにおける戦争責任の問題をたゞのポーズだとおちょくるとんでもないデマゴーグがいるが、彼の精神構造も、先にあげた化石化人間と同質である。強制収容所はなかったなどという論文をものにした医者などは、まさに正気の沙汰とも思えない。

ドイツにおける戦争責任追求の姿勢のなかには、私はある種の宗教的なバックボーンを感じてしまう。それは贖罪

という概念だ。前述した戦時中の大蔵大臣賀屋は、贖罪という言葉を、自分の戦時中の罪を償うという意味ではなく、心ならずも戦犯にされていたが又娑婆に出られたので、スポイルにされた分を「お国のために働く」という意味で使っており、反省は露ほども見られない。日本にも僅かながら、本当の償いをした人はいた。職業軍人でもと航空兵器廠の長官だった遠藤中将という人は、戦後本当に自分の罪を懺悔する旅を行った。原爆投下の良心の呵責から、修道院に入った元米軍パイロット、イーザリー（宮本研の「ザ・パイロット」のモデル）の話などに対する僅かな救いである。

ドイツには、ナチスとか、歴史的にも前代未聞のユダヤ人絶滅計画などという犯罪対象があるが、日本の場合、軍部とか、戦争中の残虐行為とかは、やや曖昧で、歴史的にはいつでも繰り返されたことだ、という言い抜けができるようになっている。だが少くとも歴史自身は、全体としてはそれは良識に反し、不問にすべきでない、という方向に向かって進んでいる。残念ながら現在の民族紛争でも、まだそういう非人道行為はなくなっていないけれども、過去には、戦争中の残虐行為はやむをえぬこととと受けとめる見方のほうが強かったのである。

日本の戦争責任で、とくに具体的に（多くの例を典型的に集約した例として）示すものは、南京大虐殺、七三一部隊、生体実験、慰安婦強制徴用などの問題であろう。

南京大虐殺に関しては、教科書検定のなかで検閲対象にもなり、最近になってようやく、外国からの批判の効果で教科書にもとりあげられるようになったが、その数を少めにするという抵抗がまだくすぶっている。問題は三十万か三万かなどということではなく、被殺害者の数さえも定かでないなど無秩序に殺戮したということなのである。それを蔽い隠そうとする試みは、「反動」ぐらいのレッテルでは弱過ぎるくらいだ。

南京の話は、すでに当時問題になった。従軍記者として南京陥落のあと、小説家石川達三は南京にゆき、その見聞にもとずいて小説「生きている兵隊」を書き、発禁処分をうけ起訴された。戦争中によくあそこまで書けたと思うが、さすがに大虐殺のことは触れていない。石川が南京に着いたころは、一応陥落直後の無秩序な状況は終わっていたのであろう。大殺戮については戦後ひじょうに早く堀田善衛が「時間」においてかなり正確にこの事件をとらえているが、これは中国の一知識人の日記形式の記録という形をとっているので、日本人のこの事件についての反応は、客観的に第三者の目で描かれている。われわれ日本人は、この事件にどう反応すべきだろうか。

七三一部隊については、森村誠一の小説「落日の荒野」があり、これは劇化されて俳優座によって上演もされた。

これは貴重な例ではあるけれども、私の考えている戦争責任と舞台の仕事がどうかかわってくるかという問題には十分答えてくれなかった。

生体解剖（アメリカ人のパイロットの捕虜を九大医学部で生体解剖の実験体にした事件）はドキュメンタリーの著作もあるが、小説としてはやはりかなり初期に、遠藤周作が「海と毒薬」で扱い、この作品は黒川欣映の劇化で上演もされているはずである。これは遠藤氏の棄教者を扱った作品にもでてくる、弱い人間のタイプが主役で、殉教者を描くよりもはるかに普遍的な視点だが、生体解剖を手伝わされてしまった意志の弱い医師の状況はよくあらわされているものの、彼自身の良心の問題までは徹底して扱われていない。それは私にもよく理解できるので、自分のことをおきざりにした人ばかりを責められないという責い目は自分自身のうちにもあるのだ。ワキ役の人物戸田が、プライベートな罪、たとえば姦通などについても、目をつぶっている点は実は重要なモメントである。ストリンドベリの劇「ダマスクスへ」では、主人公は小学校の時に自分が罪をかぶせてしまった同級生に対して、中年になってもまだ罪の意識を感じている。こういう罪の意識こそ、戦争責任に対して感じる罪の意識と重なるのである。

日本では戦後文学で割合よく扱われた戦争責任とかかわりのあるテーマが、六〇年代以後少くなってゆくのに対して、ドイツでは六〇年代には、未清算の過去が文学の主流になったような感があった。アウシュヴィッツのようなテーマは詩作の対象にはできないのではないか、というアドルノの発言を裏切るように、多くの作品が書かれた。ホーホフートの戯曲「神の代理人」は教皇ピウス十二世を断罪しているように思われたが、作者の意図したものはドイツ人の戦争責任の問題であった。ペーター・ヴァイスの「追究」は、フランクフルトで行われた強制収容所加害者の裁判を詩的に劇化した作品だった。これらの作品は日本でも上演されたが、日本の観客にはナチスのやった蛮行だということで、自分の責任としては受けとめないという部分がでてくる。問題はこのような姿勢を、日本の戦争中の責任にあてはめたらどういう劇化が可能かと考えることであろう。

木下順二氏はこういう問題の劇化を試みた数少い作家のひとりで、東京裁判を劇化されているが、A級戦犯の登場する第一部「審判」よりも、BC級戦犯を扱った第二部の「夏・南方のローマンス」のほうが、一般観客との接点は多い。たゞ権力機構の末端にあって、上官の命令を遂行したことで罪に問われてしまった庶民が、同情の対象だけになってしまう、ということについては、かなり注意する必要があるだろう。紅涙を絞ったテレビドラマ「私は貝になりたい」などにはどうもそういう危険があるように思う。た

しかに青天の霹靂のように、戦犯として逮捕され処刑される床屋は何としても気の毒だが、それがなければ彼は何の罪の意識も覚えていなかったのではないか、フロイト流にいえばいやなことは抑圧していたのではないか、という疑問が残る。

このように追求が甘くなってしまうのは、わが身を省みると人のこととあまり追求できないという弱味があるからではなかろうか。自分への追求を厳しく行ないながら、他への（尤も自分の周囲の同国人の犯した罪は自分自身の罪なのだが）追求を行うという姿勢が必要なのではないかと思う。

演劇人のなかでは、戦後ほんの短期間だけ演劇人の戦争中の協力の有無について言及された時代があったが、いつの間にか立ち消えになってしまった。日本よりはるかに亡命の容易だったドイツでさえも、ナチスに協力した演劇人が、戦後早くも復帰している例も多いのだから、日本の演劇人が生きるために妥協の生活をしたことを責められないのは分るし、節を全うできた人が少なかったのも分る。久保栄などは、「林檎園日記」で自己正当化したように、協力作品を書かず節を貫いた人で、多少演劇人の戦争協力を槍玉にあげていた。

私個人の体験では、延安から帰った野坂参三（先頃共産党から除名された）を「同志野坂帰る！」という名調子の演説で迎えた薄田研二に、戦争中の国策映画で見た彼のイメージとダブった違和感が忘れられない。この映画は堤千代という女流作家の書いた「わが家の風」という小説の映画化で、五・一五というテロ事件を行った海軍将校の家庭悲劇を美化したもので、「一日生かば一日命を大君のみためにつくすわが家の風」というオソロシイ歌を家訓としている海軍将軍の息子がそのテロ将校なのであり、父の提督を演じたのが当時は寛右衛門と改名していた薄田研二なのであった。私の記憶力には意外と執念深いところがあるらしい。

しかしドイツ人はもっと執念深い。劇作家ホーホフートは、十年ほど前、州首相候補になったフィルビンガーが、海軍法務官として敗戦後になお水兵に死刑判決を下したことを暴露し、ついに彼に首相立候補を断念させた。同じ頃日本で最高裁判所裁判官のマルバツ投票があり、そのうち四人は旧陸海軍法務官であった。候捕者のなかには前歴として脱走兵に死刑判決を下した前歴をもつ人もいたはずで、私はいくつかの新聞に前歴をもっと詳しく公開せよという投書をしたが、ひとつとしてとりあげられなかった。

私は戦争を知らない若い世代の人は、もうこんな問題に関心はないのかと思っていたが、平田オリザ氏（62年生まれ）が日韓併合直前の日本人家族の差別意識にふれた「ソウル市民」という作品を書かれた事に勇気づけられた。

文化の担い手から男が抜け落ちている！

西会議男性座談会

こりゃ危機や どないしよう

出席者

梶本　潔	関西芸術座	俳優歴40年
西尾　臣示	劇団未来	俳優歴31年
清原　正次	劇団大阪	俳優歴30年
岩崎　徹	劇団息吹	俳優歴27年
佐保田　章	劇団きづがわ	俳優歴27年
恒川　勝也	劇団コーロ	俳優歴23年
飴谷　隆治	大阪府職劇研	俳優歴23年

司　会　熊本　一（劇団大阪）
記録とまとめ　赤松比洋子（劇団きづがわ）

熊本　みなさん、お忙しい所を特に自演連のみなさんは合同公演の稽古中なのにお集りいただきありがとうございます。こんなメンバーで話し合う機会も無いので今日は思い切り喋って下さい。何故こんな座談会を持ったかと言いますと、男性が文化の担い手からどんどん抜け落ちて行っていることに危機感を持っているんです。それと先々号の「演劇会議」で女性の座談会をやっていろいろ反響がありまして、良い芝居を創るためには男性の座談会も必要じゃないかということになったんです。そこで関西で劇団の中心的俳優の一人であり、長く活動している人達に集ってもらいました。初めにこの道に入った話をしてもらいたいのですが、一人ひとりは大変なものになると思いますので思いきりつっ走っていただいてお願いします。最初はやはり一番長い梶本さんから……。

梶本

一、この道に入ったキッカケは？

梶本　僕は一浪して経大に入ったんやけど友達おらんかったし、クラブに入ろうもて……映画好きやったので映研に行くつもりが部室まちごうて劇研に入ったんや（笑い）、四年生になって「かもめ座」が研究生募集しとって後輩が受ける言うんで付添うて行ったんやけど、そいつが熱出して休んだのでピンチヒッターで受けてしもうて通ったのでかもめ座の研究所に入ったその後、合併して関西芸術座になり、そのまゝずーとやってるんねん。

恒川

恒川　ボクは高校一年の時、演劇部で人が足りんので手伝うてくれ言うて各教室回ってきよって手を挙げたのがキッカケですわ。舞台に出てバカなことやって許される場所があると分って病みつきになった。授業中はおちょけやっていつっも教師に怒られとったから……。大学も一応経済大学やったけど、実質は学生運動部演劇学科みたいやったから（爆笑）、丁度コーロの前進の二月がプロになる時期だったので誘われ入ったんです。

佐保田

清原　キッカケは組合の全損保演劇部です。芝居はもともと好きで高校演劇部でもやってたけど、ボク正義感強いもんで同じ職場の熊本さんから〝人が足らん助けてくれ〟言われて、困ってる人が居たら助ける言うのが原点なんでね（笑い）仕事、組合、芝居と、どれも抜けられずにずーっとやってきたけど、役者やってると思えてきたのは24年前の劇団大阪が出来てからやな。

佐保田　ボクは、母親がドサ回り好きで月に一～二回は連れて行ってもろてたんで、学校でマネすると大ウケしてね、人を喜ばすのて楽しいもんやなと思たんです。会社に入って二、三年くらいたった頃、ジレンマを感じて新聞広告でサークル員募集してたので入ったんです。そこがつぶれてブラブラしていた時、きづがわの前身・南大阪劇研が日鋼室蘭のたたかいを描いた「おふくろの歌」をやってて誘われて行ったんです。その頃ボク、社会劇は嫌いだったんですけど、郊外で働いている者にとって御堂筋のビル街で赤旗を立てて闘っているところがあるなんて驚きだったんです。闘争中の上海銀行を稽古場にしてたんですよ。この舞台に出てお客さんのすごい反応のなかで感動し、そこが、自分が続けていける出発点になりました。

飴谷　高校の友人ですごく魅力的な人が居て、その人が演劇部だったんです。肩書きのない生き方、自由な人間の生き方が出来る人で、演劇部というのはそんなに魅力があるのか――と思てました。ボク家庭環境が複雑で屈折して生きていたんです。だから落語やったり、慢才やったりす

清原

るとみんなに喜こんでもらえることで、自分の生きる価値みたいなものを見つけだしていったんですね。今だに兄弟とは何か、夫婦とは何かと考えつづけ、かかわり続けてるんです。役に入ったら家族とはこうや――と没頭できるうれしさで続けてるんです。一本でも多くやりたいと思ってます。

西尾　ふじたあさやの「日本の教育1960年」で解同の親分の役を手伝うたのが最初やった。

恒川　オレ、その舞台手伝いに行ったで、「うわー未来はほんまのヤクザ使こうてるわ」と思てたら、後でこの人高校の教師やて聞いてびっくりしたわ（笑い）

西尾　いや初めは二月の研究生でやってたんや、二月がプロになる言うんで退めたんや、オレ高校の演劇部の顧問やってたさかい、文化祭の道具を未来の代表の森本さんのおる児童会館に借りたりしてたんで、役、足らんけどやらんかて言われて手伝うたんがそのまま入団してしもたんや。

飴谷

岩崎　僕は文工隊活動をしてた。太鼓たたいてたんやけど、ある時すごく体に感じて「太鼓たたく人の気持ちが初めてわかったわ」て言うたら、地元の人に「まだまだやで」と言われてズキンときた。役者として意識したのは「天満のとらやん」やってからやな、この役十五年くらいやってる。あー自分は役者やなあーと思ってた。会社が中小企業やったから休暇はとられへん、公演の日も休めず何人親戚殺したかわからん。十七年前に仕事変わって公務員になってはじめてのめり込んで、芝居が生活の一部になったんですね。

西尾　殺す者なくなったんで仕事変わったんか。

岩崎　そうや（笑い）

二、描かあかんのは人間

熊本　みなさんの経歴聞いてると、それぞれに長い歴史を感じさせますけど、戦後五十年ということで、みなさんのやってきた歴史とそのままダブっているんですが、この間の観客の質や反応もずいぶん変わってきたと思うんですね。僕なんかも大阪に出てきたのが昭和三十八年で、九州の大学演劇部出身なので劇作派だったんですけど……、組合の主催で平和の夕べというのがあって「南ベトナムからの手紙」というのを上演したんです。素人ばっかりで練習もあんまりできてないんやけど、お客さんのものすごい反応があって感動したんです、芝居てこうやって存在するもんなんだと思えた。実は集まった人達はテーマに対して拍手するために集まってるんですよね、そんな時代でした。

西尾

恒川　ボクは児童劇が多いので、子どもの反応なんか見てるとすごく変わってきましたね。昔は悪ガキがいっぱい居て、やんちゃで舞台に対しても敏感に反応しましたね。ボクなんか悪役なので客席から登場したりするとボケ！、アホ！、死ね！　言うてボコボコに殴りにきよった。今はおとなしいね、静かに見てる、演ってて腹立つことがない、ちょっと心配やね、子どもの親達に元気ないその反映かな、親達の生活にテーマがないのかな、僕が初めた頃は、公害問題があってがんばったらはね返せる、団結したら勝ち取れるものがあると思えた。舞台もテーマがはっきりわかっていて、観客もそのテーマに期待して観にきてたな。今は社会党が変わりよる、自民党のでけんかったこと全部やりよる不信感を持つ、ある意味では先が見えん、そやからよけいに人物が生き生きと伝わるような芝居がしたいな。

岩崎

梶本　関芸ができた三十～四十年前は、世の中の労働運動も高揚期で、大阪労演も会員が一万人くらいいて十日間やってた、関芸も『働き蜂』を持って全国労演にのってすごく受けた、そのとき言われたんやけど「東京の芝居はケーキみたいやけど、関芸の芝居は働く者にとっての握り飯や」って、お客さんに教えてもろてこれでええんや思ってついていったんや、観客の方が先にいっとたんや。その頃のダメ出しは勝ち負けのダメが多かったわ「弱い！　それでは負けたことになるで！」てな、腹の底から声出てたらええ、こんな調子やからそれで通用するような本を選んでたんやけど、やっぱり描かなあかんのは人間やで。

三、職場は芝居にならないのか

清原　以前は僕らのやってることが職場の人達にも肯定的に受け止められていて、観客としても成立していたけど今は、労働組合運動と演劇や文化が結びついていない、労演観にいっても中年の女性ばっかりで中年の男性なんてほとんどいてないもんなあ。

飴谷　今は組合にチケット預けても一枚も売れませんよ。

熊本　前は働いていることの矛盾や、それをはね返すことなどが創造のエネルギーになっていた、職場生活が演劇の練習場みたいだったのが、今はそんなことがなくなりつつある、仕事を割り切ってきているところがありますよね。

岩崎　やってることは羨しがられる……、昔はけったい

なことやってる奴やと言われてたけど関心は持たれてた、今はええ趣味もってるなあ―で終わってしまう。

清原　ええ趣味やと言われたらあかんねんで。

西尾　そやな、そう言われたら終わりやな「面白いで」言うて騙してでもお客さんにきてもらわなあかんのやから。

熊本　騙してでも連れてきたお客さんを感動させていく舞台をどう創れるかなんですね、本当にそこに自分が反映されてる人間が反映されてると思えるものが必要ですね。

梶本　職場のエピソードは芝居になりませんか（みんな口々に「ならないですよ」「なりませんね」など……）

飴谷　人間を扱う職場、例えば病院なんかではドラマになるが、その他ではならないですよ、僕のところも六〇人いて機械が二十五台ある、十何人が管理職なので兵隊ではほとんど機械の前に座っていることになる、人間を相手にできないんですよ。

熊本　お客さんの状況や職場環境も大きく変わってきているんですが、みなさんはそんな中で長年俳優をやってこられて、悩みや発見がいろいろあったと思うんですがお聞かせ下さい。例えば三十年もやってきたのにこんな劇団でいいのか、俳優三十年もやってきてもっと伸びたい、もっといい俳優になりたいとか……。演出のダメも少なくなってるでしょうしね。

四、悩みや発見は？

梶本　外部出演はすごく刺激になるね、まずダメ出しの単語が違うのですごく新鮮、関芸では聞いたことのない言葉が出てくる、このダメ出しを十年間聞いとったらオレはもっと成長できたのに……（笑い）

清原　僕は出て行くの好きで、よう出て行くけど、役者同志で交流したりすごい発見がある、それと業余劇団の場合は三～四回の公演で終わってしまうのが勿体ないと思うんや、もう少し深めたいと思うところで終わってしまう、再演したいな。

恒川　やっぱり小さな集団の中での刺激ではもう無理なんちゃうか、メチャメチャ生のいい新人が入ってきて、クソッ、こいつに負けてたまるか――みたいなものがあるとな……。コーロは外から演出呼ぶのが多いんやけど、東京の熊井さんやふじたあさやさんに芝居するなー言われた、僕はいちびりやから動きまわりたいのに芝居するな言われたら苦しいな、けど自然にやるようにしてたらわかってきた、見た振りの芝居せんとほんまに見たらええんやなとか……。

飴谷　僕の悩みは高め合える役者の相手がいないんです、今残っているメンバーでは下村君だけやけど、彼は舞監やったり制作に回ったりするので相手役にならない、本当に

やった気になれないんです。僕は役に付くと自分のことしか考えない、回りの人は不満で、長いことやってて回りのことも考えたれと言われるけどそんな余裕ない、自分の役だけ考えるんです。

佐保田　僕は逆で、相手役の動きまで全部考えるんです（笑い）全部の動きを考えた上で自分の動きはこうなると決めてゆく、だから、相手役にも要求してしまうので演出ともぶつかってしまうんです。

熊本　佐保田君にヒヤッとさせる芝居や関係がないと、もうできないんちがうかな。

佐保田　僕もヒヤッとさせる芝居してないからねえ（笑い）演出がどうしても新しい人に演技をつけてしまうのでみんな自分で役の動きを考えない、それにつきあわされると面白くなくなってくるんですね。

岩崎　役者同志で話し合って思うようにやったらええやん、僕は相手が受けてくれへんのとちがうかと思うことがあるけど、ダメもでないしね、あんたやったらできまっしゃろてなもんや（笑い）

西尾　なんぼ下手でも役者だけやってたいと思うわ、それにええ役つきたいわ、だいたい演出はオレに対して偏見があると思うんや（笑い）

五、演劇活動と職場と生活との関係は

熊本　女性は子育ての問題やなんかで芝居をやり続ける困難さがあるけど、男性の場合は、職場との関係が大きいんやないかと思うんですけどその辺は飴谷さんどうですか。

飴谷　自分では仕事も人一倍やってるし、家庭のことも世間的には人一倍やっていると思うんですけど、芝居やってることで毎日浮気してるみたいな負い目を感じるんです、いくら良くやってても心がここにない姿を見せてしまうのがつらいですね。

岩崎　僕かて洗濯もするし、後かたづけも……職場でも手抜いてないし、稽古行く前にいったん帰って取り入れて片づけてから稽古場に行くんや、ようやってるつもりやけど芝居のこと考えてる、心ここにないのを衝かれるのがつらい。

熊本　そういうつらさと違うかもしれないんですけど、もうやめよと思うたことありますか。

梶本　二回ある。一回は「ぶどうの会」に行こうと思うた時小松徹さんに止められた。もう一回はこんな役嫌や、味のある渋い脇役なんかいらん、たくさんのセリフのある役がやりたいんや、やめたる思て、女房の親父の会社に入れてくれ言うたんです、一応経済出てるし、帳簿付けはできるしと頼んだら女房は、会社に紹介したげるけど離婚するよと言われた。

熊本　俳優梶本と結婚したんであって、帳簿付けと結婚したのではない。

梶本　そうそう（みんなウワーとかヘェーとか感嘆の声しきり）

岩崎　僕は逆にやめへんかったら離婚するよと突きつけられたんです（笑い）今年、下の子の受験でね、上の子のときもそうやったけどある意味では劇団がある――と言って逃げてきた面があるからね。ふっと振り返えると家がえらいことになってた――みたいなね、それは嫁はんの役割や、とよう言い切らんかったしね、やめとは言わんがとにかく一年間休んで静かに子供と向き合ってほしいと言われてるんですよ。

西尾　オレは何回も思った。創造上の問題とかではないけど、芝居はやりたい奴がやるべきやと思てるのに、やりたい奴が出てけえへん、許せんかったらね、ところが不思議にオレが辞めよ思たら誰かが辞めると言い出しよるねん「ほんならお前先にやめ、オレは次にやめるわ」言うてね、それに、そんな時新人が入ってきて、こいつ育つの見てからでもええな思って四、五年待ったんやね。

飴谷　うちは人数少うてね、芝居やりたいのになかなか出来ないのがつらいんです。一年に一本が精いっぱいなんです。五年に一回の自演連の合同公演が支えになってるところがありますね。

佐保田　芝居をやめたいと思ったことはないけど、芝居をやる時の課題が最近もてないんですよ、そこが苦しくて抜け出せない。人間を描きたいのにそこへ向ってゆけない、舞台に立ってて自分の姿が見えるんですよ「あー、今やってるのは昔と同じ創り方をしている」と思い、嫌になるんです。

六、熱くなるには――思いや夢は

熊本　条件的なことや創造の質の問題でのぶつかりがあると思うんですけど関西――ということで言ったら少し刺激が薄いのんちがうか、ものすごく熱くなってやるということが薄くなっているんちがうかと思てるんですけど、熱くなるにはどうしたらええのか、またみなさんの思いや夢について一言づつ話してもらいましょうか。

梶本　役者てあてがい扶持のところあるやろ、本と演出にあてがわれてやるいやらしいところあるんよね、ええ役つかんかったら演出家は見る目ないな思て慰めてるんかもしれんな、僕ねヘソクリ貯めて、一定貯まったら自主公演やってるねん。

清原　ああプロデュースしたはったやつ。

梶本　そう十年間くらいで二回やってるねん、個人やから赤字出したら元へ戻すのが大変やからな。それと僕は内外ともに下手の代表や思われてるから、このまま死んだら「梶は四十年も役者やってて下手のまま死んだな」と言われたらゲンクソ悪いので、梶も案外キメ細かい丁寧な芝居

が出来るんだよと言われる役をやりたい思てる。

恒川　梶本さんがヘタやったら、ワシら何にあたるんかいな――て思うけど、昨年の「私が私と出会う時」に出てあんな役に出逢えて幸せやったし、財産やと思てるけど、僕はやっぱり走ってなんぼやーと言われる役者で終わりたい。思たところに飛べんようになってきてもどかしさもあるけど、死ぬまで子ども相手にほたえたろ思てる、芝居て面白いもんで若こうて、元気あって、体育会系の子でも舞台で動けるとはかぎらへん、まだ僕らの方が体動くもんね。

西尾　夢ではないんやけどレパートリーを選ぶ時、劇団の体制に勝ったやつを選ぶのか、負けてでもやるのかまだ迷ってる、役者やったら何を選ばれても目の前の仕事で勝負せなと思ってしまう。

清原　窯ど役を命賭んてやるのんか。

西尾　そうやねん。

岩崎　命は賭けられへんけど僕ら何かを賭けるんやで、やっぱり。僕は役者の夢で言うたら、出てきただけでゾクッとするような役をやってみたいな。背筋がゾーとするようなその役者から目が離せない――そんな役者になりたいな。

佐保田　夢で言えばメチャクチャな喜劇をやりたいんですけどね。それとね、僕は稽古に夢を持ってるんです。稽古でぶつかりあい、話しあい、確かめあい、演じあい――みたいな稽古を充実させ、そこで充分に楽しみたいと思てるんです。

飴谷　僕は数多くやりたいとの、やった相手役と同じ役者で次の舞台もやりたいんですけど、女性の相手役はなぜか必ずやめていくんですよ（笑い）だからメンバーを増やして芝居が積み重なってゆくようにしたいですね。

清原　中年の男を呼べる芝居がしたいなあ、男が文化に接する機会を多くしたい、そのための芝居を創りたいと思う、病みつきになるようなのをね。それと、再演やりたいですね、再演やって練りあげて劇団大阪のオハコをつくりたい。

熊本　みなさん、どうも長時間ありがとうございました、なかなか結論の出ない悩みや、すぐに実現しない夢などもありますが、関西に根を張ってこれからも関西の芝居を熱のある面白いものにするために頑張ってゆきましょう。

萩さんは私たちの中に生きている!!

故萩坂桃彦氏
『演劇会議』元編集長

無題……
——萩坂さんを偲んで——

劇作家　大橋喜一

二月のはじめ、一週間ほどの予定で、つくば市の息子のところへ行き、風邪をひきこんでしまった。性悪のものらしく咳と微熱がとれず、三週間も悩み、やっと治ったらしい日、三月の二日。階段でよろめいて、中段のコンクリートの床に転落、頭を強打、意識は失わなかったが、くらくらして出血、救急車で病院に運ばれた。吐き気がなかったので大丈夫と思ったが、頭部を数針縫った。レントゲン検査で頭骨には異常なしと診断、入院にもならず自宅で横になっていた。

傷の痛みはともかく、じっと天井をみていると、妙に気が滅入って——すごい滅入りようで（生きているとはどういうことなのか？）などと考えつづけていると、地の底に引きこまれるような落下感がつづく。まったく精神的なものなんだが、理由もわからない悲哀感。……チャイコフスキィの「悲愴」でも聴いているような——どうして？　こんなに悲しいんだ？　異様だぞ、心がこんなに沈みこんで

ゆくなんて……何故？　何故こんなに悲しいんだ？……そうした状態が二日ほどつづいた。

電話があった。川崎の文化会議の山川さんからで「萩坂さんが逝くなられた」と。

まさか！　わたしはまったく考えてもいなかった。瞬間、私は覚った、なんと、あれは萩さんとのお別れの霊感だったのだ。と。

わたしは、あやふやながら無神論のつもりでいる。だが、育て親の祖母は熱烈な日蓮信者だったので、青年期まで宗教的雰囲気のなかで育った。だから霊感といったものを信じたり感じたりする意識がどこかにあるのだ。

わたしにとって、もっとも異和感が少く、（ほとんどないと言ってもいい）話ができたのが萩さんだった。わたしの戯曲に秘められている主題性、同時にその欠陥も、もっとも深い部分で知り、理解し、助言してくれる人が萩さんだった。わたしは戯曲を書くと、まずコピーをとり萩さんに送った。すると、間髪を入れず（これはわたしの主観で、事情によって数日の経過はある。）萩さんは返事をくれる。それがくるまでわたしは奇妙な不安にとらわれている。でも、返事は必ずくる。ハガキの時、または便笺数枚にわたる時もある。わたしはむさぼり読む。時には苦いことばもある。でも、わたしはそれによってある安心感をもち、時には反省もふくめて、ひとつの仕事がおわったとの感じをもつ。わたしと萩さんとの基本的な関係は、こうしたものだったと思う。

近年（この十年ほど）、萩さんと話をする機会はごく少なかった。酒をのみ合う機会もほとんどなかった。多くはブレヒト研究会の帰り道、六本木——エビス——川崎の電車内で喋り合う。萩さんは渡田だから南へ、わたしは北へと別れる。わたしの場合はほとんど終バスだ。バスのなかで萩さんと話合ったことどもを、わたしは反芻する。その多くは——近年の芝居についての、悲嘆とか、嘆きとか、怒りと言ったものが多かった。でも、話題はあれこれと拡がった。なかでも特に印象に残ったのは、中野重治の小説「五勺の酒」についての意見で、わたしは萩さんに教えられてこの小説の深い意味を知った。「五勺の酒」を再読した——それがわたしの、「いとしの天皇陛下」（未発表戯曲）なる作品への執筆の、かなりの励ましになっていた。（このことは萩さんに話してない。いつか話そうと思っていたのに……）

萩さんはもう居ない。でも、わたしのなかには以前と同じように生きている。でも、わたしはさびしい。なんとも言えないさびしさの中にいる。……そして、わたしがあの日、天井を見つめながら感じた異様な悲哀感を、萩さんの

わたしへの、当面の別れのメッセージだったと思っている。息子さんのお話では、萩さんのご臨終近くの意識では、いろいろな方の名にまじって、わたしの名も何度か……多分萩さんはわたしの幻影に向って、なにかを語っておられたーーそれが、わたしにとって異様な悲哀感となって感じられたのであろう。わたしの感応力はたいへん鈍く、それが萩さんの当面の別れであった、と知ることが出来なかったのだ。

さきにも書いたことだが、わたしは至極あやふやな無神論者である。だから理論的には魂の遠隔作用なんてものを信じないはずなのだが、なにか、そういうものを信じたい気持もあるのだ。

はじめにわたしは、演劇の批評家として、そして編集者としての萩さんの存在が、わたしにとって如何に大きなものであったか。そのことを書きたかったが、それにはとてもスペースが足りないことを知って、このように萩さんの亡くなられた日の、わたしのエピソードを語らしてもらった。萩さんはわたしの意識のなかでは立派に生きているのだと。

一九九五・六・一

ありがとう萩さん

劇団京芸　藤沢　薫

萩さんが亡くなった。あまり突然で早やすぎた。

「予定どおりだよ、だって編集の仕事は終ったんだから」

「うじうじいつまでも生きていたってしょうがねえだろう」

という声が聞えて来そうだ。

実際萩さんはドキッとする言葉を平気で云ってのけた。死期を宣告された黒沢さんが元気になられた時、本人を前にして「もう後がないというから自伝を書いてもらったのに、裏目に出ちゃったんだよ」と云う。今頃はきっとお二人はあの世で大笑いしているだろう。

ついこの間「編集長は辞めても、あの胸のすく毒舌を続けて下さい」と書いたばかりだったのに。もうあの毒舌は聞けない。

要請があればどこへでも出かけていって、ていねいな批評を書いた。しかもベテランだろうが駆けだしだろうが、主役だろうが端役だろうが別け隔てなく批評した。実際どれだけの人が萩さんの言葉に励まされたことだろう。陽の当らないところでこつこつ演っている者にとってその効果は絶大である。

幸いなことに僕は二度にわたって「演劇会議」に取り上げてもらっている。即ち「カオルさんの場合ユキちゃんの場合」（二〇号）「吉田義夫と藤沢薫のうた」（二六号）、ユキちゃんとは、はぐるまの武藤幸子さんのことであるが、予告なしにこの記事を見てびっくりするやら恥づかしいやら。中身を説明する余ゆうはないが、実に具体的で的確な演技論で今も僕の俳優生活の指針になっている。

古い言葉で恐縮だが萩さんは礼節を重んずる人でもあった。依頼した原稿に対する礼状、領収書に至るまでいつもその人に当てた肉筆のひと言がそえてあり、きっちり一人一人と対応する姿勢があった。そんな気風が薄れている昨今では忘れ難く貴重である。

三年前の一月、京都の八瀬で萩さんの喜寿を祝う会があった。僕は、当日京都駅から地下鉄に乗って終点の北山駅で降りてもらえば車で迎えに行きますと伝えた。だが「そんなことしてくれなくていゝんだよ。僕は自分でバスで行くから」という返事だった。

ところが当日萩さんはちゃんと北山駅で待っていたのだ。シャイで酒脱で礼節を重んじた大正生まれの男、萩さんはもうこの世にいない、あゝ。

真実に対して徹頭徹尾真摯だ！

秋田雨雀・土方与志記念　青年劇場　後藤陽吉

三月十五日。萩さんへの、こばやしひろし議長による弔辞は、全リ演傘下の私たち一人一人の思いや気持を余すところなく伝えてくれたように思う。全国の方々から来られた仲間たちと霊前に居て、有難い程のものであった。そして私は、こばやしさんの萩さんへの友情の熱さをうらやましくさえ思ったものである。それはこよなく演劇を愛し、それ故にこそ全リ演を大切にされた先達の人たちの間にこそ存在し得たものなのであろう。

その感慨が、既になき初代議長の黒さんを思い出させ、ついで走馬灯のように名古屋の若尾さん、名芸の柘植さん、埼芸の塚越さん、遠くは弘演の佐久間氏を想起させてくれた。

それぞれ一癖も二癖もあるご仁ではあったが、自らの実人生のすべてを、演劇という運動にかけられた点では共通しているが、ことに黒さんや萩さんの存在は、私たちにとってはかけがえのないものであったと思う。

『黒さんは暖かく人を包む人だとすると、萩さんは鋭く歯に衣を着せず本質に迫り』というこばやしさんのご両人への対照句があるが、そう云うこばやしさんを含めてみな

さん、飽くまでヒューマンで、真実に対して徹頭徹尾真摯で頑固でさえあった。

それに比して自分はと、ふとこの頃考えさせられることがある。演劇における民主主義や団結、他の戦線との統一や連帯、はたまた情勢の認識について――現実とのかかわりにおいて演劇を創造する私達にとってそれはさておくわけにはいかないし、また誰れそれがそれらに異論をとなえていたわけでもないのだが、むしろ私の方が多分、一般的に過ぎていて、先輩諸兄の意とするところ、せっかくの創意ある積極的な指針の足をひっぱっていたのではないかと胸がいたむ。

今更それを云っても遅きに失するが……

昨年青年劇場が企画した築地小劇場七〇周年記念のつどいでの萩坂桃彦の講演「築地小劇場と地方演劇」は、新劇の歴史に新しい一頁を加えてくれた。その際の録画もある。

萩さんについて息子の心一さんや、娘の千文さんのことも語り合せたいが、残念。ただ萩さんとは今は亡き千田是也先生のもとで「ブレヒトの会」で一緒だった。で、どんな偉い人の前でも変えることない萩さんの毒説の中に、人間社会の進歩をめざして時代と真正面から切り結ぶ、明晰な科学、日本におけるブレシチアンのお一人であったということを記して、つたないペンをおく。

（一九九五・五・三一　公演先　浜松にて）

一徹さの底にあったもの

京浜協同劇団　中沢研郎

萩さんがいなくなって四ヵ月がたつ。

この頃になって、それがいつでどこだったか思いだせないのだけれど、そんなに昔ではないある時に彼がぼくにいった一言が気になりだした。その一言――おれに一べん京浜の演出をやらせてみないかね。

ぼくが軽はずみに、もうそろそろ評論集か自伝のようなものをまとめたらと言ったら、それへの応えがこれだった。軽はずみに言ったものだから、軽く萩さんが冗談でかえしたものと、受けとめ、ぼくは気にもとめなかった。それと、京浜がろくな舞台をつくっていないと皮肉りたいのだなと思っていたのかも知れない。

それがここえきて、その一言が急に気になりだした。あれは冗談でも皮肉でもない、案外本音だったのかも知れない、と気になりだしたわけです。

萩さんはもともと第一次協同劇団を全リ演初代議長だった黒沢参吉氏らとつくった人だ。昭和十一年のことだ。そこで演出をした。戦後も第二次協同劇団（昭和五十九年創立）の前身、建設座の演出者としておびただしい数の舞台を演出している。でも萩さんは、ぼくが学生演劇の仲間に強引

にら致されて建設座に行った時、事情があってそこを辞めていた。

だから萩さんは当分ぼくにとって伝説上の人物だった。その伝説は、芝居づくりが恐ろしく早いこと、職人気質まるだしだったこと、何でも料理しちまうこと、衣裳だとか装置だとか、メークなどあまりとんちゃくしなかったこと、酒が好きなこと、丹沢辺の山の中へ入って武争闘争のまねごとをしたこと等々割合い多彩であった。

建設座はぼくが入って間もなく立行かなくなり、他の演劇グループと一緒に第二次協同劇団に引きつがれていくが萩さんはこれに加わらなかった。この伝説人は建設座をはなれて以降東京・大田区にあった劇団十五人会・その後身労芸（一時全リ演に参加し、その後解散）で二、三本演出を手がけていた。

協同劇団になって間もなくぼくはそのうちの一本を見ている。神谷量平さんの「川のある下町の話」。蒲田界隅のドブ端のオンボロ木賃アパートを舞台に、そこの住人たちの生態をかなりしつこくドロドロとドブ泥色に仕上げたものになっていたと記憶する。この時から彼はぼくの中で伝説人ではなくなった。筋立てはすっかり忘れたが、あの徹底しきったよごし具合の装置と衣裳とおちぶれきった登場人物の何人かが、ドブ川のメタンのうたかたの臭いの如くよみがえる。三十年余りも前に見た芝居のそうした断片の記憶をたどっていると、わずかだが萩さんの世界といったものが見えてくるような気がする。萩さんは現実の混沌をもっと混沌とさせ提示しようとしていた。萩さんは別のところでも死ぬまでこの風をつらぬいたのではないか。彼はなによりも建前、公式、わり切りのよさ、知ったかぶり、キレイごとを嫌った。石るつの境野修次氏の書くものなんかも、かなり混沌非整然としているが、萩さんはその彼に痛激的愛情を注いで来た。それは誰れもが認知するところだ。わかる気がするのである。

こんなことをだらだら書いているわけは、以上のようなことを含めて萩さんは、現実に芝居をつくる場に自分をおきたかった、自分の世界をつくりたかった、つまり演出をしたかったといいたい為である。演劇会議の編集も、劇評もその彼の欲求をうめつくすものにはならなかったに違いない。一べん、というより若い時代の全てを演出という仕事の中にいれこんできた人間が、しかも人間のドロドロ具合の奥部まで眼と手をつっこんでひっかきまわしてきた人間がそう簡単にそこから脱けだせるものだろうか。彼は時々こんなことやめちゃうぞ、と編集や劇評の仕事でゆれを見せた。あれも今にして思えば本気だったにちがいないように思える。しかし、そんなあとシャニムニ編集や劇評の仕事に打ちこんだ。出口のない芝居づくりへの業にも等しい思いが、逆にあの一徹さ、几帳面さ、克明さ、しつこさ、

痛撃癖をつくりだしてきたように思えるのだ。全リ演への任務意識などということだけでは彼の仕事は理解できないだろう。噴まんの、毒づきの、焼酎の、オルグの、誌代取立ての、読量のすごさも、おびただしい数の芝居見参の、劇評のすざまじいまでのエネルギーの根はここにあったとぼくは思いはじめている。

死ぬまで萩さんはよく喋った。肺にまで癌が転移し、ゴーゴー鳴る息で全部芝居の話を喋った。最後になる何日か前、ぼくが病室に行ったとき、京浜協同劇団を小説に書きたいのだ、とまた言った。実はこれは、演出をしたいと言ったときに重ねて彼の口から出たことばだった。その時の萩さんの言葉づかいや眼の光がいやに優しくそれがぼくは悲しかった。

萩さんは確実にもういないのである。

萩さんがされた最後のお話

演劇集団石るつ　いとうエリコ

つい先日、「石るつ」は第三十九回目の公演を終えました。過去十数年にわたる顧客名簿を開くと、いやでも、時の移ろいを感じ取らずにいられません。逝ってしまった方がたの名前がのっているから……。

そこに、萩坂桃彦氏の署名を見るようになったのは、ずいぶんと以前のような気がします。

川崎の病院に入院されている萩さんのお身体がいけない、それもかなり、と伝え聞いたのは亡くなられる三週間ほど前だった。演劇会議について、お願いしていた件もある由、編集長であられる早川昭二氏と境野修次に附き、お見舞いに同行させてもらうことにした。――私にとって萩さんは演劇継続のための精神生活の拠り所でもあったので――

個室に移されたばかりの萩さんは、片腕に点滴、鼻には酸素吸入、尿導管をつけられて、ベッドに固定されているという風でした。

お話できないのでは、そんな杞憂が頭を掠めた。いつも見慣れた白髪がお顔のまわりにひろがり、入れ歯をはずされているせいもあり、一層、こじんまり見えた。

最初の一言で、今までの憂いは雲散霧消してしまった。なァんだ、萩さん、お元気なんじゃないですか！　側で見守る奥様の口添えもあり、ここ一月あまりの萩さんの思いが語られることになりました。

年頭、病気を押してとりかかろうとしていたことは小説を書きたいとのこと。それは、自分が今、思う演劇の在り方を考えるに、小説に戻るしかないと発見した旨――加須

での「暗闇の丑松」の話に通じるのか――そこから、戦前の作家達の話（中野重治等々）がひとしきりあり、最後には小林多喜二――彼は組織につぶされたのだと――にも及び、その頃のオルガナイザーの細部にわたる話が、早川さんとの会話で進められた。途中、聞き取りにくいのを察しられたのか、呆けちゃいないんだよ、などと言われ、克明に書かれた日記まで見せて下さった。お見舞いに見えた方がたのことが記されてあるというのです。

何度もはずれそうになる吸入器を、片手で鼻にもっていきながらも、奥様が言われるには、お話していたほうが疲れないのだそうで、病床に伏されても、なお、萩さんらしい御様子にうれしくなってしまった。

すっかり愛していただいた感がある「石るつ」だが、萩坂桃彦氏のお眼鏡にかなうのは、なかなかむずかしかった。いつも、厳しい劇評をいただき、頭をかかえたりもしたのだが、一方、昼公演の後楽屋に寄られ、焼酎を片手にいつまでもお話をされたりした。そんなときは、相好を崩され「石るつ」は本当に面白いよ、だからもっと何とかできるはずだ、等と言われ、立ち去り難そうにいつまでも居られたのです。

若い女医さんが回診にみえ、再び萩さんがニコニコされた。彼女は大学時代に演劇をやっていたということです。「銅鑼」の早川さんの前身から現在、「石るつ」の我々のことまでも、彼女に紹介してくださった。あまりに瑞々しいお話しぶりに、いたく演劇を愛していらっしゃるのだと、つくづく感じ入りました。

おいとまの御挨拶をした時、萩さんは、私の方を見られ、唐突に言われた。「面白い女だよな、また、今度ね…」とニッコリされた。

今、萩さん一流の言い方が頭の中を回っている。――わかっただろ、芝居ってのは、こういう風に残すものなんだよ――

ゼミでお会いしては、したたかに酔って萩さんと夜更けまでお話しする時、何故かいつも強気になってしまう私だった。――あれは、挑発だったのでしょう――

そのお名前が観客名簿から消えてしまった今、本当に逝ってしまわれたのだと痛切に、懐しく思われるこの頃です。

感謝と喜びの気持で

萩坂心一

父・桃彦の葬儀に際し、全リ演の皆様には大変お世話になりました。城谷さんをはじめ京浜協同劇団の方々は裏方の仕事を引き受けてくださり、議長のこばやしさんは感動的な弔辞を読んでくださいました。また、多くの劇団から生花や弔電をいただき、通夜・告別式には遠方からもご参列いただきました。入院中のお見舞いも考えますと、生前の父が全リ演の皆様に支えられていたことがよく分かりました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

「いつ死んでも悔いはない」というのが父の口癖でしたが、担当医から「危ない」と告げられた今年二月上旬から亡くなる三月三日までの約一ヵ月間、父は必死に病魔（悪性リンパ腫）と闘いました。全リ演の皆様から喜寿の祝いの際に頂戴した金の懐中時計を左手でしっかりと握り、「俺は全リ演のみんなとつながってるんだ」とベッドの上で宣言していたくらいです。

亡くなる一週間ほど前、寝ながら天井に向かって何やら語りかける父の姿がありました。それは、父にゆかりのある人が次々と登場し、挨拶を交わしているのです。時に眉をしかめ、時に笑顔で応え、右手を軽く上げて会釈する。その相手は地元川崎の人か、そうでなければ演劇関係の人でした。

そんなある日、父がやや興奮気味に紙とサインペンを要求し、看護婦さんと私に向かって、判読困難な字でしたが「千田是也先生」と書くのです。私は半分ふざけ半分本気で「いよいよ千田先生があの世からお迎えに来てくれたの？」と聞きますと、父は首を横に振り、かすかな声で「わざわざ見舞いに来てくれたんだ。嬉しくて嬉しくて……」と言うのです。周りの者が「そうか、よかったね！」と励ますと、歓びを噛みしめるように「ウンウン」と頷いておりました。

私の人生の中で、父と最もよく話し、ふれあえたのはやはり最後の一ヵ月間でした。その間、看病以外に私がしたことは二つありました。一つは、父が敬愛した中野重治の詩や小説を朗読してあげたことです。とくに『雨の降る品川駅』を読んだ時はぼろぼろ涙を流し、「品川駅に中野の立つ姿が見える、それだけで泣けるんだ」と感激しておりました。

もう一つ私がしたことは、死ぬ前に父が言い残したいことを聞きだすことでした。家族への感謝の他は、やはり全リ演の皆様に対するもので、「みんなが作品が書けない時、

厳しいことを言って責めてしまった。今から思うと申しわけない気がする」と言うのです。やや気弱になっている父を励ますつもりで「お父さんは演劇評論家なんだから」と言うと、「いや、おれは演劇雑文家にすぎない」と珍しく謙虚に答えるのでした。

思えば、今年の正月父一人だけが意気込んで「短編小説を書くぞ」と新年の抱負を語りました。現在、父の蔵書を整理しておりますが、父が皆さん方に宛てた手紙や劇評のコピーが本の間からよく出てきます。そういうものを読んでみますと、それ自体紛れもなく父の作品であり、書くことが何よりも好きだった父の思いが伝わってきます。大正から昭和にかけての文学的なある雰囲気を漂わせていた父が、「自伝」というものを書き残さなかったことは息子としても心残りです。父の八十年の生涯をあとづけていくことが私の務めとなりそうですが、父の人生の意味、とりわけ演劇分野で萩坂桃彦のしたことの意味を私なりに考えていきたいと思っております。

父・桃彦は皆さんのおかげで文字どおり演劇的な人生を送ることができ、本当に幸せだったと思います。父の演劇活動が「光」とすれば、その「影」の部分は母の生きざまにちがいありません。古本屋の商売、二人のこどもの子育て、酒好きな父の健康、そして自分の健康など、その貧苦は筆舌に尽くし難いものがありました。しかし、長期にわたり『演劇会議』の編集を任せられたことが父の後半生のたしかな生きがいとなり、多くの皆様に惜しまれながら一生を終えることができた、そのことを最も感謝し喜んでいるのは母・登久子であります。その母と同じく私も感謝と喜びの気持ちで、全リ演の皆様のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。

八七号の正誤表

	—誤—	—正—
1P・中段	演出・楠木幸男	演出・楠本幸男
15P・9行目	私は・数年より→私は・数年より……	
69P・23行目（下段）	高飛車的罵生・雑言を……→罵詈雑言を……	
70P・7行目（上段）	その折衝にあった一員→折衝にあった一員	
70P・16行目（下段）	戯曲の域と、→戯曲の節と、……	
70P・19行目（下段）	次第に戦場へと……→次第に敗戦へと	

●住所録の訂正。

テアトル・ハカタ　812福岡市博多区下川端町九－十五溝ロビル3

Fとあるのは、福岡市博多区綱場町一－十六の誤りで訂正します。

京浜協同劇団が京兵協同劇団となってます京浜が正しいのです。

更に、人形劇団クラルテがクラテルとなっているのは誤りです。

震災その後

活動再開!!

劇団四紀会　里中　真

今だに嘘のような気がする出来事でしたが、毎日通る街並の変わりようは、あれが現実以外の何物でもなかったことを、否応なく見せつけてくれます。しかし、恐ろしいもので、私自身の感覚も麻痺してしまい、倒れた家屋やビルがすっかり見慣れた景色の一コマと化してしまう時があります。

とにかく、実に様々な問題を突きつけ、今もそしてこれから先もなお、投げ掛け続けるであろうこのたびの阪神大震災。記念すべき第百回公演を八箇月後に控えて被災した劇団四紀会の現状と今後についてお伝えします。

少し遡って四月の下旬、九十九回目にあたる公演を震災後の再公演としました。演目は、かつて四紀会の財産の一つであった家族劇場『大工と鬼』『仙女の錦』の二本立てで、どちらも若手中心の新編成による再演でした。当初は別の作品を予定していたのですが、活動可能な者だけで出来る作品を、ということで急遽変更したものでした。

実は、震災から約半月後に劇団員宅で開いた運営委員会で、次のことを論議しました。

この未曽有の事態に被災地の文化集団自らが一刻も早く立ち上がることが大切だ。閉塞状態を突破しよう、他の集団に呼びかけて文化復興の集いを開こう、その企画を推進するのに最も相応しいのは、神戸の文化諸団体・個人で結成され四紀会も加盟している「神戸をほんまの文化都市にする会」だ、と一致したのでした。

「会」の方でも直ちに合意が得られ、「わわわフェスティバル」と称するイベントを開催することになりました。前述のレバも、老若男女を問わず楽しんで頂け、観る側も演る側も元気が出るもの、という点で、この祭典に相応しいとして選んだものでした。

とはいうものの、当時の稽古場は立ち入ることが危険な状態で、水もガスも出ません。トイレは六階から地下まで降りて行かねばならない有様です。交通網は寸断されたままで、避難所生活の劇団員もいて、メンバー編成も稽古も難渋を極めました。

そうしたなかで有志がジャンボ紙芝居をもって避難所二箇所を回りました。青空に翻る「劇団四紀会」の旗は、避難所の人々よりも私たち自身を勇気づけ、稽古も次第に加

避難所にて「ジャンボ紙芝居」

速していきました。（写真）

フェスティバルは五日間にわたって開催されました。地元の劇団、合唱団をはじめ、労演、映画サークル、親子劇場のほか、東京から地人会と芙二舞踊団、大阪から関西芸術座、関西音踊会議、長野県の伊那からはカンパ持参で小出太鼓が応援に駆けつけてくれました。三日目のシンポジューム「文化による新しいまちづくりをめざして」には、演劇評論家の衛紀生氏が講師として出席され、また滝沢修氏と南風洋子さんも激励に加わって下さって、客席には笑声が沸き、予想以上に充実したシンポになりました。この五日間の講師も出演参加者もすべて手弁当のボランティア、入場料も無料で観客は延べ千五百人、画期的な催しになりました。劇団では、前述の二作品を上演したほか、フェスティバル実行委員会の前衛として奔走したことは言うまでもありません。（写真）

活動再開!!フェスティバルにて「仙女の錦」

こうして復興第一弾をやり遂げた四紀会でしたが、昨年来から私たちには更に大きな目標がありました。戦後五十周年、第百回公演を座付作家である内田昌夫による創作劇で成功させることでした。

神戸大空襲の下、庶民の様々な思いを描いた第一稿は、一月十七日を境にほぼ一変する形となりました。作家の内田が、前号の「演劇

会議」にも掲載されているとおり、自宅が全壊する被害を受けたのです。震災とその後の避難所での体験は、彼の創作活動にとって抜き差しならないものになりました。

改稿というよりも、一から書き直しに近くなる構想が伝えられた時、予定されていた九月上演を危ぶむ声が出ました。しかし、演劇の持つニュース性を考えると九月というのはタイムリミットだろう、という意見があり、そして何よりも、被災現場における名もない人々のさまざまのドラマを私たちの財産として舞台化したいという思いが強烈で、ついに、この無謀とも思える企画に腹を括ることになったのです。

タイトルは「火の華・サイタ」。これは初稿の神戸大空襲をイメージしたものでしたが、そのまま使うことになりました。というのも、神戸大空襲と今回の震災をブリッジさせながら、五十年間の勤労市民の歴史と現代を考えよう、神戸という地域、わが街を見直そうとの意志が改稿の原点になったからでした。

意図は壮大でも、現実の筆はなかなか進まず、五月末現在、最終の第三稿執筆中。間もなく脱稿し、いよいよ六月中旬から稽古開始という段階です。台本もホヤホヤなので、稽古と並行しての改稿作業が余儀なくされることになりそうですが、とにかく今年の柱である戦後五十年、この地でしか創り出せない舞台となるよう、全力で取り組んでいきたいと思っています。

全リ演のみなさんから寄せられたカンパのお陰で、稽古場の修復は着々とすすみ、損傷した音響・照明器材も補充計画が立ちました。大小道具や倉庫の修復も徐々にですが、やがて整備出来るでしょう。

さあそして、これからの四紀会のビジョンについてですが、再来年の創立四十周年に向けて方針を打ち出しつつあります。基本の大きなところは、前述したとおり、震災を経験した劇団ならではの神戸に根ざした創造活動を展開していくということ。具体的には、創作劇に積極的に取り組んで行きたいと考えています。また、八年前まで年一回コンスタントに上演して好評を博していた家族劇場を、正式に復活させようという構想も進みつつあります。その他、移動公演についても、可能な限り広域に展開します。

以上のような公演活動に加え、常日頃からの基礎訓練（コーラス、ダンス等）にも挑もうとしています。これについては、余り肩肘張らずに、続けることに重きをおいてやっていきたいと思います。そして、こうした取り組みが、円滑にかつ、質の高いものに結びついていくように、機能させるための部局も編成します。

私たちはアマチュアではありますが、創りだすものはプロ並の水準を目指そうということを、かねてから掲げています。それは技術的な面だけでなく、経営・制作面においてもそうあらねばならぬということ、いい企画でいい舞台をより多くの人々とともに、と、今改めて確認し合っています。

政党の政策ビラのように、随分と盛り沢山に並べてきました。これら全てが一筋縄でいくとは毛頭思いませんが、成功に向けて不断の努力をしていくこと、このことこそが、一月十七日以来、文化の前衛となり得る可能性を持った私たちに課せられた使命なのではないでしょうか。

頑張ります。

少人数だが、稽古場復活祭に向けて

劇団どろ　合田幸平

震災から四カ月半が過ぎた。家やビルの解体が進んで街はずいぶん見通しよくなった。いたるところに空地ができている。これだけ家がなくなってみると今回の地震がいかに大きなものであったかということが、あらためて思い知らされる。

しかし、まだ解体作業は終わった訳ではない。いたるところで道路を塞ぎ、巨大なカニのハサミ状の解体機がもうもうと粉塵を舞いあがらせて、家をビルを破壊している場面にぶつかる。

夏が近づき息苦しさを嫌ってか道行く人のマスク姿はめっきり減った。しかし、一時騒がれたアスベスト飛散の危険がなくなった訳ではないのだ。

公園には依然としてテントが立ち並び、被災地のほとんどの学校にはまだ避難者がいる。もう六月に入ったというのに神戸だけで三万人近い人が避難所ぐらしをしている。仮設住宅の当選はまるで宝くじだ。始めは近場を希望していた被災者もだんだんと遠くでもしかたがないとあきらめはじめている。

そして膨大な瓦礫とゴミが市内のあちこちに集積されている。わが家の近くの須磨の海岸、夏になると大勢の人でにぎわうこの海辺も、その広大な駐車場や野球場は、瓦礫の山と化している。そしてこれら瓦礫の処理は遅々としてはかどっていない。最近の新聞によるとやっと全体の五%が処理できたところだという。

時間が経過するにしたがって復旧への動きが加速する反面、震災ですべてを失い、立ち直れない人たちがふるいにかけられたように取り残されていく、その明暗が際立ってきている。

行政の対応は震災直後から被災者を真に救済するというきめこまかさに欠けるものだった。悪しき平等主義によって最も救済の必要とされる人たちを取りこぼしてきた。全国から寄せられた義援金も、お役所仕事として全壊半壊一

部損壊などという根拠の乏しい判定基準で画一的に配分され、被災者同士の連帯感にひびを生み出しただけで有効に生かされたとは言いがたかった。

地震は自然現象で一定の地域性はあるものの、その被害は平等だと思われがちだが、実はそうではなかった。確かに揺れそのものは何の差別もなく震源のエネルギーを受け、地形や地盤の硬軟に従って発生したに違いない。しかし、それが発生した瞬間から、人間とその人間が造ったものへの影響のしかたは、見事にと言うか当然にというか、人間社会のさまざまな歪み、階級性をも反映して被害を顕在化させたのだった。地震は九十九％人災である、と言われるがまさにそのとうりであった。

地震のこの強烈な告発性、すべてを洗いざらいにする力は鮮烈な驚きであった。金持ちの家は残り、貧乏人の家は破壊される。資金力にものを言わせて建てたビルはびくともしなく、中小零細企業の安普請の工場は無残に倒壊する。まさに地震は弱者を直撃したのだった。

地震が社会の中のベールに包まれたものを一瞬のうちに暴き出したのだった。これは手抜き工事とか、防災対策の不備とかのハード面だけでなく、国や県や市がだれのために何をして来たのか、また、何をしようとしているのか、地域の住民がどのような関係で生活しているのか、その社会がお年寄りや障害者など、弱者をどう扱ってきたか、また扱おうとしているか、というシステムや関係のことまで一挙に暴き出したのだった。

今回の地震では死亡者の比率でお年寄りが圧倒的に多かった。それは社会がお年寄りを嫌い、余計ものとして扱って来た結果なのだった。だからこのことは震災後もずっと引き継がれている。今回の地震で九死に一生を得たものの、その後の苛酷な避難生活の中で肺炎その他の疾病を引き起こして死んでいったお年寄りの数が、現在までに五百人は下らないと言われている。それを分かっていながら放置してきたのも不思議ではない、当然の成り行きだったのだ。

私の住んでいる長田区は年寄りの多い地域である。今回多くの被害が出た都心部の激震地はほとんどがそうである。いわゆるドーナッの穴の部分にあたる。

昭和三十年代の「高度成長期」、拡大する産業に比例して交通至便な都市中心部は急速に人口が増加した。いわゆる文化住宅という名の二階建の木造アパートが急増された。やがて子供が大きくなり結婚して郊外に家を構える。親だけが取り残される。年寄りには未来はない、金もない、したがって彼らの住む家も、人間と一緒に老朽化するままに放置される。今回の地震はそのような地域を直撃した。いわゆる文化住宅と言う名の集合住宅はことごとく倒壊した。一階により多く住んでいた老人がその犠牲になった。そこに住んでいたのは企業からも、子供達からも見放された、

かつて日本の高度成長を支えてきた労働者たちだった。

文化の面に話題を移そう。「復興」「災害に強い都市の建設」のかけ声は大きい。行政ははしゃぎ過ぎではないかと思われるほど防災都市建設に向けて意欲を見せている。その対応は異常なほど早かった。住民が避難所や遠く離れた疎開先で暮らしているすきに強引に計画を決めようとする。「火事場泥棒」ではないか、との非難も出た。国が出す膨大な復興資金とひきかえに中央官庁の人材が自治体に派遣され、陣頭指揮を取っているという。地域住民の気持ちは無視される。どうせ愚衆の意見を聞いても我欲ばかりを主張しあって纏まるものか、と言わんばかりだ。行政は被災者に対してもいかに管理するかということばかり考えている。

そんな中で当然のごとく文化の復興などは後回しにされる。神戸文化ホールはまだ閉鎖されたままだ。十月から再開するという予定だが定かではない。毎年恒例の市の主催行事「神劇回り舞台」もホールが使用不能のため開催が危ぶまれている。ただでさえ少なかった文化予算も約十％削減されるという。

親子劇場、労演などの観賞団体も事務所の倒壊、会場難、会員の離散で運営困難に陥っている。神戸労演は五月から準備例会をスタートさせた。設備の悪いシーガルホールで二日三回の公演しかできない状態だ。参加した会員は以前の三分の一程だった。

そんななかで地元劇団もぽつぽつ公演を再開し始めた。まず職業劇団が、そして県立のピッコロ劇団がボランティア公演からはじまって延期されていた別役作品の公演を五月に持った。非職業劇団のわれわれはやや立ち上がりは遅かったが、四月に予定していた劇団四紀会の公演中止後のホールを譲り受けて、神戸の他の文化団体と共同で五日間にわたる「わ、わ、わ、フェスティバル」なるイベントをもった。無料公演だったが、東京長野など各地から駆けつけてくれた音楽、舞踏などのグループの支援も受け、わたしたちには活動再開のきっかけを与えてくれたという点で意義のある催しとなった。

ここでわたしたちの劇団の状況を報告しよう。劇団は前号で報告したように二月五日、稽古場の片付けからやっと動き出した。しかし、外壁や屋根、窓の修理、柱や梁の部分を鉄骨で補強するという大工事が始められて、内部はまたもや猛烈な埃、資材の氾濫で使用不能状態になった。そのうえ電気水道ガスもなく、とても集まれる状態ではなかった。結局、フェスティバルに参加しようということで稽古を開始したのはやっと三月八日だった。じつに五十日ぶりだった。その頃には電気だけは復旧していた。しかし、交通状態はまだ悪く、最寄りの駅である高速大開駅も地下鉄の上沢駅も閉鎖していた。ＪＲ組以外は片道二十分を歩

いての稽古場通いだった。ＪＲとて灘駅から東は不通だった。そのうえ九時を過ぎると女性の一人歩きは危ないと言うことで稽古時間は六時半から八時半ということにし、女性は必ず駅までは誰かが一緒に帰るということにした。そのうえ稽古場はがれき置き場のような有り様だった。稽古前には掃除をし、片付けをして何とか稽古できるスペースを毎回確保しながらという状態で、なかなか稽古が煮詰まるというわけにはいかなかった。参加は役者四人と音響、演出、小道具のわずか七人のみだった。

実は、わたしたちは三月に稽古場公演をする予定だった。岸田國士の五作品を二週連続して上演しようという企画だった。これは劇団員の減少傾向にあったわたしたちにとって大事な公演だった。これまで仕事の面で参加困難だった幾人かも復帰して、団外の応援も得ての、比較的にぎやかな公演になる予定だった。そのため、忙しい団員のスケジュールをやり繰りして複雑な稽古日程も組んでいた。これによって「ガリレイ」公演後の余勢を借りながら劇団の再生を図ろうとした訳だった。同時に四月からは研究所再開も計画していた。

震災によってこの二つの企画は吹っ飛んだ。

地震の直後、わたしはおそらく稽古場のビルは倒壊しただろうと思った。そうなれば公演どころか劇団の存続にも大きな支障が起きるし、ひょっとしたらこれで最後になるかもしれないと一瞬覚悟を決めていた。しかし地震後の二三日は、正直言ってそれどころではなかった。家族の寝食の確保、安全が優先だった。気にはなりながら、いつもは自転車で二十分の距離の稽古場が、その時はとても遠かった。

稽古場のビルはちゃんと立っているらしい、と言う第一報が入ったのは二日ぐらいたってからだった。避難していた学校にたずねて来てくれた友人の合唱団員夫妻からだった。彼らは稽古場近くに住んでいてわざわざ見に行ってくれたのだった。

稽古場に足を踏み入れた劇団員の報告を聞き、今後の対応を話しするために集まったのは地震から十二日経った日曜日だった。五人しか集まれなかった。そこでとりあえず次の日曜日、稽古場の片付けに行こうと決めたのだった。

あれから四ヵ月、事態はどう変わったか。五月に入って退団者が二人出た。一人は先号に手記を書いた中学教師。彼女はあの後、別の学校に転任し、そこは被災地の中心からはずれたところだったが、勤務が忙しすぎて芝居どころではなくなった。もう一人は以前から演劇への興味を失いかけていたのだが震災をきっかけに踏ん切りをつけたというところだろうか。そのほか退団には至らないが、稽古場への結集が困難になったものが五人もいる。すべて仕事が忙しくなったことによるものだ。工場が被災して立て直しに奔走する鉄工所、電力会社、金融関係、などに勤める団員は明らかに震災が影響し猛烈に仕事量が増えた。その他、白蟻駆除の仕事をしている団員、看護婦になった団員も長時間勤務で劇団に復帰するめどは立っていない。

このような事態のなかで、劇団は存続の危機に立たされるとともに、震災以後の神戸で演劇をするとはどういうことか、やるとすれば何をすべきか、その問い直しをいやがうえにも迫られている。

六月に入って稽古場の修復工事もほぼ終わった。わたしたちは小人数だが、団外の友人たちの協力も得て、月末に四日間、稽古場復活祭「ムーンライトインどろの芝居小屋」という名のイベントを企画している。歌、朗読などは応援で、どろは先のフェスティバルで不満だった岸田作品二本に再び挑戦すべく稽古に取り組んでいるところだ。

震災カンパのお礼

このたびの阪神・淡路大震災に際し、多大な激励と救援カンパをお寄せ下さいまして厚くお礼を申し上げます。

いま、私たちは活動再開に向けて懸命の努力を続けています。幸いにも死傷者はなかったものの、住居を失った多くの劇団員、稽古場や倉庫の全半壊といった、あまりにも深い痛手のために、華々しく再出発というわけにはいきませんが、被災現場で起こった数々の民衆のドラマに学びながら、地域の人々とともに文化の街づくりをめざします。

稽古場やホールとして利用してきた公共施設も、最近になって一部使用出来るめどが立ってきました。四月下旬には「神戸をほんまの文化都市にする会」主催で五日間のフェスティバルを開催するなど、それぞれの団体が自立と協同で苦難を乗り越えようとしています。

みなさまの温かい友情と激励に重ねてお礼を申し上げます。

一九九五年三月

全日本リアリズム演劇会議　被災地劇団一同

スタッフ・スタッフ・スタッフ・スタッフ

照明家の戯言

横田元一郎（青年劇場）
結城吉秋（演劇集団土くれ）
早川昭二（演劇会議編集長）

劇団「銅羅」の稽古場公演「俺たちの甲子園」を観た後、「土くれ」の結城さんと編集長の早川氏を交えてビールを飲みながら歓談しました。この戯曲は「演劇会議」の前々号に掲載されていますので参考にして頂くと幸いです。

＊　＊　＊

横田　結城さんはこの戯曲をお読みになって、自分の劇団で上演する場合に、まず照明家としてどんな事を考えますか？　ホリゾントが青くなる、とか幾つか照明に関わるト書がありますが、今日の舞台は小さい空間のせいもあってホリゾント・カーテンは使用してなかったのですが。

結城　僕はこの芝居は、あまりホリゾントにこだわる事は必要はないと思いますね。逆に大きな劇場の方がつらいのじゃないか　と思いますね。

横田　この芝居には幾つかの場面があって、炬燵を囲んでマージャンをやってる2階の部屋から高校の面談場へ転換の場面のシーンですが、作者の意図は2ツあると思います。ホリゾント・ライトをつけてシルエットで転換をスムーズに処理する事、それと前の場面との違いをはっきり表現する事ですよね。

早川　勿論　セットも関わるわけだが、照明的にどんな変化が考えられるかな？

横田　今、世の中には蛍光灯が主流ですよね。白熱灯を利用できるといいんですが……。答にはならないのですが蛍光灯の青白い色のイメージは、ビジネスライクというか会社や学校には相応しいですね。違いを出すためには、炬燵の部屋は白熱灯の照明に設定できればいいんですが、家庭の中も蛍光灯が多いからリアルじゃないかな。夜の高層ビルを見ると白熱灯の場所は高級レストランですからね。普通の家庭の高校生の部屋にはポピュラーではないかな。あと考えられるのはエリアの問題ですね。炬燵のある部屋は成るだけ小さくして、学校では、芝居では使わない椅子・机を飾って置いて3人の役者のエリアは前明かりも必要だけど、そこ以外の椅子・机にバックサスをおとしてシルエットぎみにしておくと、放課後の雰

囲気がでるかもしれませんね。結城さん、この後、夕方の路上になるわけですが、苦労話をどうぞ。

結城　私たちが使う舞台はあまり大きくないので、いつも苦労しますね。SSでやる時が多いのですが、役者の立つ位置によっては、サスやバックサスをプラスする場合もあります。時々アンバーのバックサスのハレーションを利用する時もあります。夕方から夜への時間変化は、照明的にも綺麗だしお客さんも喜んでもらえると思いますし、ホリの色の変化だけではなく雲や星も使うと、よりはっきりするし、又、白樺のような白い木でもあれば、光りの角度も客席からも分かります。

横田　時間が刻々と進んでいくのはドラマティックであるわけだけど、夜明けも同じですね。少し枝術的な事をいうと太陽が昇ってくる時は、白い木に低い角度から白く強い光りがほしいですよね。ハロゲンランプのバーライトは白い光りですが、問題は点き始めですね。

結城　五〇～七〇％位まで、少し赤っぽいですからね。

横田　それを消すにはライトブルーの色　例えば#六四を併用することですね。キッカケで六四のスポットを徐々に四〇％ぐらいまで先行して、おっかけてナマ（フィルターなし）のスポットをあげていくと、赤くならないで光りの強さだけがあかるくなっていきます。一度　試して下さい。朝日とか夕日は、下手からや上手からの片明かりになるけど、幽霊の場合なんか、顔の真下から当てる事が多いよね。

結城　お化けではないんですが、前やった事があるんですが、緊張感と憎しみなんかも表現出来るんですよね。下から当てると、能面とは少し違うけど。

早川　例えば「マクベス夫人」が、洗っても手の血がとれないと叫ぶシーンなんか、照明はどんな工夫が考えられるかな、赤い色をつかわないで。

横田　血の色はあった方が明かりは作り易いのですが、フットスポットを二つ仕込んで、交互にあおるという方法がありますね。白い色とグリーンにするといいかも。白い強烈な光りを使って、映画の露出オーバーの画面みたいなシーンになるといいんですが、明るいスポットはハレーションが多いので、補色関係にあるグリーンとアンバーの色のコントラストで処理する場合が多いような気がします。

早川　色の話が出たついでにいうと、昔の芝居で、空がだんだん暗くなってきて、雪が迫って、降り始めるというシーンがあったんだよ。穴沢さんが、実にうまくグリーンを混ぜてリアルな照明を作ったんだよ。僕は信州だから判るんだが、あんなリアルな照明、未だかつて観た事ないね。その時のグリーンがとても印象的だった。

結城　僕も雪のシーンでは青がかったグリーンを斜めから

当てる時が多いですね。ブルーだけですとただ白くなるだけで、冷たい感じが出なくて、情緒がないような気がしますね。

横田　雨が降りそうだ、という時もグリーンを舞台の何処かに感じさせるといいですよね。同じ真夏の白い太陽でも、登場人物が屋外での肉体労働者だったりすると、太陽が憎たらしく感じるよね、そういう場合、少し黄色を混ぜると　疲れた―という雰囲気が出るかもしれませんね。

結城　色の使い方は難しいですよね。

横田　本題に戻って、ゲンとシゲルが対決するシーンですが　同じ部屋ではあるんだけど、ドラマ的に一番葛藤がある所だし、照明的にも盛り上げた方がいいとおもうんだけど。

結城　僕もそう思いますね。喋ってる中身は確かに暗いのですが、それだけだと二人とも落ち込んでしまうので、緊張感みたいなものが出していければいいかなとかんじますね。

早川　友情の推移―中学ではバッテリィを組んでた二人が、高三のいま、目線を合わせにくい状態になり、とっくみあいの喧嘩を通して、又恢復する―というプロセスを照明でどう描くかという問題があるよね。勿論演技が基本なんだけど、その視点から見ると、部屋の照明も、最初からリアルでなくてもいいような気がするけど、どうだろう。

横田　照明は美術との兼ね合いもあるわけで、構成舞台ならそういうスタイルで行きやすいが、リアルにがっちりと飾ったセットだと、幕開きから心象風景的な照明は難しいと思いますよ。勿論　演出の意図をふまえて美術家のプランがあるわけだから、照明も演出家のコンセプトに浴ったプランを、装置と旨く折り合っていく事が大事ですね。もっとも　この芝居はあまり飾らないでしょうが。

結城　何処かにサスを落としておいて、明るい色だったり、ブルーやグリーンに、芝居の内容で変化したらどうですか。正しいかどうか判らないけど、イメージ的にそういうやり方も面白いかなと思うんだけど。ラストシーンの事ですが、場面は部屋と神社と、二カ所に離れていても、ゲンとシゲルの心には連帯感みたいなのが生まれてきてますよね。こういう時、どうすればいいかな？　と考えるんです。演出の問題も有るんですけど。

横田　光りの出どころの問題ですね。場所が違うから1台のスポットというわけにはいかないので、二ツのスポットを同じ位置に吊って、光りのビームを感じればいいんじゃないかな。

（56頁へつづく）

北から南から　劇団通信

関西芸術座

新稽古場に移転して六カ月。一応の落着きを取りもどした今日この頃です。

○新スタジオのこけら落し「女の平和」アリストパネス作・河東けい演出は、四月五日～九日、七ステージで一二〇〇名の観客で、華やいだ催しでした。

○「虫」藤本義一作・道井直次演出。大阪労演例会（五月十八～二〇日、Lシアター）泉南・和歌山・紀北・岸貝、各演劇鑑会例会（六月十九～二十五日）。「虫」は初演一九五七年、再演七十五年で今回は二十年ぶりの再々演です。

大阪は西成区の通称天王寺村に住む下層芸人の生きざまと、新たなマスコミの台頭の中でゆれる芸人たちを描く。

○中学・高校生を対象に巡演中である「薫ｉｎｇ」は、好評のためさらに上演期間を96年度まで続演する。なお今年七月二十九日、児演協二十周年事業の一つとして、俳優座劇場で上演。ぜひ関東方面の皆さんに観劇してほしいと願っています。

○次期全国こども・おやこ劇場用作品「夕やけ色のトンネルで」北原宗積作・宮地仙脚色・松本昇三演出を七月八～二十三日まで、各土・日にスタジオ公演で初日を迎えます。

○続いて、96年度より中・高校・一般の巡演する「奇蹟の人」W・ギブソン作・小津次郎訳・河東けい演出を、九月二十二日スタジオで試演会を予定しています。

○今年四月開講の附属演劇研究所39期生が、久しぶりに三十五名になり、週二日の夜間、賑やかになりました。これも稽古場新築による新たな現象です。

（557　大阪市西成区岸里東二―十―二
TEL　〇六―六六一―二一一一
FAX　〇六―六六一―二〇六〇）

演劇集団土くれ

担当者の怠慢により、劇団の便りが遅れ申し訳ありませんでした。阪神大震災により、被害を受けた劇団の皆さんに、心からお見舞い申し上げます。一日も早く劇団の活動が、再開出来ますようお祈りしております。

また、一月の「センボスギハアラ」公演にご協力いただいた方々に紙面を借りましてお礼申し上げます。お陰様で好評にて幕を下ろすことが出来ました。

さて、今劇団は、四月に定期総会を開き、新運営体制にて95年度の活動が始まったところです。公演は十一月中旬を予定し、上演台本の選定に入ったところです。六月には台本を決定し、七月から稽古に入りたいと思っています。稽古場は、若手を中心に「ういろう売り」をテキストに基礎訓練をしています。明日の劇団を担う若手が育てばと期待しています。

（105　東京都港区虎ノ門一―十二―一
虎ノ門第一法規ビル福田事務所内
〇三―三五〇八―〇一〇四）

劇団たけぶえ

一昨年の大安町でのフェスティバルでは大変お世話になり有難うございました。

「全リ演」のあの熱気に触れるのは本当に久しぶりの事でした。こんな機会を与えて下さった「劇団すがお」の加藤さん、それに暖かく迎えて下さった「全リ演」の方々に感謝しております。

そんな事に気を良くして、今度はこの〝劇団通信〟にも六年ぶりに（№72以来です）原稿を送る事になりました（これも仕掛人は加藤さんです、感謝）。

さて、「劇団たけぶえ」では春は自主公演、秋は一般公募による市民劇場といった形で公演活動をしておりますが、こゝ二、三年は春の公演が出来ないでおります（劇団の現状では年二回の公演には無理があるようです）。

今年は十一月上旬に栃木県で開かれる国民文化祭に出させて戴く事になり、目下『水仙』という作品の稽古をしております。これは越前海岸に群生する県花「水仙」にまつわる伝説を劇化した劇団のオリジナル作品です。

世界各地で起こっている民族紛争にも通ずるテーマを持つものと意気込んでおりますが、同じ十一月下旬に予定した市民劇場と稽古が同時進行になりますので、そのハードな毎日に自信が持てず公募をどうしようかと論議しております。

劇団のこうしたマイナス思考を何とか克服したいと思っているのですが……。

（915　福井県武生市四郎丸町二－二
TEL　〇七七八－二三－〇一四七
FAX　〇七七八－二三－四〇九五）

三浦半島劇団「海」

今年（'95）三月、敗戦五十年、公演「奪われた青春」二幕三場の上演に際し、青年劇場、京浜協同劇団の大きな御力添えをいただき、誠にありがとう御存いました。全リ演には新入りの私共劇団ですが、来年は、早、十周年を迎えます。創立当時の劇団員は数少なく常に公演をする度に一からの出直しを続けてきました。相手変れど、主変らずで、夫の病気の看護（夫は一昨年亡くなりました）と、マスコミの仕事、そして又新しい団員に舞台の上手、下手から知ってもらうところから始め直さなければならない、あゝ、もうやめた!!と思う……。イヤ、ダメ、ダメ、あんた、負けるの？　イイエ、私は負けない!!　の思いをこの十年間のくり返しでした。これを墓場に行くまで？。いいえ、我が劇団にも、後継者が、育ちつつあります。来年の創立十周年公演に向って、準備を着々と進めております。皆様、三浦の固島の唯一のリアリズム劇団「海」をよろしく御支援下さいますよう御願い致します。

（238－01　三浦市南下浦町菊名五六神田方
〇四六八－八八－三一四二）
神田　時枝

釧路演劇集団

四月二十二日に、釧路子ども劇場例会「おこんじょうるり」を上演しました。さねとうあきら作・ふじたあさや脚色・尾田浩演出、二ステージ。

いつも専門劇団の上演を観劇しているためか、会員の参加がいつもの例会より少なかったとの事です。アマチュアだからと甘く見られたか？　しかし、劇団内の反省としても、再演だったが、三月、四月の仕事が多忙な時期ともぶつかり、思うように稽古が充実しなかった分もあり、課題を残したものでした。

釧路子ども劇場からは、今後もいい作品があれば取り上げたいとの話もあり、要は自分達の芝居作りにかかっていると思います。六月からは、地元七劇団で組織する釧路演劇協議会の二十周年記念として、十六年ぶりの合同公演、アガサ・クリスティー作・鳴海四郎作「ねずみとり」を改題し「しらかば山荘殺人事件」の稽古に入ります。協議会としても参加者30名であり、市民公募を含め、スタッフ・キャストの充実した舞台を目指したいと考えています。七月十五・十六日は、北海道演劇集団の「演劇学校」が開催、九月一日は「片桐はいり一人芝居―ベンチャーズの夜」

の取り組み、そして合同公演が十月二十一、二十二日公演、またこの公演は道演集の観劇ゼミでもあり、地元はもとより全道の仲間にもいい舞台をと考えています。また、これと平行して、来年の「ほっかいどう演劇祭」の実行委員会作りも行う予定です。

（085　釧路市寿二－五－十三　中山方
TEL　〇一五四－二三－六五五一
事務局　尾田
TEL　〇一五四－五一－七八四六）

劇団だいこん座

春の公演は五月二十日(土)にトミー・アンゲラー作「すてきな三人ぐみ」を公演しました。初めてのミュージカル、踊りが八曲もあり必死で練習しました。なんとか本番までに間にあわせましたが、劇団の新しい分野への挑戦ということで好評でした。子どもたちがたくさん観劇にきて、予想以上の観客数になり、「子どもといっしょに創る児童劇」は今回成功しました。

秋の公演は地元の作家、佐藤治助氏の「ワッパ一揆」を高橋寛が脚色し、十月二十一日に鶴岡市中央公民館ホールにて上演する予定です。第一稿がやっとできましたので、これからいろいろと準備を進めて、創立二十周年にふさわしい舞台にしたいと思います。

（997　鶴岡市青柳町四二－三二
TEL　〇二三五－二四－一六八八）

劇団湖

阪神大震災演劇仲間の手記や現地報告に接し、慄然とさせられました。心からお見舞い申し上げます。

千田是也さんと萩坂桃彦さんの訃報もまた悲しい限りです。思えば三年前、三笠出身の大女優故岸輝子さんの遺品展示コーナーが博物館内にオープンした際に三笠を訪れた千田是也さん一行を囲み、北海道演劇集団の仲間と共に「演劇を語る夕」を開催した日のことを忘れることができません。

また、去年の九月のことですが、萩坂さんから加藤宅にめずらしく電話が入りました。「カミさんとの小旅行を終えて帰宅したところです、宮島のおみやげを送ったのでご笑納を」とのことです。あれが最後の会話になろうとは……。両巨匠のご冥福をお祈りするばかりです。

さて、劇団活動の方は―となると、劇団員の多くが地方選挙に埋没して了い、四ケ月間ほど殆ど空白の状態を余儀なくされました。

敗戦五十年に因み「アンネの日記」の一般公演に踏み切ることになり、研究生として仲間入りした五人の高校生と共にいよいよ始動することになりましたが、果してどんな結果になりますことやら―。

（068―21　三笠市本郷五七八　加藤方
TEL　〇一二六七－三〇四四）

演劇集団和歌山

劇団では今、八月二十六、二十七日と八雲村で開かれる全リ演西会議「星降る里のフェスティバル」への楠本幸男作・演出「操縦不能」（再演）の出品に向けて稽古もたけなわになってきました。同作品は九月二十二日にも和歌山市で再演します。

最近はちょっと若い世代の入団も寂しく、人手不足のなか、一人何役も（仕事を）兼ねてがんばっています。今年は二十五周年の年。なんとか充実した年にしたいものです。

（641　和歌山市和歌浦一－一－一四
TEL　〇七三四－四五－四五三七・夜間）

演劇集団あり

去る五月二十一日、鳥取市文化ホールにて開催された、第21回鳥取県演劇連盟鳥取公演に、鳥取市の二集団と共に、〝あり〟も参加し、石山浩一郎作・金田正喜演出で「冥府の河のほとり」を上演しました。

参加者は三百名近くで、最近のこの連盟公演では多い方といえます。

県演劇連盟は県下の劇団の連絡体であり、毎年春に鳥取市と米子市で公演を続け、今年が二十一年となります。

六月四日には、米子市文化ホールに於て、〝あり〟は「冥府の河のほとり」と、同じく〝あり〟の内部創作作品の添谷泰一作・演出「あずさ」の参加と、他に鳥取演劇集団「タンゴの物語」の三本を上演します。

結成以来、県演劇連盟公演には、毎年県から若干の補助もありましたが、本年から打ち切られたことは残念です。県側としては、秋の文化祭一本の補助に変更との理由ですが、ジャンル別の配慮が欠けており、話し合いにより解決したいものです。

最近の〝あり〟の状況は、生活事情や職場事情により結集もよくありませんが、春の公演後に体制を立て直し、秋の公演に向け充実した活動ができるよう、準備を進めています。

なお、地域の各種演劇関係団体にも停滞が見られ、我々の他、観賞組織、高校演劇関係、単発でもミニ公演を行っている、若いグループ等をまじえて、話し合いの場をつくることも企画されています。

（683　米子市昭和町二三　宮倉方
TEL　〇八五九－三三－九三〇二）

劇団河童

前号でお知らせしたとおり、「雪やこんこん」井上ひさし・作を十月十四、十五日に上演すべく、演出・布施茂で、ほぼキャスティングが終了しました。正劇団員が少ないなかで仕事を進めていくのは、なかなか大変です。友好劇団員とも言えるような方々に「この作品をやることになったので、この役どうですか？」「スケジュール空いてませんか？」といったセールスの毎日です。

それでも昨年、芝居作りにかかわってくれたなかからも若い女性二人が劇団員として残っています。若い力をどうやったら劇団に定着できるか、課題です。

隣り町、端野町では、芝居で町おこしをと、町が東京の劇団MODEに協力、現在、同町にて合宿、作品を仕上げています。地元劇団「ねぎぼうず」が中心に協力し、一般町民もエキストラ出演します。「わたしが子どもだったころ―オホーツク版」ということで、北見在住の作家・菅原政雄氏が翻訳しています。（六月九日より端野町を皮切りに道内・東北ツアーとのこと）菅原氏は、来年の北見市開基百年のイベント野外劇の脚本も担当（共同）され、製作中です。

綱走でも仲間の劇団「ポプラ」が久しぶりに公演しました。

オホーツクにも色々の種はまかれています、何とかお互いに協力して、大きな花を咲かすことができるといいのですが……。

（M）

（090　北見市幸町八－三－四　扇谷方
・稽古場）
（事務局　090　北見市文京町六一四－一六
（郵便物はこちら）　布施　茂方
TEL　〇一五七－二五－八三四八）

劇団コーロ

全国の皆さん、お元気でしょうか？　私達も元気で各地を駆けめぐっております。

過日の新稽古場落成記念パーティーに多数御来場下さいましてありがとうございました。たくさんの激励のお言葉を頂き大変うれしく思いました。皆さんの期待に応えるような芝居を創っていかなければと、劇団員一同決意を新たにしております。

九五年度の活動予定から、新作・継続作品の上演日程をお知らせ致します。お近くの方々は是非御覧下さい。

〇「ベンガル虎の少年は・・」（原作・斉藤洋、脚色・つげ　くわえ、演出・熊井宏之）七月二十三日午後四時三〇分。東京都渋谷区の東京都児童会館にて上演。料金は二千五百円。これは児童協二十周年記念事業として開催される〝児童青少年演劇フェスティバル〟参加作品として上演するものです。

〇「誰が石を投げたのか」（原作・ミリアム・ブレスラー、脚色・演出・ふじたあさや）九六年一月十九日、二十日、大阪・上六の近鉄小劇場にて上演。ハンディを持ち、さめた目で社会や家族を見つめていた少年が、弟の自殺を契機に心を開いていく様を描く作品です。大阪新劇フェスティバル参加作品です。

この他、八月十八日に子ども演劇祭IN吹田（吹田市メイシアター）で「れんげまんだら」、同月三十日に子ども演劇祭IN岸和田（岸和田市マドカホール）で「天満のとらやん」、三沢和子の一人芝居「千人針へのレクイエム」を各々上演致します。

日頃、児童劇に接する機会の少ない全リ演の皆さんにも是非観て頂いて、マイナーと思われがちな児童劇にも夢と可能性があることを知って頂きたいと思います。どこかで交流する時には御感想をお寄せ下さい。お待ちしております。

（546　大阪市東住吉区公園南矢田二－四－七
TEL　〇六－六九五－六四〇一(代)
FAX　〇六－六九五－六四〇五）

劇団大阪

阪神大震災から早四ヵ月。しかし、いまだに避難所生活をしておられる方が多いとか。それにしても「演劇会議」87号の震災特集は、一気に読ませる感動的（？）な報告でした。「その後の神戸」を期待しています。

さて、前号では担当のミスで「劇団通信」を忘れていました。申し訳ありません。

この間、Doの会プロデュースで「マンザナ我が街」（作・井上ひさし、演出・福井晴成）を四月六～九日谷町劇場で上演。劇場の2／3が舞台、残りが客席というお客様にはつらい劇場になってしまいました。でも、30代の女性劇団員が奮闘しました。

これからの公演ですが、昨年上演した「明日」を「戦後50年」の今年、できるだけ多くの地域で上演したいと思っています。それと、五年に一回開かれる自演連合同公演の成功を勝ち取ること。さらには、西会議「星降る里の演劇フェスティバル」を成功させること。とにかく忙しい年になります。

（文責・坂口　勉）

七月六日～八日　「海図なき航路」
作・楠本幸男　演出・堀江ひろゆき
自演連合同公演
八月六日　「明日」　奈良県青山町
八～九日　「明日」　谷町劇場
二十日　「明日」　三重県名張市
二十六日　「明日」　フェスティバル
十月「島」全国アマチュア演劇大会　利賀村
十一月十七日～十九日　「楽園終着駅」
作・近石綏子　演出・熊本　一
九年ぶりの再演です。

（542　大阪市中央区谷町七－一－三九－
三〇一
TEL・FAX　〇六－七六八－九九五七）

仙台小劇場

四月二十二、二十三日に大和町まほろばホール柿落とし公演「生きのさやぎを」は、地元の女流歌人の物語で、町政施行四〇周年とも重なり、町民の方にとても喜んでいただけました。現在は夏の親と子の劇場No.14こばやしひろし脚色「ブレーメンの音楽隊」の稽古の真っ最中です。総勢二十名を超える生バンドを音楽隊に仕立てました。劇団員の歌と踊りがついていけるか心配ですが、たぶん、頑張ると思います。

加えて、夏のゼミナールの準備にかかっています。ゼミナールでは「プレゼミナール」の企画として、会場地元の子供たちのために「三びきのコブタのほんとうの話」を上演することになりました。少し早めに到着していただければごらんいただけるかもしれません。

では、夏のゼミナールでお会いいたしましょう。

（980　仙台市青葉区五橋一－五－十三
平和友好会館２Ｆ
ＴＥＬ　〇二二－二六四－二三四〇）

劇団「どろ」

全国の皆さん、物心両面の御支援ありがとうございました。お蔭様で、かなり傷んでいた稽古場の補修も連休明けに終わり、やっと稽古のためのスペースを確保できるようになりました。

前号で報告させて頂いた小野結花も、なかなか仮設住宅の抽選に当らず苦労しているようですが、元気に頑張っています。

四月十九日から二十三日まで、神戸の文化団体、県外からのボランティア（文化団体）が、シーガル・ホールに集い、神戸の文化の復興を目指した文化フェスティバルが催されました。そこで「劇団どろ」は、岸田国士の「命を弄ぶ男ふたり」と「春の対話」を持って、震災後、初めての舞台を務めました。新しい一歩の始まりです。

私たちの胸の内には、まだまだあの日の事が残っていますが、この震災の経験を生かしこれからの創造に頑張っていきたいと思います。

〃一人じゃないんだ、全国に仲間がいる〃このことを心の内に刻んで。

今後ともよろしくお願い致します。

（文責・一貫）

（652　神戸市兵庫区大開通七－四－七
谷垣ビル４Ｆ
ＴＥＬ　〇七八－五七六－六四八八）

劇団名古屋演集

久しぶりに、名古屋市青少年のための芸術劇場として市文化振興事業団の要請をうけての公演となりました。作品も事業団の方から「アンネの日記」をと指定されました。

この作品は、昨年急逝いたしました若尾正也がとても大切にしていたものでしたし、劇団の上記活動の中でも劇団の財産としてそれぞれの心に残っている作品でしたから、若尾正也の追悼の意味を込めて上演したいと劇団内で話し合われていた矢先でしたから、とてもうまい具合に意見が合致し、劇団員一同取り組む姿勢に力が入りました。出来るだけ作品創りを全員参加でという想いを込めて稽古期間を十分とり、オールダブルキャストで望んだのですがやはり追い込みは大変でした。しかし稽古場が活気に満ちたことは間違いありません。

青少年のための芸術劇場
「アンネの日記」菅原卓訳　北原雅子・演出
三月十八日　二ステージ
三月十九日　二ステージ　一六一七名
市芸術創造センター

豊明「アンネの日記」をみる会
三月二十五日　一ステージ　六三七名
豊明文化会館

只今は、十一月の名劇協合同公演、また、来年二月の文化小劇場祭に参加すべく準備中です。

北原　雅子

（458　名古屋市西区庄内通四－十六－三
ＴＥＬ　〇五二－五二四－五九七五）

劇団四紀会

このたびの大震災ではたくさんのお見舞いを頂きましてありがとうございました。紙面をお借りして御礼申し上げます。

私たちは、自分たちの街を自分たちの力で

何とか立ち直さなければ、お客様に元気な笑顔をとりもどせる手助けになれば、との祈りを込めて「神戸をほんまの文化都市にする会」主催のフェスティバルに家族劇場二作品で参加し、震災後の第一歩を踏みだしました。

また、同フェスティバルには、各地からさまざまな分野の方々が駆けつけて下さり、どれだけ励まされたことでしょう！　感謝の気持ちで一杯です。

この度の震災では、人と人の繋がりの大切さを再認識しました。

今年は戦後五十年。

私たちは阪神大震災と神戸空襲を題材にした『火の華・サイタ』を上演します。戦後生まれの私にとって、今までは遠かった戦争というものが、震災を通して身近に考えられるようになった気がします。公演を前にして、いい経験をしたのではと、今では前向きに考えています。

ご期待下さい。

（Ｙ）

（650　神戸市中央区元町通二－九－一－
六一二
ＴＥＬ　〇七八－三九二－二四二一）

劇団生活舞台

五月三日、憲法劇団ひまわり一座との共同公演「敗戦五十年――セピア色の写真」無事終了しました。

しかし、今年の憲法記念日は「朝日」「読売」の主張や提言にみられるように、いつもの年とは違う「平和憲法」の危機を予感させる日でもありました。

戦後五十年の蓄積を無にしないためにも、いま平和憲法を守る運動を広く深く進めることこそ私たちの国の民主主義と私たちの演劇にとって急務ではないかと痛感しております。

光明ひとつ――青島都知事の公約「都市博中止」の決断を今日の夕刊で知り、一服の清涼でした。

秋の公演は、十月十二、十三日「ゆかいなどろぼうたち」二幕（高尾　豊脚色・演出）を予定しています。

（815　福岡市南区長丘二－十五－四－
四〇一　平原方）

劇団あしぶえ

まさに世紀末と思わせる事件が暗雲のごとく世の中をおおいつくしている中で、何か明るい話題を捜すのが大変なご時世になってきました。

しかし、我が劇団あしぶえでは未来を信じて着々と夢に向って行動しています。前号でも記述しました百人劇場「しいの実シアター」の竣工式が七月二十七日に決まりました。これで夢の掛け橋であった五十人劇場ともお別れです。感傷に浸る間もなく、これからは引越し準備、全り演西会議の打合わせと忙しい毎日です。

また十月には「しいの実シアター」の柿落としとして、新作デビット・ホールマン作「だいじょうぶ」を上演予定です。この作品は、オーストラリアを舞台にした物語りですが、瞬時に大人になったり、動物になったり、パントマイムで表現したりと、役者にとってはやりがいがあると同時に実力もためされる作品です。

一つの作品をロングラン公演することによってコツコツと養ってきた力をこの「しいの実シアター」で開花させる日は、そう遠くはないでしょう。ご来場をお待ちしております。

（三木　卓二）

（690　松江市砂子町二〇九－三
ＴＥＬ　〇八五二－二七－三〇五〇）

劇団弘演

朝夕肌寒い日が続いています。春も終わり夏というのに不順な天候がつづきます。

準備していた、春の公演が諸般の事情で延

期となり現在八月十四日に公演予定の「この子たちの夏」の稽古が行われています。前の号でも説明しました通り実行委員会形式で行われるこの催しに、出演者として、裏方として協力参加します。戦後五十周年でいろいろな企画が続くなか、市民の手作りの作品として多くの人の参加があればと思っています。

また秋の公演の準備も進んでいます。作品は「ブンナよ木からおりてこい」（小松幹生脚色）で市内にある親子の演劇サークルの方たちの参加協力で十五年ぶりに再演します。

前回の公演に出演した劇団員も数名おり、これに参加協力の子供たちでおもしろい舞台が出来そうです。青森県民文化祭参加作品で二年ぶりの親子で観劇できる作品です。

来年の作品もそろそろ考えなくてはなど思っています。

事務局長　宮崎　英世

（036　弘前市品川町一　喫茶ブラジル内
TEL　〇一七二ー三五ー四六七〇）

演劇サークル麦の会

全り演の皆様、御元気に御活躍のことと思います。また、阪神大震災にあわれた演劇集団の仲間の皆様、如何おすごしですか、あれから五ヵ月余り、まだまだ大変なことと思います。一日も早く公演活動の復帰を期待しています。

さて、私たち麦の会は、昨年の秋の公演を終えて、年明けてから新入会員のために、スタッフの勉強会をと、二月～三月にかけてやって参りました。さらに、秋の公演の台本の選定作業を行ってきました。ようやく三好十郎作「獅子」に決まり、十月二十七、二十八日に麻布区民センターホールで公演をすることになりました。台本作成、その他の準備等を終えて、六月中旬に稽古に入ります。骨組みのしっかりした一幕もので、会員一同張りきって稽古準備にとりかかっています。よろしくおねがいします。

（133　東京都江戸川区北小岩七ー三ー二〇
吉岡方
TEL　〇三ー三六五九ー八七〇四）

劇団息吹

三月に「アンネの日記」和歌山公演を終えてから、研究生卒業公演を無事終了して、一名の新入団員をむかえることができました。今は、七月の大阪自立演劇連絡会議の合同公演に、役者・スタッフとして参加、忙しい毎日です。今年は劇団独自の公演予定はなく、来春に創作劇を上演するため準備をすすめています。七月下旬より研究生講座もはじめます。他に女性だけの自主研究会、歌舞及び太鼓の再創造と、課題はいっぱいです。

（578　東大阪市中野二二四ー十四
TEL　〇七二九ー六四ー四四四一）

劇団からっかぜ

今年のはじめに原作ミヒャエル・エンデの『モモ』を、アンコール公演として上演して以来、早くも五ヵ月が過ぎ去ろうとしています。

次回作として、第35回目の芸術祭参加に向けて、『旅立ち』―自立への旅立ち―を上演する予定です。作は小島真木、演出は平井新。ぼちぼちと活動しつつありますが、何しろ役者の頭数が揃わず、若い青年を切要とするだけに、四苦八苦している今日この頃です。

しかし、少人数の劇団ではありますが、気持ちの〝若さ〟だけは皆、自信があります。というのは、来年、私達劇団からっかぜ独自のミュージカルを実現させようと、大きな夢を抱いて、週に一度ダンスレッスンを始めました。月曜日の夜八時より一時間程度のものですが、柔軟からステップ、振り付けなど、自由な動作で踊れることを基本としているので、年輩の方も若人も、年の差関係なく楽しく行っています。

劇団員に限らず、ダンスレッスンのみの参加も募ってみたところ、意外にも好評で、少しづつではありますが人員も増え始め、一歩一歩夢に近づいてきた、と言えましょうか。

（鈴木　貴子）

（431　浜松市篠原町二一五〇五
TEL　〇五三ー四四九ー〇九三七）

テアトル　ハカタ

第一二四作品公演（作・菊田一夫／演出・野尻敏彦「ひめゆりの塔」6・1～4、6ステージ　福岡市立少年科学文化会館ホール　観客動員数三五〇〇名）の幕が降りたところです。「命こそ宝（ヌチ　ドゥ　タカラ）」、五十年の「時の重さ」を問いかける作品に仕上がりました。キャストだけでも六〇人を超える大作です。沖縄県人会やひめゆり同窓会福岡支部の方々の協力も得ました。

劇団員も沖縄に行き、体験談を聞いたり、現場の調査取材をして役づくりに役立ててきました。八月は児童劇団テアトルハカタで、「祭よ、今宵だけは哀しげに」（銀河鉄道と夜）加藤純、清水洋史、作と六〇人出演の舞踊ショー。

九月二十～二十四（予定）大博多ホールにて石山浩一郎・作・演出で〝青年劇場創作戯曲賞〟受賞作「神露渕（じろぶち）村夜叉伝」を上演します。

秋は実験劇場で公演済の「エリアンの手記」（山崎哲・作／石山浩一郎・演出）と九月公演の「神露渕村夜叉伝」、名作劇場「奇蹟の人」、和風ミュージカル「おこんの初恋」、で巡演、企画公演として、博多区民ミュージカル（仮）「博多発エクスプレス21C号」、福岡県民創作劇（仮）アジアとのクロスロード、「鴻臚館物語」とまだ、まだ、息の抜けない下半期です。

（812　福岡市博多区綱場町一ー十六
多田ビル5F
TEL　〇九二ー二七一ー五〇九〇）

東京芸術座

戦後五十年企画・田宮虎彦原作、平石耕一脚色、印南貞人演出による「花」（四月十六～二十二日）も無事終了しました。「反戦」を言わない「反戦劇」として、各方面から注目を集めました。あの暗黒の時代にも〝心の糧〟としての「花」づくりに、〝国賊〟〝非国民〟と呼ばれながらも専心する生き方をした女性がいたことに感動するとともに、戦後五十年を考える上で、問題提起になったと思います。

そして、他団体との共催で〝戦後五十年を考える〟「いま平和とは―」の連続講座を開始しました。第一回が五月二十三日、第二回六月二十日、第三回七月二十五日、第四回八月十一日、第五回九月十九日で、浅井基文、黒田清、木下順二、日色ともゑ、加藤周一各氏の講師陣。

この〝戦後五十年企画〟のシメが山口みる演出の「私は貝になりたい」九月公演です。

豊松（井上鉄夫）に〝貝になりたい〟と言わしめた状況を作ったのは誰か？　そして今、〝貝になってはいけない〟戦後五十年の問題意識は何か？　共に考えたいと思います。

全国巡演は「十二人の怒れる男たち」（稲垣純演出）と「あわて幕やぶけ芝居―東京空襲三・一〇―」（杉本孝司演出）、「橙色の嘘」（早川昭二演出・平石耕一作）　郡司

（177　東京都練馬区下石神井四ー十九ー十一
TEL　〇三ー三九九七ー四三四一）

劇団すがお

三月に桑名市助成金事業として第五十一回公演「LAST　DESIRE―このままでいられたら―」を上演しました。企画の途中で新人が増え、当初は客演を予定してい

ましたが、気がつくとすがおの団員で出来る人数になっており、冒険を承知で新人をCASTにつけました。戸惑い、不安の多い公演でしたが、全員が団結し、おかげさまで大好評に終わりました。また、阪神大震災復旧支援として入場料のうち、一人百円（動員数五百十人、五万千円）を支援させていただきました。

◎募集◎

さて、今回の公演後も新人が入り（何とも幸せな話です！）、今後の新人育成に悩んでおります。皆さんは普段どのような稽古をしていらっしゃいますか？「うちはこんな新人教育してます」とか「うちの肉体訓練・発声法はこれだ！」など、ぜひ皆さんの稽古内容をお聞かせください。

◎次回予告◎

『銀河旋律』　作・成井　豊
演出・伊藤　恭子
九月二十二日(金)～二十四日(日)
ななわ小劇場（稽古場）

（511　桑名市睦美ヶ丘一〇五八
TEL・FAX　〇五九四－三二－四二一〇）

青年劇場

この二月の、飯沢匡追悼・戦後五十年記念公演『もう一人のヒト』（2／10～3／1・23ステージ）はおかげさまで七千名を超える皆さまに御覧いただき、好評裡に幕を閉じました。新聞各紙などにも大きく取りあげられ、あらためて飯沢先生の時代を見通す鋭さを感じた公演でした。

つづいて五月には『時間のない喫茶店』（5／13～21）。作者・斉藤樹実子さんの繊細な感覚が生きた舞台は「現代の雨月物語」と評する言葉もいただき、五千三百余名の皆さまにおいでいただくことができました。

さて六月からは『キッスだけでいいわ』『翼をください』『すみれさんが行く』の三作品で全国巡演中です。特に『翼をください』は六月二十九日(木)神戸労演、子ども劇場おやこ劇場のみなさんとの共催により「神戸復興を願う青少年の集い」として神戸シーガルホールで特別公演を行います。

夏には八月八日、新劇人会議の反核フェスティバルが開催され、四つの小作品が上演される予定で、青年劇場としても積極的に参加しています。

そして九月からは戦後五十年記念『青春の砦』の公演を行います。（9／14～10／4・首都圏定期公演、10～12月、関東、東海、近畿、実行委員会および学校公演）大谷直人さんの原作、劇団の代表瓜生正美の脚本によりますこの作品は、一九八〇年から八七年まで全国で七四七回のロングラン公演を行い、大きな反響を得ました。今回は演出、装置、音響、キャスト、制作も装いを新たに、今日の観客に立ち向かおうと心しています。

（160　東京都新宿区新宿二－九－二〇
問川ビル6F
TEL　〇三－三三五二－六九二二）

劇団やまなみ

◎公演日決まる！　7月23日(日)2時開演

甲府総合市民会館五周年記念事業
'95こうふ演劇祭参加公演
劇団やまなみ創立四十周年記念公演（第一弾）
河野通方　作
「あしたは晴れ」七場
演出・梅津幸三

制作・小谷道雄・土井マチ子・古沢公子・古沢勉／演出助手・鈴木間太／舞監・原のぼる・丸茂富貴子／装置・久保勝／照明・土地まりこ／効果・大竹誠／衣装・梅津まさじ・河野浩子／小道具・守屋笑子／メイク・林トコ

キャスト　野村五郎・牛山昭彦
野村ひかり・川手聖子／野村和平・川手陽介

矢野真由美・坂本英子／富江・村松キミエ
高柳巌・翔創生／大倉基子・深沢アヤコ
谷川医師・雨宮豊／春山婦長・初山紀和子
大木看護婦・中川和子／森沢看護婦・小代田
亜矢子／看護婦・小林友香・望月文佳・榊原
千紗／スナックの客・渡辺利光・大島基治郎
・他

週2回の稽古を六月より3回、月末には日曜日をも加え公演体制発進しました。

六～七人では広い稽古場も今は狭い。ガラクタを片付けて広くしなくては。（文・問）

（400　甲府市青沼一－八－五　梅津方
TEL　〇五五二－三三－九五五六）

劇団未来

劇団未来では、清水邦夫作・寺下　保演出「哄笑（こうしょう）」（二月十四日～十六日、十八日）を終えて、九五年三月二十三日～四月一日、三十五回劇団総会を持ちました。

①劇団創立以来、三十三年続けてきた演劇創造の姿勢にこだわるとともに、新しい創造分野にも切り込んでいくためにも、働く人たちの観察を怠らず、更に鋭く演劇として表出していく努力をすること。

②テーブル稽古・読みあわせの段階で、作品や役の設計図を深く固めていくこと。

③装置・照明・小道具・衣裳などについて、ベストな一つを創りだしたり選びだしたりする作業が創造そのものであるので、その姿勢を更に発展させていくこと。

④スタッフの任務分担と連携をより密にしていくこと。

⑤公演準備態勢に入った時は勿論のこと、日常的活動においても、「ワークスタジオ」への集中をより一層強めること。

⑥劇団未来の演劇創造の拠点「ワークスタジオ」を維持する経費をつくりだしていくこと。

- 劇団費の当月分当月納入をやりぬくこと（できれば、毎月銀行の自動振り落しができるようにすること）。
- 最低月額劇団費を七千円から八千円に値上げすること。
- 滞納団費がある者は、それを克服する計画を出し、それに添って滞納を一掃すること。
- 劇団公演を必ず黒字にすること。

――の基本線に立って、

第四十四回公演（上演作品は現在検討中）
九五年十一月十八日～二十六日（十ステージ）
劇団未来ワークスタジオ

第四十五回公演
九六年五月
府立青少年会館プラネットステーション

劇団未来演劇教室第十六期の開講
――など、当面のスケジュールを決めました。

☆　☆　☆　☆

◉現在劇団員は――

一九九五年七月六日(木)～八日(土)公演の大阪自立演劇連絡会議の七回目の合同公演・楠本幸男作・堀江ひろゆき演出の「海図なき航路」の創造と普及に取り組んでいます。

◉座付作者・和田澄子は、代理母から生まれた青年が結婚式を迎えることを機に、出生の秘密を知り、改めて親子・家族・子孫・血縁を問いなおしていくことを描いた（仮題）「不思議なアルバム」の創作に入っています。六月三日現在、詳細な「あらすじ」が出来あがってきたところです。

何を、どう描いていけば良いのか、不透明な時代です。だからこそ今、創作劇をつくりだし、舞台に上げていくことが、より一層大切だと考えて取り組んでいます。

（536　大阪市城東区成育一－四－二十五
TEL　〇六－九三九－五七七七）

劇団さっぽろ

劇団は、現在、中学校高校公演「知床に吹く風」を持って巡演中です。学校五日制の本格的な実施のもと、特に、中学校が減っており、劇団の財政にも直結する問題です。

十数年ぶりに、附属演劇研究所を開所しました。これは、札幌でフリーの俳優として活躍している金田一仁志氏を所長とし、彼の肝入りで開所したものです。なんと定員二五名をオーバーする三五名近くの応募があり、ほぼ全員を希望どおり入所させました。年齢層もバラエティーに富み、にぎやかに勉強しています。

今年は、例年にもまして、遠隔地での公演が増えそうです。やはり、加盟している日本児童青少年演劇劇団協議会（児演協）の創立二十周年を期して、東京渋谷周辺で七〇劇団の一斉上演があり、劇団も八月三日(木)下北沢本多劇場近くの北沢タウンホールで小学校公演「なら梨とり」を二回上演します。十時三〇分と二時の公演ですが、時間の都合のつかれる方はぜひご覧下さい。また、毎年東北を巡演していた児童演劇協会の地方巡回公演は、作品と時期の関係で、なんと鹿児島県に行くことになりました。ほんとうは道内を中心にしたいのですが。

（063　札幌市西宮の沢3条4－14－8
TEL　〇一一－六六三－六二五九）

劇団名芸

名芸は、4月21～23日、久しぶりのシェイクスピア劇場『真夏の夜の夢』を打ち上げて、現在は、夏恒例の子ども劇場に取り組んでいます。両方合わせて二千人突破が目標です。

南／天白子ども劇場
『ごんぎつね』　原作／新実南吉より
脚本／栗木英章　演出／片野耕治
7月15・16　平針小劇場
9月9・10　南文化小劇場

その間隙をぬって、地元の反核舞台人の集い『幽霊大地へ舞い下りる』（8月30・31日市芸創センター）に作者やスタッフ等で参加し、同時に私の名古屋劇団協議会合同公演『明治転回』（仮題）の準備を、目下のところ栗本が苦戦しつつ、作品完成にぶつかっています。これは、若尾・柘植・岡部という地元の大先達追悼の冠をつけた記念公演でもありますので、是非とも成功させたいと念じております。8月6日がケイコ始めで、上演は11月末、市芸創センターです。多くの方々にご覧いただければ嬉しいです。

劇団員減少が止まらず、辛い気持ちでいましたが、やっと二十代が二人入団して明かるい兆しも見えてきました。夏の総会・ゼミでは、兄弟劇団からいろいろ学びたいと思っています。

（468　名古屋市天白区平針一－一八〇八
TEL　〇五二－八〇三－二九二二）

急な連絡や小包類は左記へ

（457　名古屋市南区汐田町十一－八
TEL　〇五二－八二二－三六九一）

劇団はぐるま

夏やすみファミリー劇場「ピーターパン」の稽古に入っています。しかし、稽古回数はあと二十回。一ヵ月半で本番がやってきます。当然、立ち稽古には入っていますが、各場の返し稽古が精いっぱいで、なかなか通し稽古には入れません（もっとも、これは毎年のことで、通しができるのは、六月末になりそうです）。しかも、大道具はこれから製作に入りますし、ダンスも現在振り移し中、再演なのでオリジナル曲はすでにありますが、コンピューターへの打ち込み作業が残っています。歌の練習もしなくちゃならないし……これから先、稽古日以外の日（火、木、日）にも芝居やダンスの特訓、道具づくりが入ってきて、

休みがどんどんつぶれていくことになります。

◉ピーターパン
岐阜市民会館　七月二一～二三日
七ステージ
垂井町文化会館　七月三十日（移動）
南濃町文化会館　八月六日　（〃）

秋には、野外劇「信長天下をとる」が予定されています。十月二～四日、長良川国際会議場屋上及び前庭において、一般公募の参加者も含め、邦楽、洋楽、日舞、洋舞、そしてはぐるまとの合同公演になります。

（内田　薫）

（500　岐阜市西野町一－十一
TEL　〇五八－二六五－一八五二）

京浜協同劇団

第八十七号の阪神大震災の手記と宮岸泰治さんの文章は興味深く読ませていただきました。新編集体制になって、新しい企画がではじめ、また集団でつくっているという感じがあって、これからが楽しみです。

さて、皆様にご支援いただいた新稽古場が完成し、ようやく柿落とし公演の運びとなりました。六月下旬から七月上旬にかけて十ステージを組みました。演目は岩手ぶどう座の川村光夫さんの作品「がんどり」で、演出は藤井康雄です。稽古場建設費一億六千万円のうち資金カンパは一千六百人（団体は五十）の人々から四千万円余が寄せられましたが、柿落とし公演は、この人たちへの〝ありがとう公演〟として無料招待で行います。そして今秋十月～十一月には同じ作品を有料公演で三ヵ所を上演して回る予定です。

四月には「がんとり」が生まれた地、岩手県の遠野へ劇団員二十一名で現地調査に行き、作者の川村光夫さんをはじめ、ぶどう座の皆さんと初めて交流してきました。また、湯田町の銀河ホールを見学させていただきましたが、すばらしい発想と建物に感激しました。

劇団員の交通事故、山口あきおの逝去、萩坂桃彦さんの他界など辛いことが続きましたが、ようやく立ち上がりつつあるところです。

第三十三期新人（六名）は、ミズノタクジ、二藤あいかの担当で、七月十六日にイヨネスコ作「禿の女歌手」を第二回公演として稽古場で上演する予定です。劇団と新人が大・小二つの稽古場で同時に稽古を続けています。

それでは、八月十九、二十日に宮城県大和町の「まほろばホール」で行われる東会議ゼミで皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。

（211　川崎市幸区古市場二－一〇九
TEL　〇四四－五一一－四九五一）

劇団静芸

◇ただいま「アンネの日記」の公演のまっただなか、5月28日(日)の第21回静岡市文化祭を好評のうちに終わり、6月17、18日のサールナートホールのオープン記念公演にむけて、稽古に取り組んでいる。

5月28日市文化祭での公演終了後、沢山の感想、批評が次々に稽古場に寄せられ、また職場の新聞に全面紹介されたり、ある保険会社では朝礼に劇団員が呼ばれ紹介してくれたりの反響があった。6月のサールナート公演は、6月3日の段階で二日間の席が満席となり、まだまだ観劇希望がある状態でうれしい悲鳴である。サールナートホールは席数が二三〇席であることが残念であるが、ひさしぶりに札止めの公演に意気があがってくる。

◇山静ブロックゼミで昨年、京浜の城谷護さんに「夢を語ろう――生々とした制作を!!」の話を聞き、その話が今回の「アンネの日記」公演の大きな支えとなっている。城谷さんありがとう。

◇「アンネの日記」公演で（アムステルダムの隠れ家修復」のカンパも訴える予定である。

◇稽古場に若々しい人達の声がはねかえるようになり、すこしずつ活気にあふれてきた今日このごろである。（三郎）

（420　静岡市昭府町一－十－三七
TEL　〇五四－三七三－〇六〇四）

劇団夜明け

戦後五十年の今年、中津川でも様々な取り組みが計画され、すでに実施されたもの、これから実施されるもの含めて、全てにかかわっていくことになります。劇団夜明けの力を必ずあてにされ要請されます。自分達の公演に何らかの形で協力してもらっていますし、劇団はそういう地域の人達の運動と共にあるのですから、いくら忙しくてもそこへ出かけ話しあいに参加し、本も書き、稽古、リハーサル、仕込み、本番と一緒に行動するのです。

しかしいつも劇団の活動、公演が本命ですので、一層がんばろうと力を出しきれると実感しています。

来年二月、劇団創立四十年になります。記念公演第一弾として次の公演に今、全力投球中です。

第12回親と子の劇場（№40定期公演）
「11びきのねこ」　井上ひさし作
鈴木弘文演出

7月22日(土)　午後六時三〇分
23日(日)　午前十時　午後一時三〇分
中津川文化会館
9月2日(土)　午後六時三〇分
3日(日)　午後一時三〇分
恵那文化センター
合計五ステージ　全席指定
動員目標三千名の公演です。

（508　岐阜県中津川市北野丸山
TEL　〇五七三－六五－四九三七）

劇団海鳴り

皆さんこんにちは、海鳴りは五月十四日ザ・ジョイント公演、六月四日沼の上小・中学校公演を終了しました。今年は、伊賀山昌三脚本、青木守演出の「結婚の申し込み」を上演しましたが、肩の凝らない喜劇に観客も楽しんでくれたようです。

さて、沼の上小・中学校は、紋別市から約二十キロ、生徒数約五〇人の学校です。過去十五年間、PTAの行事として海鳴りの公演に取り組んでくれています。三日の夜体育館での仕込みを終え、沼の上の元団員の番屋にて交流会宿泊と、これが楽しみで毎年訪問しているのかもしれません。四日の本番は、地域の人、先生、生徒約六〇人が座布団片手に足を運んでくれました。窓の暗幕張りも前日生徒達がやってくれたものです。強風と雀の鳴き声の思わぬ効果音もあり、一メートル先の観客どの舞台空間は、学校公演ならではのものです。生の芝居を観る機会の少ない沼の上に、これからも手弁当で通い続けたいと思っています。

（094　紋別市潮見町二－三－三我孫子正好方
TEL　〇一五八二－三－三二三八）

劇団演劇街

〇知の無知と無知の無〇

『劇団演劇街は創立五周年の創造の集積として、戦後五十年の視点をもって、さまざまなレヴェルで、歴史を学び、社会を考え、自分自身を見つめ直し、そして観客に問いかけていく芝居をつくる。』

年頭に行われた総会において、一九九五年度の方針を右のように決めた。が、方針を決めるにあたって「戦後五十年」に対する問題意識のある者と、その言葉だけで拒否の反応を示す者との間に、目に見えぬ膜があり議論噛み合わず、右のような皆の意見の寄せ集めの方針になる。「戦後五十年」等の言葉に対する拒否、嫌悪の反応は団内にも確実にあり、ポスターチラシに「戦後五十年」を入れてもらってはチケットが売れない、とこぼす団員もいる。芝居をやることと「戦後五十年」云々を結びつけて考えたくないという者もいる。「戦後五十年」を芝居でやるというと、すぐに押しつけがましいプロパガンダの芝居や教育啓蒙的な芝居を連想し、ヘキエキしてしまうのだろう　それも理性というよりは生理的なところで。

個人的には「戦後五十年」のこの機会に歴史や歴史につながる現実の諸課題を勉強して積極的に自分の中に取り入れ、それが芝居づくりに反映されればと考えている。気をつけなければならないのは、先にあげたプロ・教育的な芝居でなく、もっと面白いものをつくるという伝達の手段だろう、中身を別にすれば。

演劇人に、知って知らぬふりは許されるけど、無知によるための拒否・嫌悪感に左右されて（当人はそれに気づいていないことが多い）芝居づくりをしていてはダメだろう。（広島友好）

（753　山口市中園町一－三
やの舞台美術内
TEL　〇八三九－二四－三二六九）

劇団阿修羅

前回87号ではお知らせできませんでしたが今秋、行われるアーサー・ミラー作「みんな我が子」の上演日が次の通りとなりました。九月三日名古屋市教育センター、その後東京に移り五日が下北沢タウンホール、七～九日までが北区赤羽会館、以上五ステージが上演されます。それから客演をしていただく女優・子役の方達が決まりました。

今後は劇団一同、内容ある稽古を積みあげ、公演本番を迎えようと決意も新たにしている現在です。

（157　東京都世田谷区南烏山二－三三－十五　川崎方
TEL　〇三－三三〇九－八六三三）

劇団群馬中芸

地域合同企画公演―草原の奔馬―『ガダ・メイリン』（5月3日から7日、8ステージ、あかぎ未来スタジオ）の公演が終わりました。

この作品は、一九二〇年代の内モンゴルで列強諸国の干渉の中、軍閥・王族に対して武装蜂起した民族的英雄、ガダ・メイリンの物語で、作・中村欽一、演出・ふじたあさや氏です。

この公演は、今日のような政治的経済的な混迷の中にあって、共同して一つの舞台を創造していくことを通して、共通の目的に向かって結びあうことの意味を見つけ出そうとした公演で、制作委員会の呼びかけに応えて、劇団群馬中芸のもの以外はほとんどの人が舞台は初めてという教育・文化関係の人々七〇人余りの人が出演者、合唱隊として参加。昨年十月から稽古を開始し、週一、二回の稽古を重ねてきました。

また、この上演を支えるため、資金の提供（一口一万円）から前売券の普及、当日の劇場運営までにたずさわった三七〇名の制作協力者の人々が結束、一切の公的援助や企業等に頼らず、文字通りみんなの手で創った演劇が実現しました。

期間中、延べ二千人の方々にこの公演を見ていただくことができ、好意的な劇評も寄せられています。

今また、在京モンゴル留学生を招待しての追加公演（6月18日）の稽古に取り組んでいます。

（秋山としひと）

（371-01　群馬県勢多郡富士見村大字赤城山字大河原六二六－四九八

TEL　〇二七－八八－二七〇〇）

劇団銅鑼

昨年9月の成増アクトホールでの「センポ・スギハァラ」（平石耕一・作　山田昭一／平石耕一・演出）公演につづいて、今年も(財)板橋区文化振興財団との共催で、銅鑼3年ぶりの新作「俺たちの甲子園」（石原哲也・作　大峰順二・演出）を成増アクトホールで上演致します。

日程は、次の通りです。

- 9月7日(木)　19時
- 9月8日(金)　14時　19時
- 9月9日(土)　14時　19時
- 9月10日(日)　13時　16時

板橋に根づいた劇団をめざして、6年。着々と成果をあげています。そして、今回の公演成功のために、地元の人びとを巻き込むべく、劇団員が思い思いのアイデアで奮闘中。

また、来年の3月には、新作の上演を予定。是非、御観劇におでかけ下さい。心よりお待ちしております。

（175　東京都板橋区成増五－一－二　米丸ビル

TEL　〇三－五九九七－九四六一）

演劇集団「石ころ」

六月二、三日（三ステージ）深川江戸資料館での公演を終えたところです。

時代劇の二本立てという、予算的にも、興行としても大変な公演でありました。

山本周五郎原作、津田伸脚色の「四人囃し」

藤沢周平作、境野修次脚色の「父と呼べ」、各々、色あいの違った作品だっただけに、二作品に対する観客の評価もまったく二つにわかれました。そこが面白いところでもありました。

次回は十一月十、十一日（於・深川江戸資料館）を予定しておりますが、今のところ出し物は時代劇の創作を予定してはいますが）一月程の間に決める予定です。

（135　東京都江東区森下五－十一－八　荒川ビル・吉川複写工業㈱内　境野修次宛

電話・FAX03－五六〇〇－〇二七一）

（40頁よりつづき）

今日は「俺たちの甲子園」を題材に、多少寄り道しながら、照明家が何を考えるか？　という事で話を進めてきました。どうも御協力あり難うございました。

（文責、横田）

註・専門用語について　あえて解説しなかった――団内で、先パイが直接、教えて欲しかったので。（編集部）

文化を中心に据えた まちづくりを目指して

神戸労演会長　平田　康

神戸をほんまの文化都市にする会が阪神・淡路大震災後に初めて集まりをもったのは、震災後一ヵ月が過ぎた二月十九日のことだった。立ち上がりは遅かったが、しかしそこからは急速に運動は展開した。それぞれの被害状況を確かめ合い、緊急に市に対して要望事項を提出し、力を結集したフェスティバルの開催が準備されていった。これまで何回か企画しながらそれぞれの団体のスケジュールの調整が難しくて、総合的な催しがもてなかったのに、「よそからの文化ボランティアは本当にありがたいが、地元のわれわれが立ち上がるのが神戸の文化復興の第一歩だ」との意気込みが一つとなって燃え上がった。

四月十九日から二十三日の五日間、シーガルホールに約千五百名を集めて、「わわわフェスティバル」は成功した。劇団四紀会は家族劇場として『大工と鬼』『仙女の錦』を上演し、多くの子供たちに喜ばれた。劇団どろは、二本の岸田國士作品によって被災から「立ち上がるきっかけをつかんだ」。神戸青年合唱団は創作曲『がんばろう神戸』を発表し、神戸市役所センター合唱団は和太鼓でステージを盛り上げた。神戸映画サークルは『晩春』を上映した。

全国からの励ましは大きかった。神戸労演のために地人会が悪条件を乗り越えて『薮原検校』を舞台に乗せ、劇団民芸の滝沢修と南風洋子が激励に訪れた。その他、芙二三枝子舞踊団、関西音楽舞踊会議、関西芸術座有志、伊那芸文協の小出太鼓の皆さんが、それぞれに水準の高いパフォーマンスで暖かい激励をしてくれた。

そしてこのフェスティバルの理論的支柱ともいうべきシンポジウムが、「文化による新しいまちづくりを目指して」という題で行われた。この詳細は雑誌『兵庫のペン』五三号に掲載されるが、三人のパネラーの発言は、震災の復興における文化の役割について明確な考え方を提起し、「会」の今後の運動方向に大きな示唆が与えられた。

特に以前から「ほんまの会」の運動に理解を示していた演劇評論家の衛紀生は、こんな時期だからこそ人間と人間との関係をつくる文化の役割が重要で、行政に対して提案能力を持つ「会」が、住民の主体的な合意形成をしていく先頭に立つべきだと激励した。

「会」はいま、震災と文化についての手記を集めるのと、市長に対して「文化施設の復旧」などを要望する署名運動に取り組んでいる。

和田澄子

劇作家
劇団未来

顔

劇団「未来」劇作家 和田澄子を語る

長谷川 伸二

公演の都度、受付席で笑顔で座っている彼女との会話「どう、もうぼちぼちやね……」「急がしいてーそうも言うてられへん、ネタはあるし構想もな、三年に一本くらい創作せな劇団やお客さんに忘れられるしな……」つまり、お澄みさんは劇団「未来」の座付作家であり、MJの劇作家として存在している。

大阪の数少ない地域劇団（適切な表現でないが）「未来」に所属する劇作家和田澄子さんはこれまで約十二本の創作劇を情熱をたぎらせ話題を提供してくれている。

勿論、彼女は劇団創立メンバーの一人でもあり終始作家の面から劇団を支え、信頼されている。この際、若い人達に理解してもらうため劇団と彼女の関係に少し触れておきたい。

昭和三十年代大阪の演劇観賞団体（労演）は観賞、批評活動だけでなく底辺の拡大を図る一環として、職場・地域の演劇サークルに発表出来る場を提供したり、「演劇教室」をも実施した。「未来」はその有志を土台に誕生した、彼女もその一人であった。

彼女は大学の学窓座に俳優として参加していたが、大根であることを自覚したと語っている。小学校の先生だけでは、ほとばしるエネルギーが発散できない。俳優が駄目、劇団には若い女優が多くさんおり出番はなかった。何んとか戯曲を書こうと思った。「暗い虚構」が最初だったと思うが、私の記憶では、部落差別を扱った「川向う」が実質的な旗上げ公演だったろう。それから三十余年、九二年の「わが街ー大阪ひがし」まで人間の差別、平等、民主、平和など生命の尊厳にかゝわる問題を追求した創作を骨太く一貫して書いてきた作品は大半日常使われている言葉で語り、彼女のドラマツルギーの一貫した姿勢であろう。

役者をやっていれば創作の苦悩・苦痛も少なかったかも知れないのに……。医者の主人と二人の子息、病院運営や家事労働で劇作どころでないと思えるが、こういった仕事がストレスの発散、リフレッシュの場だと言っている。劇団の若い役者達には作家先生で恐れられ甚だが謙虚で姐御

肌でない。六十才を過ぎても自分にきびしく、創作意欲は衰えていない。最初の会話に戻るが、仕込んでいる作品の進行状態が推測できる。段々と創作内容が幅広く緻密になってきている。作品に面白さが出てきており、関西でも貴重な劇作家の一人であることは間違ない。来年ぐらいに作品が生れるかも知れない、多くの人が期待している。

六・六

激せず熱くならず、冷静に事を運ぶ人

人形劇団クラルテ
大阪府劇団協議会代表幹事　芳川雅勇

「劇団大阪」が出来た頃からのつきあいだから、もう三十年。堀江氏は新劇団協議会の担当だったので、私が、前回代表幹事をつとめていた七八年、七九年は特に顔を合わせることが多かったように思う。「劇団大阪」のメンバーは、論客ぞろいだが、堀江氏は、いつも決して激せず熱くならず、冷静に、事を運ぶ人であった。ついカーッとして口角泡を飛ばす私など、いつも、まあまあと頭を冷やしてもらってばかり。合同公演、「華やかな綾線」の時は、作者の柴崎卓三氏の台本を巡って、何稿もの書きかえに、かわった。辛抱強く作者と話しあい、説得し、あるいはほめ上げて、上演台本へ持っていく仕事を、一緒につきあっていて、芯の強い人だなあとあらためて感じた思い出がある。市川明氏とコンビをくんでのブレヒトの舞台づくりに見られるように守備範囲を拡げず、ここぞと定めたターゲットに、頑固なまでに、こだわって進むのが、堀江氏のいい所だろう。近年は大きな舞台より、ハイナ・ミュラーの「闘い」や小松幹生の「明日」等にキラリと光る演出の切れの良さが出て来た。

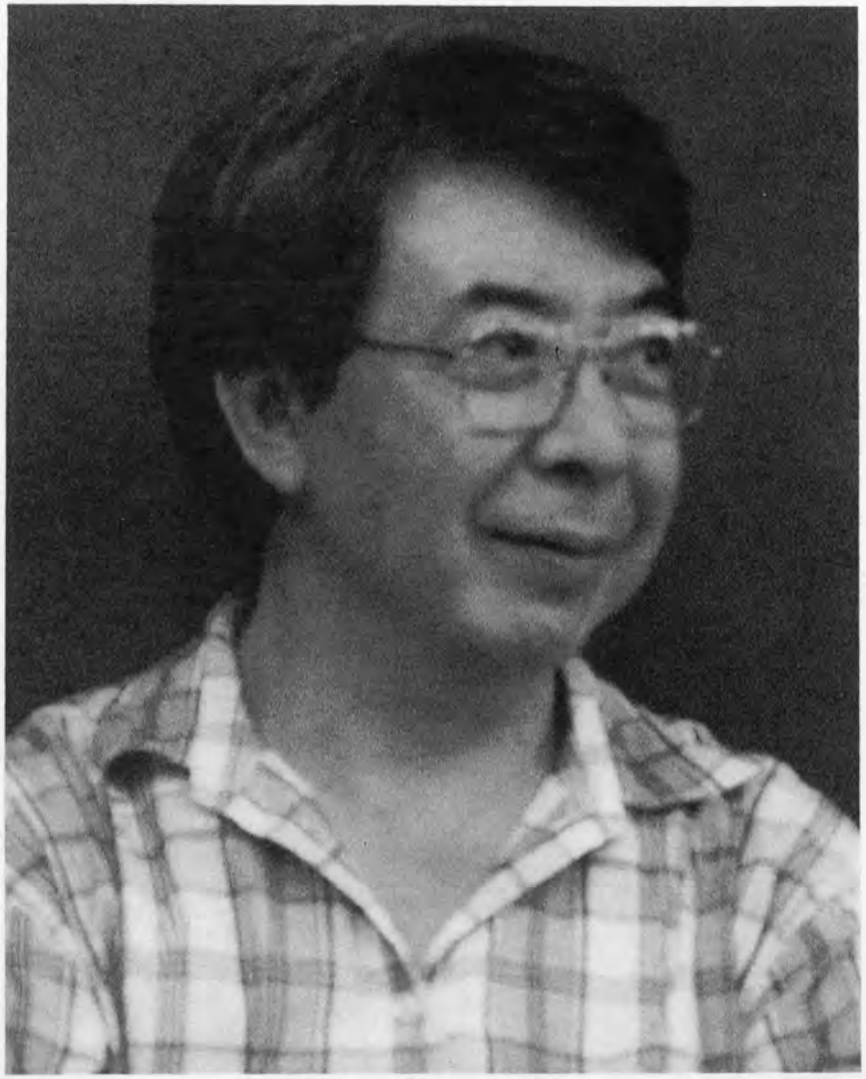
頑健そのもののはずが、九五年一月はじめての検査入院。見舞いに行ってみると病室が、山のような本で一杯、書斉が引越したみたいで驚いたが、「浮島丸」は、その時からスタートしていたのだろう。

好漢、健康第一、自重することも忘れず、進め。

顔

堀江博之

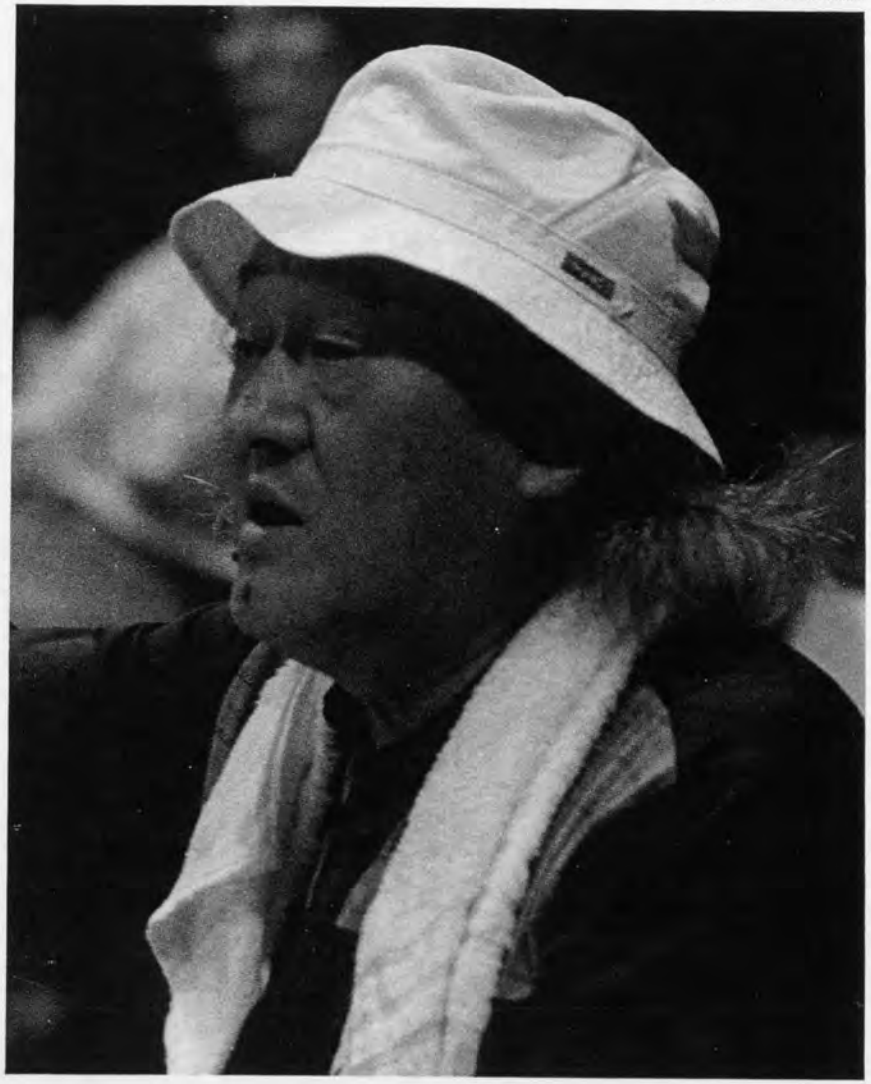
演出家
劇団大阪



顔

中村欽一

劇作家
劇団群馬中芸代表



現代の民話創造の前衛——中村欽一——

群馬文学集団『ちょぼくれ』同人　久保田　穣

中村欽一は時にやさしく、時に鋭く、自らの生地である朝鮮について語りはじめる。その土地は異国であり、当時、軍国日本の侵略した植民地であった。その生地朝鮮について語る中村の表情のなかに劇作家（座付）中村欽一の創造の原点を常に感じるのだ。

第二次世界大戦当時、〈軍国少年〉たり得ず〈愛国少年〉だったと語る中村にとって、敗戦を告げる〈玉音放送〉は意味不明な空白の閃光であり、戦後の彼の生の軌跡と創造活動はこの「巨大な空白感」から出発する。それは非人間的なものへの加担を拒否し、そのことによって自己を解放する創造的営為の継続であった。

中村欽一の眼差しは、はるかな地平に住むひとびとに注がれる。が、しかし、そこは辺境の地ではなく常に地球の、宇宙の中心なのである。そこでゆたかに人間であることを静かに証明している少数のひとびと。アイヌのウウェペケレのなかに生きつづける民衆の抵抗と笑い。弱者のウサギが強いクマをへこますアメリカの黒人民話。さらに在日朝鮮・韓国人の問題をテーマにした『おばあちゃんは宇宙人？』には支配者の側として少年期を過ごした中村の人間的な共生の思いがあふれる。宇宙生物ボン・モュックを主人公にした『ゆけよ空とぶ夏みかん！』では現代社会を諷刺する。

『あかいゆうひにてらされて』（一九八〇年上演）において〈天皇の軍隊〉のもつ非人間性を告発し、慰安婦問題を提起した中村は以後、着実に想像力を自由にはばたかせ、ゆたかに現代の民話を創造しつづける。

地域合同公演『ガダ・メイリン』の成功は長年にわたる中村欽一の地域に根を下ろした地道な演劇創造活動の成果である。

酒を飲み、大声で歌い、談論風発！　作家、役者、演出そして劇団の経営とさまざまな顔を持つ中村欽一のドラマ創造に私は限りない信頼と期待を寄せているのである。

韓国との演劇交流について

劇団すがお　加藤武夫

わたしたち劇団すがおを初め三重県の劇団は、平成三年から毎年韓国の劇団との演劇交流を続けております。つい先頃まで国際交流というのはまったく夢のことの様に思っておりましたが、現実のこととなって続いております。劇団には英語も韓国語も話せる人間はいませんが交流は発展しております。

その実情の一部を紹介したいと思います。

劇団馬山公演「梅花伝」の舞台

ことの始まりは、昨年三重県で開催した国民文化祭にあります。三重県では国民文化祭の誘致をめざして、「アマチュアの文化を広く普及させたい」との考えから昭和六三年度より「三重カルチュアフェスティバル」というイベントを始めました。各分野で年一回のフェスティバルを開催できるようになりました。私たち演劇部門は高校演劇連盟と共同で〝演劇のつどいＩＮ○○〟といった形で毎年フェスティバルを県下各地で行ってきました。この企画に韓国からの劇団の招待も行いましたが、別口で国際交流（招聘・派遣）という枠があり、私たち劇団すがおと上野市民劇場が県下で最初の海外公演として韓国公演を行いました。

招待してくれたのは、ソウルから東北へ車で二時間の春川市の劇団混声と、釜山空港から車で一時間程度西の馬山市の劇団馬山の両劇団でした。両劇団とも精一杯歓迎して

受け入れをしてくれました。

現地では初めての日本の劇団の公演とあって、なるべく理解し易い作品を考え『おこんじょうるり』と『彦市ばなし』を上演しましたが、日本の公演会場と同じように観客は、泣き、笑ってくれました。マスコミもテレビやラジオの取材も受けました。言葉の壁もなんのそのという感じで、交流をし、公演を打ってきました。

劇団混声は純粋なアマチュア劇団ですが、劇団馬山は地方のプロ劇団です。といっても日本の地方都市のプロ劇団と同じで、アルバイターをしたり、放送タレントがいたり、大学生がいたりです。韓国の劇団も、私たち日本の劇団と殆ど同じ悩みをもっています。

劇団馬山は、一九八九年から演劇の裾野を広めようと考え小劇場演劇祝祭を始めました。劇団馬山の稽古場（小劇場ー客席一二〇席）で二～三週間、毎日韓国各地の劇団が上演するという企画です。招待された私たちは仕事の都合であまり長く休暇が取れませんので、例えば金曜日に訪韓、その夜は開会式とささやかなパーティが行われ、翌土曜日は朝から仕込み、午後リハーサル、夜公演、翌日（日曜日）に帰国というのが一番短い日程です。

余裕があれば一日、例えば田舎の名刹の見学等の観光を入れてもらいます。観客は殆どが若者です、日本の芝居の時はお年寄りが少しいる程度。たまたま成人男性の観客がいると演劇関係者だったりで、日本と類似しています。

残念ながら、言葉の壁は大きな障害で、演劇事情の交換も通訳を通しても大変難しいものがあります。セリフ劇の場合は観客も理解しにくいものがあるのも事実です。三重県で公演した『エクウス』や『アイランド』といった作品では観客はさっぱり理解ができなかった様でした。が、『梅花伝』（『赤い陣羽織り』の様な作品）の様に韓国色豊かでコミックな作品は観客にも大いに受けて楽しいもの

初めての韓国訪門
劇団上野市民劇場、劇団すがおの面々

上野市民劇場韓国公演
「おこんじょうるり」の舞台

財政は、桑名市の援助を核にパンフレット広告（この部分が最も大きな財政となる）入場料収入によって賄います。招待する側の負担は「国内滞在経費」ですが、日本の空港に到着してから離日までの経費一切です。公演経費をはじめ劇団員の移動経費、宿泊、食費、パーティ経費、プレゼント等でその時々によって異なりますがおおよそ三五〇万円程度にはなっています。その内パーティ経費が約八〇万円程度かけていますから、これからはこの経費がリストラ対象経費といえます。劇団員の移動はホテルのバスを依頼したり、プレゼントは地元企業の寄付物品（地酒等地元の名産品や、ボランティア団体による工芸品等）にするなどの工夫は凝らしています。韓国でもこれを真似て、昨年のプレゼントは企業寄付によるTシャツ、歯磨、焼酎、ウイスキー等盛沢山でした。

一昨年、韓国の劇団が帰国後幾つもの礼状が届きました。その中の幾人かが「日本人を誤解していた」「あんなに親切にしてもらって」等々感謝の言葉が寄せられました。多分に日本や日本人に対しての誤解があったからで、その彼らは日本語の勉強を始めたとか聞きました。日本と韓国の（世界とのいうべきか）悲しい関係は、戦後五〇年たってますます顕著になっていくのではないかと思います、その中での、ささやかな市民による文化交流はこれからも大切

でした。

ところで桑名市における受入れは、劇団だけでは財政的にも負担が大きいこと、折角の文化の国際交流であるのだから交流の裾野を広くしたい、との考えで「桑名国際文化交流実行委員会」をつくり多くの団体の参加を呼びかけています。在日韓国民団桑名支部が大きな力をかしてくれていますが、国際交流の会、桑名ユネスコの会、合奏団、高校演劇部、合唱団、郷土史家、陶芸家、彫刻家等々が参加しています。桑名市の教育委員会、桑名市文化協会の物心両面の援助も大きな力です。このネットワークは桑名の文化振興の上でも大きな力になりつつあります。

にしていきたいと思います。多くの経費を必要とせず、海外旅行つきの移動公演と思えば韓国公演は実に楽しいものです。ある劇団員は「韓国にこれまで無関心だったが、天気予報でも、ニュースでも韓国のことが気になる」といいます。国際交流は国と国の交流というより、人と人の交流ですから、相手の国の文化を知り、人を知り理解をする中から交流が深まるものだと思います。

今年も、劇団馬山が来日します。これまでの実績が認められ、韓国政府の日本巡回公演の補助金がついたとかで、今から受け入れ準備に余念がありません。

日韓演劇交流の実績

韓国訪問公演

一九九一年九月
春川市・劇団混声創立二〇周年祝賀公演
馬山市・劇団馬山主催／第三回韓国小劇場演劇祝祭出演
劇団上野市民劇場『おこんじょうるり』
劇団すがお『彦市ばなし』

一九九二年一〇月
馬山市・劇団馬山主催／第四回韓国小劇場演劇祝祭出演
劇団すがお・劇団FREE『熊』

一九九三年八月
春川市・劇団混声主催／世界アマチュア演劇祝祭（視察）

一九九三年一〇月
馬山市・劇団馬山主催／第五回韓国小劇場演劇祝祭出演
劇団座名張少女『紫陽花』

一九九四年十一月
馬山市・劇団馬山主催／第六回韓国小劇場演劇祝祭出演
内田流日本舞踊・内田るり茂社中

一九九五年一〇月
馬山市・劇団馬山主催／第七回韓国小劇場演劇祝祭出演

劇団馬山を迎えて交流会
（劇団すがお稽古場にて）

出演劇団未定

三重県への招聘公演

一九九二年八月
桑名市国際文化交流（桑名市）
劇団混声『アイランド』
明知大学校白馬レパートリー劇場『仮面の音』
※ハンガリーチョコナイ劇団も招待
一九九三年一月
三重県カルチュアフェスティバル（上野市・御薗村・名古屋大学）
劇団馬山『エクウス』
一九九四年六月
桑名市国際文化交流・韓国文化祭（桑名市）
劇団馬山『梅花伝』
一九九五年一一月
桑名市国際文化交流・韓国文化祭（桑名市）外
作品未定

昨年（一九九四年）富山で開催された「アジアアマチュア演劇サミット」で、韓国から参加した劇団混声の代表・朴完緒氏の発言内容です。

朴完緒（パク・ワンソン）

A　演劇状況

韓国演劇協会は大きく言って二つに別れており、それはソウル演劇協会と地方演劇協会である。ソウル演劇協会は約五〇の劇団を擁し、平均して年に二回の優れた公演を行っている。各劇団のそれぞれの公演は劇団の事情次第で、公演が大当りをすれば、大きな都市に出ていって公演する。毎年韓国の文化省は演劇公演を審査し、優秀なものを選んでいるが、それは支持してソウル演劇祭に参加する機会を与えるためである。地方演劇協会には八の支部があり、各支部に五から八の劇団が所属している。地方演劇協会には資金、演技者、公演作品の不足といった多くの難問を抱えている。しかし、かれらは独自の地方色豊かな劇を上演している。各地方支部は地方演劇祭を通して代表劇団を選び、それがソウル演劇コンテストに参加する。

春川には、混声、クルレ、太白舞台の三つの演劇グループがある。二四年の長い歴史を持つ混声はカン・ウォン地方演劇協会に所属し、二番目に古い劇団である。毎年、混声は地方色の多い物語を脚本に翻案して、年、二ないし三回の公演をしている。数多い作品の中で、金裕貞の「ボム・ボム」、李孝石作の「麦の花咲くとき」、李夏崙作の

「旌善アリラン」は多くの人たちに愛されている。また混声は八六年のスイス演劇祭、八九年のインド演劇オリンピアド、九〇年のACCT、同じく九〇年の富山国際アマチュア演劇祭、九四年のアイルランド五月演劇祭に参加して、国際的な文化の交流と友情の増大を計ってきた。特に混声は九三年春川国際演劇祭を開いて、世界各地から一五の演劇団の参加を得た。劇団混声には五〇名の団員がいて、つつましくやっている。毎日、仕事を終わった後に集まって、劇を論じ、公演の練習をしている。

「クルレ」劇団のメンバーの多くは春川教育短大を卒業した教師で、二十年の歴史を持ち、しばしば、地方公演の巡業に出ている。彼らは児童たちとティンエイジャーのための公演をする。太白舞台のメンバーの多くは青年で、情熱に溢れ、多くの励ましを受けている。

春川の三劇団は春川を文化と芸術の中心、とりわけ演劇の中心とするべく全力を注いでいる。ワークショップ、シンポジウム、さらには運動会を開いて、互いに励まし合ったり、劇について論じたりしている。

高い山と澄んだ水に恵まれ、自然の美しさで広く知られた春川では、春川人形劇大会、韓国マイム祭が毎年、又三年に一度開かれている。

韓国の演劇の状況に就いて紹介する機会を得て、嬉しく思っている。

B　課題

吾が劇団混声が当面している困難について話します。財政的困難、優れた演技者の欠乏、上演作品の不足など、多くの問題はあるが、私からみて、最大のものは、ほとんどの劇団がお金に苦しんでいるように、財政的な困難である。

私たちは年間三回公演するようにとされているが、一度は少なくとも、江原道または春川市などの当局の庇護の下に舞台に掛けることはできるが、定期公演以外は、資金の枯渇で、シンポジウムとワークショップだけでなく、他の公演をすることがきわめて困難である。劇団の代表は資金の調達にひどく忙しい目にあっている。

加えて、演技者の不足も大問題で、多くの若い連中が芝居に興味があって、劇団「混声」に入って来るが、訓練の途中で練習の苦しさを越えられないものが多い。それに、ほとんどの者が職業に就いていて、普通仕事が終わってから公演の練習をし、上演作品を論じたりしている。それで、みんなが集まるのが難しい。さらに、古いメンバーの中に仕事の場所が変わって、別な都市に転居する人がいる。演出がいつも、少ないメンバーの中で適切な配役を選ぶのに苦労している。

上に述べた通り、劇団を動かすのに多くの問題があるが、一番は財政問題だと私は思う。

——〈ロシア演劇レポート 3〉——
二つの『堂々たるコキュ』
——付、日本とロシア演劇 III——

桜井郁子

小山内薫が二回目にモスクワを訪れたのは一九二七年、ロシア革命十周年記念祭に招かれてのことだった。モスクワ芸術座のスタニスラフスキー達との再会を果たし、『装甲列車14—69』や『フィガロの結婚』などを見、メイエルホリド劇場の『吼えろ支那』や『検察官』を見た他に、タイーロフのカーメルヌイ劇場、ミハイル・チェーホフの活躍する第二芸術座を訪れるやら、労働者劇場シーニャヤ・ブルーザ（青服）を追っかけるなど、第一次訪ソに比べてはるかに幅ひろい見聞をして帰国した。しかしその見聞がその後の築地小劇場に十分活かされたとは言い兼ねるようだ。これについては後で述べるとして、この一九二七年がソビエト演劇界にとって、一転換点であったことは言っておかねばならないだろう。

革命十周年に当って、現代を描け、自国の作品を上演すべしという課題が各劇場に与えられ、先きに書いた『装甲列車14—69』など新進作家の作品は生まれたが、やがてテーマ主義、リアリズムに収斂させられ、他は認められなくなる時代の幕開けとなった年である。といっても28年のミハイル・チェーホフの亡命、30年代の社会主義リアリズム定式化には未だ間があり、自由な諸活動はまだあった。とりわけ22年の『寛大なコキュ』に始まり、『逆立つ大地』23年、『森林』24年、『委任状』25年、『検察官』26年と数々の舞台を送り出し、モスクワで圧倒的な人気を集めていたメイエルホリドの周辺には騒然たる雰囲気があった。彼には初期の頃から賞讃と非難攻撃の声が拮抗して与えられていたが、いれもの（劇場や舞台）演者（弟子たち）の制約や、当局との衝突で、いささか陰りの見えはじめた頃でもある。とはいえ、メイエルホリドの演劇活動は作風も主張も変転激しく、実際の舞台がどんなものであったかは、読者の関心があるところだが（筆者自身の関心も）分かり難い。ロシア本国でも没後五十年に当って明らかにされた記録や証言、彼自身の発言・書簡と研究論文を収めた2巻（92年刊行）と『20年代、30年代の稽古日記』2巻（93年刊行）が出たばかりで、まだまだ検証中というところである。

さて築地小劇場は小山内の訪ソ前、既に経済は破綻寸前、組織改編や移転改築問題にも迫られていた。一方、日本の社会も演劇活動の自由な羽搏きを許す状況になかった。劇場の上演台本の殆んどが当局の検閲でずたずたにされる一方、プロレタリア演劇運動が盛んになって外から揺さぶりをかけられていた。

訪ソ後、健康を害していた小山内が、28年12月死去するや、内外の問題に押し潰される形で築地小劇場は分裂してしまった。新築地座の仲間と共に去った土方与志が、すっかり様変わりをしたソビエトを再び訪れたのは33年のことだが、ここから後は次号にしよう。

5月半ばから6月10日までモスクワやサンクト・ペテルブルグを訪れて16の芝居を見てきた。収獲も多かったが、とりあえず三つくらいの芝居に限って書いてみたい。

まずマルク・ロゾーフスキー劇団の『ある馬の物語』「演劇生活」という月刊誌がある。出版事情の悪いロシアで比較的順調に発行されているが、94年11・12月号がロゾーフスキー特集になった。この誌面で、私が出会った以前の彼の過去、今や輝かしいとも言える彼の功績が明らかになっている。そもそも彼の名を知ったのは70年代半ば、忽然として現われた名作『ある馬の物語』の脚色者としてである。ロシア文学の大家レフ・トルストイの小説『ホルストメール』を劇化したもの。駿足の名馬ホルストメールは斑に生まれついたが故に数奇な一生を辿る、その馬の一生を半ばミュージカル仕立てでトルストイの主張もきっちり折り込んで作られた、70年間のソ連時代でも傑作に数えられる戯曲の一つである。83年と88年二度来演したボリショイ・ドラマ劇場の舞台でも人気を集めたが、もう七年た

L・トルストイ原作『ある馬の物語』
M・ロゾーフスキー演出舞台より

ってしまった。実はそのドラマ劇場の演出も、あそこに盛りこまれたメロディーの数々もロゾーフスキーの手になる事は後で知った。彼は自宅に招いて、私の前で歌ってくれたが、歌の末尾がひひーんという馬のいななきで終わるカデンツァなどは、舞台でも聞けない傑作だった。

さて彼の経歴だが、今は伝説となってしまった国立モスクワ大学学生劇団「ナーシ・ドム（我等が家）」の創始者。歯に布きせぬ前衛諷刺劇で心ある人びとに支持される一方、当局の弾圧に会い、やがて解散させられる。雌伏の期間はテレビや司会業で稼ぎ、ペレストロイカの直前には早くもスポンサーを見つけて、団員を公募し劇団を組織した。演劇教育を行う傍ら演出家・座付作者として『ドクター・チェーホフ』『哀れなリーザ』など上演。80年代末には公けの援助を当てにしない劇団としてロシアでも最初に名乗りを挙げた。八〇席と三五〇席の二つのホールを劇団員の手で作りあげ、今十周年を迎える。近年モスクワ芸術座をとび出したS・デスニーツキーを迎えて、トゥランドット賞に輝く『ワーニャ伯父さん』を発表した。レパートリーは既に30を超え、経営上二つのホールをフル回転させている。そんなロゾーフスキーの過去と現在が、彼の論文も混えて特集号になった。ちょっと長くなったけれど、一人の演劇人の例として許して頂こう。

今回改めてデスニーツキー主演の『ある馬の物語』を見て戯曲の良さを再確認した。デスニーツキーの演技は抑制が利いていて、ボリショイ・ドラマのレーベジェフ程の力強さはないが、せん細で告発の響きが余計胸にこたえる。相手の恋人役や馬群を演じる俳優が、若くて溌剌としていて、セクシュアルなので一層楽しくなる。第二幕、ホルストメールと人間の公爵が対比させられる場が入念に仕上げられて分かりやすく、私は思わず「ボリショイを超えた」と呟いてしまった。勿論ボリショイ・ドラマのレーベジェフは歴史に残る名演技の名舞台なのだが……。

何年ぶりだろうか、スタジオ劇団「人間」を訪れたのは。ペレストロイカ、自由化で躍り出た小劇団の中でも、最も水準の高い演出と演技で目を見張らせたこの劇団で、ムロージェク作『亡命者』、女流ベトルシェーフスカヤ作『チンザーノ』、ゴーゴリ原作『パンノチカ』がそれぞれに競っていた。これらを演出したM・モケーエフ、R・コーザク、S・ジェノヴァチは今は押しも押されぬ若手として活躍中。S・ジェノヴァチは最近ドストエフスキー原作『白痴』をドラマ化、三部作各三時間を制作中で、第二部までを仕上げた。これらの若い演出家を育てあげ、世に送り出したのが「人間」の主、ロシコバン女史だが、彼女は相変わらず若々しく精力的だった。

彼女演出の『夜警』はなかなか一筋縄ではいかない作品

ボナベントゥラ作『夜警』
L・ロシコバン演出舞台より

だ。原作者はボナベントゥラ。

「一八〇四年刊行されたドイツのグロテスク・ロマン主義の代表作／ただし作者については異説紛々／近年バフチンらの言及で注目され」云々と百科辞典にあるが、劇場のプログラムによると、哲学者で弁証法学者のフリードリヒ・シェリングの作と推定されており、同時代の小説家ホフマンの「あなた方は気付いていませんか、あなた方みんなガラス瓶の中に閉じこめられ、歩くどころか、身動きも出来ないのを」という言葉が添えられている。ロシコバン脚色・演出の舞台は、ピエロ、娘、作家、ディレタントの四人を登場人物とし、六夜にわたる夢幻物語になっている。せりふよりも身体表現とリズムを重視し、マリオネット（操り）人形をも使って、人間の愛憎や存在そのものの根源を問うという態のもの……と言っても何やら分からない。俳優の身体を極限まで酷使して表現するアラベスク模様、最後には七本の槍が天井から降ってくるというおまけまであり、緊張を強いられるが爽快感のある一時間半だった。

本文冒頭で触れたメイエルホリド関連の二つを紹介しておこう。一つは新聞報道で知ったエピソード的な事件。スエーデンの作家L・クレベルク作『魔術師の弟子たち』が、95年4月14日俳優会館で上演された。これは60年前の35年4月14日、中国の名優メイ・ラン・ファンをロシアに迎えた際のある会議を下敷きにした「仮空の会議速記録」である。壇上にずらりと列んだ今日のメートルたち（俳優・作家・演出家）が、過去のメートルを演じるというので、会場に詰めかけた聴衆をうならせ、楽しませた。登場人物はスタニスラフスキー、ネミロヴィチ・ダンチェンコ、メイエルホリド、タイーロフなどから当局の代表と、ゴートン・クレーグ、ピスカトール、ブレヒトまで。演ずるのはエフレーモフ、タバコフなど劇界のお歴々。ネミロヴィチ役のタバコフが植民地中国について恐ろしげな事をしゃべり、エフレーモフが社会主義リアリズムについて何やら呟くと、メイエルホリド役のセルゲイ・ユルスキイが滔々と反駁の論を展開して満場の喝采を博したと言う。一回限りの上演にしては惜しい見物だったようだ。但し、壇上の人

びとがあの頃にも今のように振る舞えたかどうか、誰もが過去と今、メートルたちとその弟子たちに思いを馳せた、と記者は書いている。

もう一つは舞台。現代の巨匠ビョートル・フォメンコ演出のF・クロムランク作『堂々たるコキュ』である。22年のメイエルホリド上演は、完成された構成主義舞台とビオメハニカ（生力学的俳優訓練法）の試み、伝説的な俳優トリオ、イリ＝バ＝ザイ（男優のイリインとザイツェフ、女優のババノワの三人）で歴史に残る傑作だが、フォメンコのは原作戯曲そのものに迫り、これが現代にも通じる価値ある作品であることを見せた。

村の教養人ブリューノは自分の妻ステラを愛する余り、

F・クロムランク『堂々たるコキュ』
P・フォメンコ演出舞台より

嫉妬に気が狂ってしまう。初めは彼女の愛情を信じなかった、それから彼女の裏切りを信じられず、ついには自分自身を、自分の感情、自分の眼を信じることをやめてしまう。周りのあらゆる男性と妻が寝るように仕向け、自分がコキュ（寝取られ男）になれば、彼女の愛を信じられるようになると思ってしまう。妻のステラはブリューノを心から愛していたが、最後には、彼女の窮境につけ入ることをしない唯一人の青年の許へ走り去る。この瞬間まで妻の家出はブリューノにとってさほど重要ではなかった、それほどにも彼は疑い、苦しみ、堕ちてしまっていた……。この物語を、メイエルホリドはファルス、実験劇要素とのみ取り、ブリューノを嘲笑い、ステラに同情した形で、自らの20年代デビュー作品を飾った。彼にとってクロムランクの作品はただの手段に過ぎなかった。それかあらぬか、メイエルホリドは『堂々たる』を『寛大な』と題していた。

フォメンコの上演ではブリューノの内面世界が追求される。幻影となった愛、見せかけの生活に代わる永遠の探求に己れを任せる男を描いて、深い悲劇空間の中で、ファルスを呼び戻している。サチリコン劇場の小舞台、百人余の観客が取り巻く中央に巨大な樽様の台が据えられ、蓋をずらすと下は井戸になったり、納戸になったり。客席頭上のバルコニーと隅の段梯子、縄梯子、扉は、主人公たちの感情の高ぶりにあわせて駆け上り、ぶら下がり、跳び、走り抜ける空間となる。ダイナミックな行動と共に作られるミザンスツェーナ（舞台上の配置）の美しさ。適確な照明。民族色のにおう簡潔な衣裳。表情豊かな空間処理と祝祭性はフォメンコの真骨頂の一つであろうか。

ブリューノを演じたライキンは初め若々しく人生に充ち足りており、詩を朗読する時は魅惑的。それが目の前で消耗し、年老い、眼鏡も鼻にずり落ちてしまう。予想される敗北にも関わらず人にも自分にも休息を与えない男、死刑執行人でもあり犠牲者でもある、二つの顔をもつ男を演じる。彼は演出家の手によって真の演技者になったと評せられている。この作品、94年の「黄金のマスク」賞と「クリスタル・トゥランドット」賞をもらい、演出家は演出賞ライキンは主演賞を、ステラ役の女優はデビュー賞をもらった。

劇評

関西芸術座『虫』

神戸学院女子短大教授　阿部好一

藤本義一作、道井直次演出「虫」（五月一八―二〇日大阪エルシアター）は一九五七年の初演以来、今度が三演目。主役の落語家円丸を一貫して山村弘三が演じてきた。三八年ぶりの上演といい、初演と同じ主演者といい、珍しい記録である。

作品執筆当時の作者の年齢が二二歳というのは驚異的な若さだが、舞台を見るとその若さよりも老成ぶりが目につく。大阪の下町に住む芸人たちの生態を描くのだが、若い芸人よりも、芸の虫にとりつかれた年配の芸人への同情的な描写にそれが感じられる。戦後の混乱期がまだおさまっていない時代だったはずだが、そういう時代のなかで作者は失われてゆく伝統芸への哀惜をつづった。見るべきものをきちんと見ていたのである。

円丸の喉の痛みが喉頭癌によるものだと芸能社の牧林（溝田繁）がひそかに伝えてくる。「円丸に分かったらいかんから、人に言うな」と言いながら、芸人たちはその噂を次々と他人にしゃべって回る。同情しながらも所詮は他人事と見る人間心理が巧みに描かれ、客席にも笑いが起こる。もっとも、ここへ来るまで筋の展開が乏しくて芝居がなかなか始まらない印象もある。昔のリアリズムの新劇はこんなふうに腰をじっくり落ち着けてまず環境描写から始めたものだ。いま見ると少々まだるっこしいが。

寄席の支配人（亀井賢二）が新しい芸人のスカウトに来る。彼のテストを受けられるのは二組。若い漫才コンビ（和泉敬子、水城なおき）はパスし、円丸は芸が古いと言われて拒否される。錯乱した円丸は精神料の病院に送られる。当たりクジをひそかに円丸にゆずってテストを受けさせた浪曲師弓蔵（山本弘）の心も苦しい。

公演パンフレットに作者が「出来ることなら戯曲の一言一句も変えないで再演していただきたいのだが、そういうわけにもいかない。これが最も苦痛である」と書いている。当然テキストレジーがあったのだろう。初演台本と比べてみないと正確には言えないことだが、削ったあとの空白が十分に埋めつくされていないような印象が残った。たとえば芸人たちの生態が意外に密度が薄く、ストーリーに十分にからんでいない。

演技もじっくり溜めたり、解き放ったりして、舞台を大きくうねらせて欲しい。多数の登場人物の織りなす波動が、ときにさざ波を立て、ときに高揚して客席を巻きこんでゆくような、ねばっこさとうま味が欲しいものである。だれもが単刀直入、いきなり怒ったり泣いたりしているように見えた。そんな中で、弓蔵の妻役の藤山喜子が終始抑えた演技で、逆に引き立った。

舞台下手寄りに二階への階段があるのだが、これが少し長すぎて、人物の上がり下りのたびにヒヤヒヤした。（大阪労演例会。）

（「虫」藤本義一作　道井直次演出）

仙台小劇場『生きのさやぎを』

劇団だいこん座　高橋　寛

四月二十二日、二十三日に大和町まほろばホール柿落し公演として仙台小劇場の「生きのさやぎを」が行われた。

仙台から車で五〇分ほどのまほろばホールはゆったりとした駐車場、大ホール（七〇〇席）、小ホール（一五〇席）会議室、調理実習室、図書室、それに佐藤忠良ギャラリーまであるという。なんともうらやましい施設である。尚、今年八月の全リ演東会議ゼミナールはこの会場で行う予定である。

さて、「生きのさやぎを」はこの大和町出身の歌人、原阿佐緒の物語である。

大正八年、阿佐緒は前夫の子ども二人をつれて実家に帰っていた。もう結婚はこりごりだと思っていた阿佐緒に、アララギ派の歌会に出席していた東北帝大教授の石原純がすっかり魅了されて、妻子がありながら執拗に彼女に求愛する。東京の親友のところへ逃れた阿佐緒に石原はおしかけ「君と一緒になれないなら死んでしまう」とせまり、彼女は石原の愛を受け入れる。

新聞、雑誌は「悪女阿佐緒が石原博士を誘惑した」と一斉に不倫の恋を書きたてた。石原は妻と五人の子を捨て、

阿佐緒は母と二人の子を捨て、二人は絵を描き歌を作り、幸せそうに見えたのだが……

――歴史上の実在の人物をモデルにした作品は、写真や歌や文が残っていれば、どうしてもそれにこだわらざるをえず、むずかしいがよく調べ、その真実にせまろうとしている。阿佐緒役は新人ながらよく健闘している。石原の求婚をことわりながらもどこかひかれるものがあったのではないか。すぐれた歌人である阿佐緒の歌をもう少し紹介してほしかった。村人たちをベテランで固め、おたつ役の三浦めぐみ、青山役の野々下孝が良い。プロローグとエピローグの阿佐緒の墓への案内の場は作者の地元への気くばりが生きている。

広島月曜会『真夜中の旅人』

劇団どろ　合田幸平

「今を描く」……演劇を志すものならだれもがそれに挑戦したいと願っている課題だ。しかし、ブレヒトの「今日の世界は演劇によって表現し得るか？」と言うほとんど絶望的な問題提起を思い起こすまでもなく、この魅惑的な課題の達成は生易しいものではない。現実とともに我々自身が日々流され、変貌しつつある事がそのことを一層困難にしている。

この二月、この課題に果敢に挑んだ試みがあった。広島月曜会『真夜中の旅人』だ。作は武田隆良さん、演出は向田孝典さん。もともとは集団創作のつもりだったが難航、結局彼がまとめることになったそうだ。

二年ほど前、劇団員の転職の続出で公演不能に陥ったのがきっかけで、各自の職場状況を語り合い、それが発展していろいろな職業の人の話を聞くうちに今回の創作につながったということだが、それが難産だったことは容易に想像できた。

劇はオムニバスになっている。第一話は、印刷会社の営業マンと緊急に印刷物を届ける運転手の話。ポケットベルなど持たされ仕事に追いまくられる労働者の悲哀が演じられる。向田君と木村君の人柄、個性がうまく生かされ、掛け合いのとぼけた味が出ていて面白い。プロには出せない働く現場のリアリティも感じさせる。ほとんど何もない空間でなかなか達者なマイムだけで見せるという趣向。

第二話は「蒸発した青年」の上司のところへその母親が来て話をしているところから始まる。自分を見失った現代社会での若者の問題というか、母親の期待とすれ違う子供たちが描かれている。受験地獄や競争社会の中で悩める若者とそれを理解し得ない大人たちの悲劇といった深刻さ、これはひとごととは思えぬ身につまされる芝居だった。青年の妹を演じた現役の高校生の女優さんの演技がとても鮮

烈だった。

第三話は「配転」。会社の業績不振のため配送係から営業に配転を命じられる労働者と部長の会話。時々入ってくる秘書の女性がとぼけていておかしい。コンピューターの「消去」のように簡単に不要になった労働者をゴミバコに捨てるような会社の非人間的やりくちがこれはコミックに描かれる。岩井さんのあの容貌とまじめさが人の良さそうでこずるい管理職をリアリティ豊かに醸し出す。

第四話は「マリアへの手紙」これも現代社会で悩める子どもが描かれている。万引きで捕まった少女、その担任と母親の会話。少女は精神的ストレスから過食症に陥っている。ここでも大人の理解のはるか向こうをさまよえる子ども達の病める魂がショッキングに描き出される。ここでも少女を演じた中学三年生の演技がとても印象深かった。

劇は全体として、繁栄の中で病める人間の魂、特に子どもに現れた歪みを鋭く表現することで非常に重たい現代の課題を突きつけることに成功していた。

演劇集団石るつ『父（ちゃん）と呼べ』『四人囃し』

演劇集団土くれ　石塚幹雄

演劇集団「石るつ」の専売特許となった感のある「江戸芝居」、題材を活動の拠点である江東にとり、客演者の安定した力演によって、上演をはじめて？年目にして「型になってきたな」という感がある。いよいよ原作のもつ人間のヒダをどう客席へ届けるかが課題となってきている。

六月公演、山本周五郎原作、津田伸脚色の「四人囃し」、藤沢周平原作、境野修次脚色の「父（ちゃん）と呼べ」について、いささか印象批評の感を免れないが記したい。

「四人囃し」は、悪ぶる正太郎（井上義明）に純粋な輝きを見た酒場の女、おつま（いとうエリコ）が、二人で生活をやり直してみようと旅立つ決意をする物語。上演時間の大半を二人の会話だけで展開する静的な舞台。それ故に人物の心理的な起承転結がくっきりと見えなければ、山周の世界は客席には届かない。酔いに身をゆだねながら、自分の心情を語る正太郎と、それを包み込むおつまの息がひとつになってこそ、旅立ちへのラストシーンが生きてくる。動きがないだけに微妙な台詞表現が要求される。二人の間の空気に色気が感じられるまでには至っていない。筆者の作者、作品への思い入れが強すぎるからだけではなさそうだ。

「父（ちゃん）と呼べ」は、気っ風の良いたたき大工の徳五郎を平腰忍が、多少の力味を感じさせながらも熱演。その妻お吉を、いつもながら歯切れの良い台詞まわしで疋田あき子が好演した。

故あって徳五郎がひきとった子、虎吉（疋田陽介）の閉された心を、父（ちゃん）と呼ぶまでにほぐした。やがて、商家の後

添えの道を捨て、「二人で懸命に生きたい」と現われた母、おふみとともに虎吉は去っていく。残された徳五郎がお吉に、「父と呼んでみてくれ」とたのみ、さまざまな想いのなかでお吉が「父」と呼びかけるラストシーンにこの作品の集約点がある。ここに至る前半部分の展開に煩雑さが感じられる。また、虎吉が母と行き、お吉もそれを受け入れざるを得なくなるおふみの描き方や、演技、表現に厚味が欲しい。

二つの作品は、共通して「美しい（外形のみならず）女性」が描かれている。それが美しいことによって、舞台表現やテーマの奥行きがかもしだされる。同じように装置、衣裳、カツラ、小道具、立ち居振舞いなどに対する吟味は欠かせない。演出上の大胆な具象化は可であるが、中途半端はどうしても舞台をザラつかせてしまう。石るつ独特の「江戸芝居」を期待したい。

劇団一九八〇『蚤とり侍』

演劇集団石るつ　境野　修次

小松重男原作『蚤とり侍』を一切脚色せず、藤田傳による演出で舞台化する「ハチマル版・表現の試み」。

越後長岡藩勘定書き役、小林寛之進は、藩校始まって以来の秀才と囃さわるほど学問ができ、剣術も並以上。ところが、主君の勘気に触れ、「猫の蚤とりになって無様に暮せ！」と藩を追放、あれよあれよという間に「猫の蚤とり屋」に身をやつす。『猫の蚤とり屋』とは、またの名を『密夫屋』と言い、実態は、なんと女性客目当ての淫売夫』であった。寛之進は、「猫の蚤とり屋」の親方の早合点から親方の家を追い出され、死に直面するが、再び密夫屋に。

『蚤とり侍』は、貧しい若後家や亭主に相手にされない古女房にとって生きる証しを立ててくれる貴重な存在になった、まァ、江戸庶民の女房たちは出来損ないの亭主だけが男じゃない、いばったり、浮気したら私にも男がいると言えたのだ。が、田沼意次から松平定信になると、取り締りが厳しく、寛之進は抵抗するものの捕らえられ、長岡藩につれていかれる。一年后、江戸で姿を消した「蚤とり屋」が長岡城下に現われ、男どもの身勝手を抑えながら女たちの幸せを護っていた。――

民衆のしたたかな生の営みが笑いと風刺を混じえてコミカルに描かれて、すがすがしく感じられた舞台だ。装置はない、周囲は黒幕、二重が二段重ねであるだけ、役者は登場しない時は、上手、下手の二重の脇に並ぶ、十五人の役者は黒衣、すべて身体的行動で表現する、音響も全員で三味線。荷車にもなり、松葉絵にもなる。板ベイすら役者が並んでつくる。小説どうり語るが、うまくはないが、テンポあり、力がある。まさに芝居は役者の切れのいい行動だ。

天神町一番地　広島・あの頃・消えた町

作・楠本幸男

第一幕

（プロローグ）

地獄まで轟くような爆発音とともにどん帳があがる

タイプライターの音とともに、スクリーンに次の文字が打ち出される。

「赤ん坊は申し分なく生まれた。」

黒いマントの紳士　一九四五年七月十六日、ニューメキシコ州アラモゴルドの砂漠地帯で、史上初の原爆実験が行われた。

マンハッタン計画と呼ばれたこの史上初の原爆開発計画は、二十億ドルの巨費を消費し、五十四万人の労働者と、世界中の科学者の頭脳と技術を結集して実行されたのである。

四百キロにわたって天空を彩った閃光は、爆心地に無数の太陽がきらめいたかのように輝きわたった。濃い紫とオレンジ色の光で縁取られた巨大な火の球が、一マイルもの幅で広がっていった。それはまさしく、この地上に、原子の火、太陽が突然出現した瞬間だった。大地は震え、熱風が大波のようにほとばしった。白い煙が大きな柱となって天空に突き上がり、やがて一万二千メートルの上空にまできのこ型に広がった。

実験は成功した。原子の扉は開かれたのだ。

その頃、イギリスの首相チャーチルはベルリン郊外のポツダムで、トルーマン大統領、スターリンらと日本の降伏問題をめぐって協議していた。七月十七日、チャーチルは宿舎で、原子爆弾の実験成功を伝える一枚のメモを受け取った。「赤ん坊は申し分なく生まれた」

（第一場）

舞台全体が明るくなり、天神町が現れる。

舞台奥は元安川の堤防。中央に路地があり、上手には二階建ての旅館「天城屋」。その右には、公設市場があるという設定である。したがって、天城屋の前も、人通りが多い。

下手には、「カフェ・テンジン」、路地に沿ってその向こう側に、世界シネマの裏口があり、さらに奥には「昭和写真館」がある。「カフェ・テンジン」の角には「占い」の台と看板が掲げられてある。

天神町の夏祭りの風景である。しかし舞台の人々は静止したままである。しばらくして、堤防の向こうから、占い師天明がやってくる。

天明　私はこの辺りで占いをやっている、天明と申すものじゃ。当たるも八掛、当たらぬのも八掛と人は言うが、人間とて限りある一つの生命に過ぎぬ。人は満ち潮とともに生まれ、引き潮とともにこの世を去っていく。生命の誕生と死はすなわち、寄せては返し寄せては返す波のようなものじゃ。生まれた星の下に刻まれた人の運勢を占うのがわしらの仕事。

今日は満月の夜じゃ。わしがこのようなたわごとを申している瞬間、瞬間にもこの地球上には無数の生命が誕生しておる。はてさて、それらの生命は幸せの星のもとに生まれた命か、それとも不幸な命なのか、

幸せを呼ぶ命なのか、はたまた、悪魔の子であるのか……楽士さん、音楽を始めて下され。みなさん方もじっと止まったままでは肩が凝るじゃろう。物語を始めて下され。科学の炎によって炙られた人々の物語を。

川本が一礼し、満月の近くでバイオリンを弾き始める。曲は叙情的な「天神町一番地」のメロディーである。バイオリンが始まると同時に人々が動き始め、活気ある天神町が再現される。

スライド「一九三九年（昭和十四年）夏」
七月。夜。
天神町界隈
上手の旅館、天城屋は、宿泊客でにぎわっている。
人力車が到着し、芸者たちが入っていく。
占い師天明の前も何人かの人が通りかかるが、素通りしていく。

天明　（一人の男が通りがかるのを見て）もし、あなた。
男　ええ？
天明　はい、あなたですよ。
男　何じゃ。
天明　最近、何か、気に病んでいることは、ござらんかな。
男　別に、ないが。なんでじゃ。
天明　だとええんじゃが、いや、ちょっと、そちらの人相に、気になる相がでておってな。
男　気になる相？　どういう相だ、言うてくれ。
天明　いや、別に心配しておらんのならかまわん。ちょっと気になっただけじゃから。
男　そう言われると余計気になる。言うてくれ。どんな相がでてるんじゃ。
天明　うむ。見料は、前金で、三十銭になるが、よろしいかな。
男、財布から金を出し、払う。
天明、男の手相を見る。

（カフェー・テンジン）
店にはピアノが置かれてある。常頭はコーヒーを飲んでいる。
千菊が入ってくる。

ボーイ　いらっしゃいませ。
ボーイが水を運んでくる
千菊　親父さん、ビールくれ。
ボーイ　ビールいっちょう。
正光　へーい。
千菊　……ああ、むせる、むせる。一雨きてくれればええがのう。雨は降らんし、風も吹かん。せっかく風呂へ入ってさっぱりしたのに、台無しじゃ。梅湯の朝風呂はもうやっとらんのか。
正光　軍の命令で、去年から朝風呂はどこも中止じゃ。石炭の節約じゃいうてのう。
千菊　朝風呂がなくなったら、一番困るのは芸者衆じゃ。軍都広島が野暮なことするのう。軍の幹部も芸者衆には世話になっとるちゅうのに。
正光　しっ！　壁に耳あり。軍の批判は御法度じゃ。
千菊　心配するな。この千菊、陸軍の将校にも知り合いはいくらでもおる。親父よ、今度、白紙招集というのができたんじゃぞ。
正光　赤紙じゃないのか。
千菊　赤紙もある。白紙は工場への召集じゃ。
正光　工場でも人が足らんのか。
千菊　どこも、猫の手も借りたがっとる。
正光　わしらにも召集がくるんじゃろか。
千菊　へへへ、心配せんでええ。あんたに赤紙やら白紙がくる日にゃこの日本も終わりじゃわい。
正光　終わりで結構、もうあんな戦さは……
千菊　ま、人にはそれぞれ役割っちゅうもんがある。鉄砲担ぐ人間もいれば、子供をつくる人間も必要じゃ。親父さんはうまい珈琲をつくって人を喜ばせるのが役割じゃ。わしは、子供の種を仕込む役割がええがのう、はっはっはっはっ……（浪江が一生懸

命考えながら何かをノートに書いているのを見て）浪江、おまえ、さっきから何を一生懸命書いちょる。
浪江　うち、この頃、詩を習うてるんよ。
千菊　詩？　歌手から詩人に変更か。
浪江　歌もやる。でも、今は詩に興味があるんよ。うちは、いつか、自分がつくった歌を歌いたい。それがうちの夢よ。
千菊　へええ、歌やら詩は才能のある人間だけがやるものじゃと思うてたが、世の中変わったのう。
浪江　うちは、あんたに認めてもらわんでもええ。ちゃんと認めてくれる人がいるけん。
平岡が入ってくる。
ボーイ　いらっしゃいませ。……（水をもってきて）なんにいたしましょう。
平岡　あんた、新米か。
正光　その人は聞かんでええ。コーヒーじゃ。
ボーイ　はあ……
平岡　ああ、忙しい、忙しい。今日は、陸軍将校さんの写真が十二枚に、見合い写真が七枚じゃ。こう忙しいと、助手がいるのう。親父さん、どこぞに仕事のきちんとする、ええ子がおらんかの。
正光　そんな子がおりゃあ、こっちが欲しい。若うていせいのええのは、どんどんどん、宇品から大陸へ出征していくけん、このままじゃあ、いつか天神町は女と年寄りばっかの町じゃ。
千菊　最後に残った男こそ、果報もんよ。女子は選り取りみどりじゃけん、ははは……。
常頭　へっ、動きもせん写真一枚とんのに、なにがそんなに忙しい。よぼよぼのじじい一人で十分じゃ。
平岡　（急に立ち上がって）何をっ！　おんどりゃ、電気紙芝居屋風情が、何偉そうに言いやがる！
常頭　へっ、お前みたいな低能に、芸術のことなんぞ、分かりゃあせんわ。
平岡　男と女が乳くりあうような、あがいな写真が芸術か。
常頭　映画は、ロマンよ、夢よ。おまえのようなもうとっくにひからびた人間には、豚に真珠じゃ。
平岡　言いおったな。なにが芸術じゃ。写真はな、瞬間瞬間をとらえるから芸術なんじゃ。写真が動き始めた途端、それは日常じゃ。
常頭　お前のような人間に、映画なんぞ、分かってもらいとうないわ。二度と来るな、親父、塩じゃ、塩まいてくれ。
正光　おっと、ここはわしの店じゃ。世界シネマじゃない。
常頭　そうじゃった、そうじゃった。
天明が入ってくる。
天明　すまんが、水を一杯もらえんかのう。
正光　はい。（ボーイに）おい、水。
常頭　相沢大尉はもう帰ってるのか。
平岡　先月の末に戻ったらしい。じゃが、体をこわしているらしい。村井巡査の話じゃ。家で寝込んだまま、出てこんという。
千菊　早よう出てきてもらわんとのう。来たら、みんなでここで祝賀会じゃ。何せ、相沢大尉はわが天神町が誇る、支那戦線の英雄じゃ。
正光　あの人は派手なことは好まんけん、そっとしておいてやっちょくれ。
千菊　騒ぐなって？　馬鹿なことを言うな。大尉が戻ったらみんなで提灯行列じゃ、はっはっはっはっ……見たか、新聞。
常頭　わしは二十べん読んだ。
平岡　相沢さんが元気になってくれんことには、このピアノも宝の持ち腐れじゃ。
千菊　あの将校、ピアノ弾くのか。
平岡　結核で亡くなったお母さんが、元音楽の先生で、相沢大尉を作曲家にしたかったらしい。お父さんはお父さんで息子さんを科学者にしたかった。結局相沢大尉はそのどちらにもならず海軍に入ったが、両方の血を受け継いでるってことよ。おまけに勇気もある。（常頭に）能なしのおまえもちっとは爪のあかでも煎じて飲ませてもらえや。
常頭　何をっ！　人を能なしじゃと！　そん

ならわりゃなんじゃ！

正光　そう大きな声を出しなさんな。

ボーイ、天明に水を渡す

天明　（一気に飲み干して）ああ、生き返った。親父さん、ありがとう。

千菊　……おい、おまえ、見慣れん顔じゃが、いつからここに店だしてる。

天明　先週からだが。

千菊　だれに断って商売しとる。

天明　ああ、あんたが、この辺りを仕切ってなさったか。いや、かんべんしてつかあさい。何せ、戦争で片足なくした傷夷軍人。他にできる仕事もなし、見料三十銭で日に二、三人の手相見て、細々食べておる次第じゃ。どうか、見逃してつかあさい。

間

突然、千菊、足で天明の杖を払いのける。

天明、一瞬よろけるが、片足で見事に立つ。

天明　……（満身の怒りを込めて）わしの左足はノモンハンの戦闘で、九死に一生と引き替えに天に砕け散った。貴様、片足を天皇陛下に捧げたこのわしを、不具者と侮辱するのか！　どこのどいつじゃ！　名を名乗れ！

一同、天明の迫力に圧倒される。

千菊　……わしは、千菊言うて、この辺りの興行を仕切っとる。すまんことじゃった。いや、実は、近頃、傷夷軍人のふりをして、怪しげな商売をするもんがふえとる。わしはそういうやつらが許せんだけじゃ。商売の上がりの上前をはねようっていうけちな魂胆はないけ、心配せんでええ。これから先、もめごとや、困ったことがあったら遠慮のう言うちょくれ。（杖を拾い天明に渡す）

天明、杖を受け取るとき一瞬千菊の目を見つめ、憤然として出ていく。

千菊　おい。親父、ビール、もう一杯じゃ。

正光　はい。

通りが騒がしくなる。喧嘩が始まったのである。「けんかじゃ、けんかじゃ」「これやめんかい！」「くそう！」「おんどりゃ、殺したろかい！」「慈仙寺鼻へ来い、わりゃ、勝負つけたるわい！」「おんどりゃ、助っ人なしじゃ、勝負できんのかい！」「なにをっ！」の声。

カフェーの人々は心配そうに外をのぞき込むが、千菊は悠然とビールをのみ続けている。やがて千菊の子分、生駒がやってきて喧嘩を止めようとするが、手に負えない。数人が入り乱れていた喧嘩は、次第に、極田と若松の二人の喧嘩にしぼられてくる。

若松、極田にはね飛ばされ、天城屋の戸に突進する。硝子の割れる音。

千菊、ビールを飲み干すと、ゆっくりと外へ出ていく。

千菊の姿を見ると、二人の若者は、顔が青ざめる。

千菊　（静かに）わりゃあ、どこのもんじゃい。そんなに喧嘩がしたきゃあ、支那大陸行って、思いっきり暴れてこい。おい、生駒。こいつらの住所と名前聞いとけ。おまえら二人は明日には召集がきて、宇品から出征じゃ。皆の衆も、明日は日の丸振ってこいつらを祝うちょくれ。天城屋の弁償はわしがしたるけ、心配せんで思う存分、お国のために働いてこい。（行こうとする）

若松　千菊の親分、それだけは……（土下座して）申し訳ない、かんべんしてつかあさい。この通りです。

極田　（土下座して）天城屋への弁償は、わしがするけん、どうか、どうか、今の話はなかったことに。このとおりですけん。

千菊　お国のために働くのが嫌か、この非国民めが。わりゃあみたいな男がのさばって

る限り、この戦争にゃあいつまでも勝てんのじゃ。川に飛び伏んで頭冷やしてこい！

千菊、カフェーに入って行く。生駒、続く。

極田、天城屋に入っていき、店を壊したことを詫び、掃除を始める。

若松、千菊を追って、カフェーで再び土下座する。

若松　千菊の親分、わしを弟子にしてくれ。このとおりです。なんでもするけん、弟子としてつこうてくれ。お願いします。

千菊　生駒、こいつを屋敷に連れてって飯食わせてやれ。明日から本格的に仕込んじゃるけ。

生駒　はい。（若松に）おい。

若松　あ、ありがとうございます。

若松、生駒に連れられて、いそいそと出ていく。

常頭　（平岡に）賭けるか。わしは二日。

平岡　わしは三日。

常頭　よし、のった。一円。

平岡　よし、一円。

天城屋の前に、留めさんとがんさんの引く人力車が二台到着し、芸者の春奈と千歳が降りる。

春奈　あ、ちょっと、占いみてもらう。待っといて。

千歳　先週もみてもらったがの。

春奈　人の運は、毎日変わるのよ。

春奈、天明に手相をみてもらう。

塚本中尉が岡本一等兵と田畑一等兵の二人の部下を連れて天城屋にやってくる。

塚本中尉　ごめん。

八田　いらっしゃいませ。

塚本　今日は、第五連隊の将校が四人、大事な会合を開かねばならん。部屋は空いておるか。

八田　あいにく今日は軍人さんで一杯で、部屋は一つも空いておりません。

塚本　それは困ったな。軍関係以外の宿泊客はおらんのか。

八田　ちょっと待ってください。（宿帳を調べる）ああ、一組、四人、民間の方でおられますが。

塚本　ああ、ちょうどよかった。その四人に、他の旅館へ移ってもらうように言うてくれ。

八田　でも……

塚本　軍の大事な会合だ。手配してくれ。

八田　しかし、それは……

塚本　事情は話したはずだ。頼む。大の男がこうして頭を下げておる。手配してくれ。

八田　あいにくですけど、こればかりはどうにも……。

塚本　分からん奴じゃのう。軍の命令じゃ。部屋を一つあけるんじゃ。

お加代、話を聞きつけ、八田が困っているのを見て口を挟む。

お加代　兵隊さん、ちょっと強引すぎるんじゃありません。申し込んだ順にうちへ泊まっていただく。これがうちのしきたりです。

塚本　ええい、女じゃ話にならん。主人を出せ、主人を。

お加代　ここの主人は支那大陸で戦争してる真っ最中じゃ。女、女と馬鹿にするな。あんたも女から生まれたんじゃろが。

塚本　ううむ、屁理屈を言うな。

お加代　何が屁理屈ね。うちは由緒正しい軍用旅館です。ほいでも、民間のお方も大勢泊まりよる。うちへ泊まってもらったからには、軍人であれ、商売人さんであれ、同じように大事におもてなしする。これがうちのやり方じゃ。これが気に入らんのならよそへ行け。

塚本　黙れ、わしは海軍第五連隊塚本中尉じゃ。これ以上理屈をこねたいんなら、軍で聞いちゃるけ、連隊本部へこい！　さあ、早よう手配せい。

お加代　中尉中尉って、威張るんじゃない。

うちは将校さんがお得意じゃけん、陸軍や海軍の大佐、中佐じゃって馴染みじゃあ！

塚本、一瞬言葉を失う。

珠江、大声を聞きつけてあわてて出てくる。

珠江　あれあれ、お加代さん、なんですか、軍人さんに大声で失礼なこと言って。

お加代　ほんでも……。

珠江　申し訳ございません。あとで厳しく叱りつけておきます。

塚本　やっと話の分かるのが出てきた。さっきも言うたように今晩部屋を一つあけてほしい。無理を承知でこうして頼んでおる。

珠江　今日はほとんどが軍人さんですが、お一組の民間の方は、陸軍へ出入りしている商人の方で、呉海兵団の大沼大佐の親戚の方ですの。それに、今日は誓願寺も、浄宝寺も宿泊の軍人さんで一杯で、他に移ってもらうわけにもいかず、どうか今日のところは、誠に相済みませんが、事情をお察しください。

塚本　……うむ。そうか。それは、仕方がないな。あの女中、きちんとしつけとけよ。

珠江　はい、それはもう……。

塚本　（部下に）おい。

三人出ていく。出がけに部下の岡本一等兵が芸者を見つけ、立ち止まって見とれている。

塚本　（振り返って）おい！

岡本　は、はい！（後を追っていく）

三人、去っていく。

珠江　お加代さん、だめじゃないの、軍人さんにあんなこと言ったら。

お加代　じゃって、あんまり強引なんじゃもの。

珠江　（八田に）あなたもいけないのよ。もっとしっかりしなさい。

八田　すみません。

珠江　お加代さん、私は明るくて働き者のあなたが好きだけど、うちで働くからにはもっと品をもってちょうだい。

お加代　どうせうちは貧乏人の生まれじゃけ、品はありませんよ。

珠江　品性は、磨けば誰でも身につけられるものよ。お加代さん、二階の柳の間、御飯持っていった？

お加代　ああ、忘れとる。今もって行きます。（出て行く）

春奈と千歳が入ってくる。

春奈　（明るく）こんばんは。

珠江　ご苦労さま……。あ、春ちゃん、今日は御機嫌ね。よかったわ。……すぎたことはどんどん忘れていくのよ。忘れなきゃ、体がもたないわ。

千歳　今、占いでね、いいこと言ってもらったのよ。

春奈　ちいちゃん……

珠江　そう……天明さんの占い、よく当たるのよ。

千歳　運勢が次第に上昇機運にある。水の流れる方向に、吉だって……。

春奈　ちいちゃんったら……。

珠江　私も、占ってもらおうかしら。

八田　今晩は、二階の山水の間です。

珠江　サキさん、ご案内して。あっそうそう、お客様、一時間ほど遅れるって連絡が入ったから、しばらく待っていて。

サキ、二人を案内していく。

相沢が土手の向こうからやってくる。

相沢　（カフェーの門で店を出していた天明に）あのう……ちょっとお尋ねするが、この辺に天城屋旅館があったと思うのですが……。

天明　天城屋？……あなたの後ろに、でーんとたっているのが天城屋だが。

相沢　……すると……ここが、カフェー・テンジンか……（看板を見て苦笑いする）こ

このところ体調を崩していて、方向が分からなくなっていました。失礼しました。

天明　人は、いろいろな能力をもっているが、使わない能力はどんどん衰えていく。なあに、すぐに陸上での生活にも慣れます。それに、心配するには及ばん。近頃は、陸上の人間でさえ、方向感覚を失いつつある。

相沢……あなたの、片方の足は、どこでなくされた。

天明　鉄砲の弾を避けるのに忙しくて、ノモンハンに忘れてきよりました。

相沢　ノモンハンでは、いまさら取りに行けませんね。

天明　人はいろも、どこかに何かを忘れてくるものです。

相沢　……ありがとうございました。

相沢、天城屋へ入っていく。

相沢　今晩は……

八田　いらっしゃいませ。

珠江　いらっ……洋介さん……よくおいでなさいました。

相沢　休暇をもらったので、しばらく滞在させてもらえませんか。家にいても落ち着かんので、気分転換をしたいと思ってたんですが、次の命令がくるまで遠くへ行くこともできませんし……で、昔なじみの天城屋を思い出したんです。

珠江　ええ、ええ、一年でも、二年でもいてくださいよ。さ、どうぞどうぞ。

八田　お持ちします。（荷物を上げる）

お加代が二階から降りてくる。

珠江　ちょうどよかった、お加代さん、この方を二階のせせらぎの間にご案内して。

お加代　分かりました。（相沢の荷物を持って）さ、どうぞこちらへ。（案内する）どうぞ、階段に気をつけておあそばせ。（上がっていく）

珠江　お加代さん、せせらぎの間に、お願いね。

お加代　（上がりながら）分かってますって……うちはいま、品性を磨いている最中なんじゃけん……

二階の山水の間の前で

お加代　さ、こちらのお部屋です。

相沢、入っていく。そこには春奈と千歳がおり、お互いに不思議な気がしながらもぎこちなく向かい合う。

お加代、降りていく。

八田　相沢大尉、だいぶ、やつれた感じでしたね。

珠江　生死をかけた戦さをしてきたんだもの……それに、天城屋にとって大事なお方です。大切におもてなししてさしあげて。

八田　はい。

お加代、降りてくる。

珠江　ご苦労さま。

お加代　とんでもございません……ああっ、せせらぎの間はつき当たりの部屋じゃった！

暗転。

（第二場）

翌日の昼前。天神町界隈。

池園大寒が堤防で絵を書いている。そばでは池園の愛人、清川が日傘をさし、腰を下ろして文庫本を読み耽っている。

子供達が川で泳いでいるらしく、堤防を海水着やパンツ姿で走り回っている。

路地では夏子が子供をおぶって佇んでいる。

しばらくして、絵を描いていた池園が、川での異状に気づく。

池園　（絵筆を動かすのをやめて）おっ、子供が溺れとる。大変じゃ。おお、みんな、

大変じゃ、子供が川で溺れとるぞ！　早う助けてやれ、大変じゃ、大変じゃ！

町の人達が堤防に集まってくる。通りがかかった宣教師のキャサリン・ベイカーとジュディ・アンダーソンも心配してなりゆきを見守っている。村井巡査もやってくる。

正光　ああ、ああ、どんどんどんどん流されていくわ。

村井巡査　子供はだめじゃ、一緒に流されてしまう。そこにじっとしとれ。（船に向かって）おおい！　子供が溺れとるんじゃあ、助けてやってくれえ！……（指さして）そこじゃあ、そこの子供じゃあ！

ざぶんと水に飛び込む音。

正光　あれじゃと、もう駄目かもしれんな。ぐったりしとる。

平岡　どこの子じゃ。

常頭　ありゃたしか、朝鮮人の朴さんとこの子じゃ。

珠江　（やってきて）ええ？　朴さん？　朴さんとこの元ちゃん、溺れてるって？　大変じゃ、サキさん、梅湯へ行って、朴さん呼んできて！

サキ、梅湯に呼びに行く。

村井巡査、堤防に置かれてあった縄を探しだし、ほおってやる。

平岡　駄目だ、もういっぺん。

お加代　どうか、助かってくれますように……

千菊　（やってきて）あの、いせいのええ若もんは、どこのもんじゃ。

巡査、もう一度縄を投げる。

平岡　つかまえた。よし、みんなで引っ張れ。

千菊　年寄りは引っ込んで、わしにまかせい。千菊、巡査と一緒に縄を引っ張る。朴さん、顔色を変えてやってくる。

村井巡査　よし、ついた。みんな、ここへ運んで介抱するんじゃ。おかみさん、毛布かなんか、用意できるか。

珠江　お加代さん、お願い。

お加代　はい。（毛布を取りに旅館へ入っていく）

やがて、数人の人々が、ぐったりとなった元太を運んでくる。

朴　元太、元太……

お加代、毛布で元太をくるむ

千菊、元太の頬を叩くがぴくりともしない。

びしょ濡れになって、正太郎が堤防を上がってくる。

正太郎、ぐったりとなった元太をうつぶせにし、背中を押し、水を吐き出させてみる。

しかし、元丸は動かない。

朴　ああ、神様……

正太郎、本格的に蘇生を試みる。

緊張した間。

やがて、元太が激しく咳こむ。

正光　助かった、助かった。

平岡　生き返ったが、ははははは……

お加代　よかった、よかった。

正太郎　ほうじゃあ、わしは、船ほっぽらかしにしとるけ、これで。

村井巡査　お手柄じゃ。どこの衆じゃ。

正太郎　わしは、ただの船頭じゃ。

珠江　びしょ濡れになってしまって……。うちへ寄って、風呂に入っていきなさい。ちょうど沸いたところだから。船はうちの若いものにつながせときます。さ、お加代さん。

正太郎　悪いけんのう。

珠江　何言ってるのよ。天神町の子はみんな家族よ。あんたは天神町の恩人じゃ。

お加代、正太郎を旅館へ連れていく。

サキ　あんた、三番やぐらで泳いどったんじゃろ。あそこは泳いだらいけんて言うたじゃろ。あそこには、えんこうが住んでいて、足引っ張りにくるんよ。

朴　この、馬鹿！（元太を殴る）みんなに、心配かけて！（殴る）

村井巡査　まあまあ、朴さん、ようやっと命吹き替えしたんじゃ。よろこばにゃあ。

朴　この馬鹿、馬鹿、馬鹿！……

朴さんは元太を殴っていたが、突然抱き締める。

元太　父ちゃん……

朴さんの目に光る涙。

遠くで元安川を下る船の舟唄が聞こえる。

浪江、さっきからびしょ濡れの正太郎の姿を見つめていた。

浪江　（正太郎を真似て）わしは、ただの船頭じゃ……ふふっ。

浪江、正太郎にあこがれる。

アンダーソン　よかったわねえ、助かって。

ベイカー　ほんとに……

アンダーソン　神様に感謝しなくては……少し、疲れたでしょう。

ベイカー　ええ。アンダーソン先生、元気。わたし、励まされます。

アンダーソン　今年は、暑さ、特に厳しいです。雨、降りません。

ベイカー　でも、子供達、見ていると、私、休んでいられません。子供達、いっぱいもとめています。でも、私の力、少し……。

アンダーソン　まだ、二年なのに、あなた、すっかり、広島の人間、なりました。若い人は、新しい町に馴染むのが、早い。

ベイカー　ミス・アンダーソン、広島、来て、何年なりますか。

アンダーソン　二十年です。

ベイカー　二十年……

アンダーソン　今でも、はっきり覚えています。クリスチャン・アドバゲイトに宣教師募集の記事があったの。「日本の、ヒロシマという瀬戸内海の古い町に福音の種がまかれ始めている。そこの町の着物を着た婦人たちや、若い娘たちが、渇いたものが水を求めるように新しい知識とともにキリストの救いを必要としている。……」

ベイカー　……広島の、若い娘たちが、渇いた土が水を求めるように、新しい知識を……私も、新聞記事、見て、応募しました。

アンダーソン　（夏子に気づいて）あら、あの子、顔色が悪いわね。

アンダーソン、夏子のそばに行く。

アンダーソン　どうしたの、元気ないわね。

夏子　……

ベイカー　ミス・アンダーソン……（夏子の首筋にできたできものを示す）

アンダーソン　あら、大きな出来物。痛くない？

夏子、うなずく

アンダーソン　御飯、食べたの。

夏子、首を振る。

ベイカー　おなか、すきませんか。

夏子　……

アンダーソン　お母さん、どうしてるの？

夏子　家で、寝てる。

アンダーソン　病気なの。お父さんは？

夏子、暗い顔をする。

アンダーソン　この先に、託児所あります。そこへ行けば、何か食べさせてくれます。

一緒に、来ませんか。
夏子、首を振る。
ベイカー　どうして？　おなかすいてるんでしょ。
夏子　……
アンダーソン　……では、あとでスープか何かとどけにきましょう。お母さんも栄養つけないと。それに、このできもの、心配だわ。
ベイカー　ドクターに、みせましょう。
アンダーソン　あなたの家、どこなの。
夏子　そこの角を曲がったところ。
アンダーソン　分かったわ。お家で待ってて。
ベイカー　ミス・アンダーソン、先生は、疲れています。帰ってください。私が……。
アンダーソン　あなたこそ疲れてるんでしょ。今日はもう帰りなさい。
ベイカー　（きっぱりと）いいえ、一緒に行きます。
アンダーソン　……ふふっ。
二人、去る。
武　ようし、みんな。戦争ごっこじゃ。あの貯水槽が敵のトーチカじゃ。ええな。行くぞ！……突撃！
少年たち　（歌う）出てくるチャンコロみなみな殺せ、出てくるチャンコロみなみな殺せ……
相沢大尉の父、相沢博士がやってくる。子供達の遊びを見て呆然とする。しばらくして、博士は天城屋へ入っていく。
相沢博士　御免ください。
八田　これはどうも、先生。女将さん、先生が見えました、相沢先生です。
珠江が奥の部屋から出てくる。
珠江　あれえ、お久しゅうございます。さ、どうぞどうぞ。
相沢博士　（上がって）もっと早く来たかったんだが、研究のほうが手を離せなかったもので。
珠江　サキさん、お茶お願い。それからお加代さん、洋介さん、どうなさってます？
お加代　今、お休みです。
相沢博士　それなら構わん。別に珍しい人間に会いきたわけではない。……髪型が、少し変わったか。
珠江　いいえ、前のままですよ。
相沢博士　少し、若くなったような気がするが。
珠江　いやですよ、白髪もふえる一方で……。（髪を気にする）
相沢博士　……このたびは、世話をかけます。
珠江　とんでもございませんわ。相沢大尉のような方に宿泊していただいて、光栄に思っていますのよ。何せ洋介さんは今や時の人……
相沢博士　すまんが、その話は止めてくれるか。息子の前でも話さんでほしい。
珠江　……分かりました。
相沢博士　丁度女中に暇を出したところで、家には女手がないし、私も帰るのが遅くて、全くかまってやれん。あいつはあいつで毎日ほとんど食うものも食わずに、体力もなくなるばかりで、心配していた。昨日、家を出てどこかで気晴らしをしたいと言い出したので、私もここにお願いすることにした。
珠江　先生も、相変わらず、忙しいんですのね。
相沢博士　やればきりがないということは分かっているのだが、私もいい年になった。先は長くないのに、宿題が山ほどある。それに、若いものたちにぜひとも伝えておかねばならないこともある……あせってるんだよ……。（封筒を取り出して）これは息子の当分の滞在費だ。受け取ってくれ。
珠江　（差し返して）何を水臭いことを。これはいただけません。
相沢博士　いや、取ってくれないと困る。う

ちは女手がないもので、本当に助かってるんだ。
珠江　いただけません。これはほんの恩返しの一部なんですから。この天城屋も、お陰で今はすっかり立ち直って、軍人さんや商売人の方がひっきりなしに利用してくれます。どうかこれはお納めください。置いていかれても、郵便で送り返します。
相沢博士　……困ったな。
珠江　そうそう、先生もここにこられたらどうですか。女手のない家では食事も不便でしょ。
相沢博士　いや、自分の家は調べ物をするのに何かと便利でして。それに、年を取ると、食うことはあまり執着しなくなります。
珠江　いけませんわ、栄養つけなくては。
相沢博士　また近々寄るつもりだが、すまんがよろしく頼みます。
珠江　もういかれるんですか。もう少しゆっくり……
相沢博士　これから大学へいかねばならんので。ではよろしく。
お加代　ええ、もう一生懸命お世話させてもらうけん。
珠江　（封筒を渡して）どうか、少しもお気づかいなく。
相沢博士　じゃ、いずれ改めて。
相沢博士、挨拶をして帰っていく。
珠江　お加代さん。ちょっと買い物してきてくれる。（買い物をメモして渡す）それと、相沢さんに何か食べられそうなものがあったら買ってきて。
お加代　はい、もう、どっさり買ってきます。
珠江　そんなにたくさん入らないのよ、病人なんだから。
お加代　分かりました。
（天神町界隈）
新介　おい、来いよ。今ちょうどええとこじゃ。
武　行こう行こう。
武と健次、新介について路地を入って、世界シネマの方へ行く。
しばらくして、路地の向こうから千菊の子分、生駒のどなり声が聞こえ、数人の子供達が飛び出してくる。
生駒　おっどりゃあ、いっつもただでみくさって！　ええかげんにせい。映画見たきゃあ、家へ帰って銭もってこい！　さあ、帰った帰った！
生駒、子供達を追い散らす。
生駒、英二を呼び止め、もどって映画を見てこいと指図する。
武　ああ、兄ちゃん、ずるいぞ。なんで英二だけ特別扱いするんじゃ。
新介　ほうじゃ：ほうじゃ、わしらにもみせてくれ。
健次　英二だけ、ずるいぞ。
生駒　やかましいわい！　わりゃあとこは銭あるじゃろが。銭あんのに払わんのはただ見じゃ、泥棒とおんなじことじゃ。英二とこは家のどこ探しても一銭もなかろうがい。みんな知っちょる。払いとうても払えんのじゃけ、見せちゃるんじゃ。さあ、帰った帰った！
武　へっ、おかしな理屈じゃ。
子供達、不平を言いながらも去っていく。
生駒も映画館へ戻る。
堤防を走って、若松がやってくる。丁度、カフェー・テンジンから正光が出てきて、若松と出会う。
若松　あ、あんた、千菊の親分はよう知っとるんか。
正光　ああ、よう知っとるが。
若松　わ、わしゃあ、親分とこへ世話になってたもんじゃが、急に都合がでけて、家へ帰らにゃいけんようになった。あいさつする暇がないけん、あんたから、お、親分に、

くれぐれもよろしゅう言うといてくれんか。

正光　（事情を心得て）ああ、ちゃんというとくとも。

若松　（まだ少し気になって）あ、あの、親分、怒るじゃろか。わ、わしを探すじゃろか。

正光　へへ、親分は心得とるわ。じゃけ、はよう帰れ。帰って親孝行するのが一番じゃ。

若松　頼んだぞ。

正光、うなずく。

若松、去っていく。

正光　三日、もたんかったな。写真屋の負けじゃ。（カフェーに入っていく）

暗転。

（第三幕）

数日後の夜。天神町界隈。

暗転の中でバイオリンが聞こえる。

明りがつくと、カフェー・テンジンで川本がバイオリンを弾いている。

しばらくして相沢がカフェーに入ってくる。

相沢　笛の音に踊り出る蛇みたいに、バイオリンの音につられて部屋から出てきました。

正光　よう来なすった……よう来てくだすった……コーヒー、いかがですか。

相沢　……いただきます。

川本　よく、ご無事でした。

相沢　お元気そうで何よりです。……川本さんは、ずっと世界シネマでバイオリンを……

川本　映画がトーキーになってからは失業です。今は、行商をやっとります。バイオリンは、慰めに弾くだけです。相沢さん……支那ではご苦労さまでした。ご活躍は新聞で読みました。

相沢　その話は、もうやめてもらえませんか。

川本　……

正光　……戦争というものは、吐き気のするような、惨い思い出ばかりつくりよる。早く忘れてしまいなさい。それがええ。

相沢　（正光を見つめて）……親父さんも、苦労したか。

正光　苦労続きで、髪は薄くなるばかり。心配してたんですよ。常頭さんも、平岡さんも、浪江も、ここに寄れば相沢さんの話題ばかり。

相沢　みんな、達者にやってたんだな。……

（辺りを見回して）前のままだ。……このピアノも。……親父さんはもう弾かんのか。

正光　わしはもう年じゃ。指が動かん。弾いてやってください。そのピアノ、相沢さんに弾いてもらいたがって、毎晩、キイキイ泣きよる。

相沢、ピアノの蓋を開け、弾き始める。

三味線の稽古帰りの春奈と千歳が入ってくる。

ボーイ　いらっしゃいませ。

春奈　ピアノの音が聞こえたので、つい寄ってしまいました。あら、相沢さんが弾いてらしたの？

相沢　……（弾いている）

正光　今日は非番かね。

春奈　三味線の稽古の帰りなの。

春奈、相沢の弾くピアノに聞に入っている。

千歳、ボーイにコーヒーとケーキを注文する。

正光　今夜は不思議な夜じゃ。音楽につられて次々と人が集まりよる。

相沢、ピアノを弾き終える。

正光　コーヒー、できてますよ。

相沢　ありがとう。（テーブルの方へ移動する）

春奈　（ピアノのそばへ行き）おじさん、このピアノ、鳴らしてもええ？

正光　どんどん弾いて下され。次々と客が集まって来るわい。

春奈　……うちは、ピアノに触るのは初めてじゃ。（千歳に）うちは貧乏じゃったけん、ハーモニカもなかった。うちはいっぺん楽器を弾いてみたかった。じゃけ、芸者になって三味線習わせてくれたときは嬉しかった。（ピアノの音を一つずつ鳴らしてみる）

相沢　一つずつ鳴らすより、二つずつ鳴らすほうが音楽らしくなる。

春奈　（二つずつ鳴らして）こう？

相沢　そこの鍵盤を鳴らして出る音には、みんな相性がある。よく響く音同士と、汚い濁った音になる音同士と。

春奈　（二つずつ鳴らしてみる）これは。……相性がいい音？　悪い音？

相沢　相性が悪い。

春奈　これは。

相沢　相性が悪い。

春奈　これは。

相沢　相性が、いい。

春奈　これは。

相沢　相性が悪い。

春奈　これは。

相沢　相性が悪い。

春奈　これは。

相沢　相性が、いい。

春奈　ふふ、おかしなこと。うちが、相性がええと思うた音はみんな、相性が悪いというし、うちが悪いと思うた音はええという。どうして。

相沢　……それは、私とあなたの相性が悪いということだ。

二人、見つめあう。

外ではさっきから、髪ぼうぼうで、ハンチングを深く被った国広富雄が辺りを気にしながらすばやく電信柱に「戦争で泣くのは庶民ばかりだ！」「日本は支那から手を引け！」と書いたポスターを張っていた。国広、一度は立ち去ったが、ペンキとはけをどこかへ置いて、再びやってくる。

犬の遠吠え。

天明がそこにいるのに気づき、ドキッとする。

国広　おまえ……さっきからずっと見てたな。

天明　わしが関心あるのは、目に見えぬものだけじゃ。現実には興味はない。

国広　……

国広、少し戸惑ったあと、思い切って、カフェーに入っていく。

国広　カレーライス、作ってくれるか。

ボーイ　はい。

国広　大盛りで頼む。

ボーイ　インディアンカレー大盛いっちょう。

国広、相沢や川本と顔を合わさぬよう気づかっている。

しばらくしてボーイがカレーを運んでくる。

国広は、がつがつとたちまち平らげてしまい、水を飲む。

相沢　（コーヒーを飲んで）ああ、懐かしい味だ。……なぜもっと早く親父さんのコーヒーを飲みにこなかったのか、悔やまれる。

正光　嬉しいこと言ってくれるねえ。

千歳　おいしい……ここのケーキ……。やみつきになりそう。

川本　ここで出すものはみなうまいが、食えんものが一つだけある。がんこ者の親父じゃ。

正光　ふふっ……

川本　相沢さん。親父さんはまだまだピアノの腕は落ちてはおらん。指が動かんと言ったは嘘じゃ。実は、三年前に憲兵と大喧嘩してな。憲兵が親父さんの弾くピアノに注文やら難癖をつけたので、意地で、金輪際ピアノを弾かんことに決めたんじゃ。

正光　もうその話は止めた。思い出すだけで胸くそ悪い。……相沢さん。人には、明るく、元気の出る音楽も必要じゃが、心に染み入るような、悲しい音楽も必要じゃ。

相沢　……（同感である）

間

国広　……親父さん。すまんが、わしは、金を持ってないんじゃ。

正光　うちは、掛け売りはしとらんが。

国広　貸してくれと言うてるのではない。払う金が、どこにもない。これからも、払えるあてがない。

間

正光　うちは、十銭、二十銭という小銭をいただいて、つつましく生活しちょります。払えぬ、払う気がないというのでは、こちらが困る。

犬の吠える声。

正光　（国広の衣服がのりで汚れているのを見て）あんた、この辺りに反戦の張り紙をしている、主義者じゃな。

国広、青ざめる。

国広　……

正光　戦争で泣くのは庶民ばかり……たしかにそうかも知れん。じゃが、わしは無銭飲食に泣かねばならん。

犬の激しく吠える声。

国広　あんまり腹が減ったので、つい注文してしまった。

間

正光　なぜ逃げない。

国広　……

正光　金が払えんと分かってるのに、なぜ逃げない。

国広　……あんたに、すまない……昨してほしい。

犬の吠える声。

正光　よし分かった。早く行きなさい。

国広、動かない。

相沢　（裏口を指して）そこから出て左へ行くと世界シネマに出る。さあ、行きなさい。

国広　す、すまない……

国広、裏口からすばやく走り去る。

正光　表へ出て様子を探る。

正光　しまった！　左へ向かった。

相沢、川本に合図をすると、ピアノの前に座り、川本のバイオリンに合わしてとびきり賑やかな曲を演奏し始める。しばらくして、三枝が二人の部下を連れてやってくる。

三枝憲兵軍曹　貴様ら、今をどういう時代だと思うておる！　ピアノなぞ弾いている場合か！

間

三枝憲兵軍曹　（相沢に近づいて）……貴様、どこかで見たことのある顔だな。

相沢　私のほうは、存じ上げないが……。

三枝憲兵軍曹　……この辺りで電柱に不穏な張り紙をしていた、怪しげな男をみなかったか。

相沢　いたよ。カレーライスを食べて出て行った。

三枝　どっちへ行った。

相沢　（表口を指して）そこから出て行ったから、多分、川のほうだろう。

三枝憲兵軍曹　（二人の部下に合図して）おい。

相沢、ピアノを弾きだす。

相沢　一曲、歌っていかんか。

三枝憲兵軍曹　……（一瞬あきれるが）おい！

二人　はい！

三枝憲兵軍曹　（振り返って）いい加減にしとけよ！

憲兵たち、出て行く。

千歳　春ちゃん、もう行かんと……

春奈　うち、もうちょっとピアノ聞きたいから、悪いけど一人で帰って。

千歳　じゃあ、行くよ。

千歳、出て行く。

相沢、ピアノを弾いている。

外では三枝が天明を見つける。

三枝憲兵軍曹　ちょうどいい。おまえ、あの電柱に張り紙をしていた男を見かけたろう。どの方向へ行った。

天明　見料は三十銭になるが。

三枝憲兵軍曹　貴様、軍に協力するのに金を取る気か！　たわけたやつめ！

天明、虫眼鏡を出して、三枝の眉間の相を見る。

三枝憲兵軍曹　（気味悪がって）な、何じゃ……。

天明　胃病を患ってると見えるな。仕事に熱心なのはいいが、過ぎたるは及ばざるがごとしとも言う。

三枝、胃病に心当たりがあるので、ハッとして腹の辺りを擦る。

天明　性病の相も出ておる。女郎買いはやめたほうがよろしい。

三枝、これにも心当たりがあるので、部下の手前、ばつが悪い。

三枝憲兵軍曹　銭は、払わんぞ。

天明　私の見立てに、思い当たることがあるのなら、改めてきなさい。占って進ぜよう。

三枝憲兵軍曹　（村岡に）お、おい、おまえはそっちへ行け。（吉井に）おまえは向こうを調べろ。

憲兵たち、三方へ散って行く。

正光　物騒な世の中になってきたな。

千歳　こわかった。

春奈　……うん……。

相沢、まだ少し興奮している、二人をみて、ピアノを弾く。

相沢　この音は、相性のいい音？

春奈　……いい音……。

相沢　これは？

春奈　……いい音。

相沢　これは？

春奈　いい音。

相沢　そう、みんないい音だ。

暗転。

（第四場）

一週間後の昼。カフェー・テンジン。川本がバイオリンを弾いている。

平岡　やっぱり、生の音楽はええのう。近頃はレコードやら、ラジオやら、電気の音楽が流行りじゃが、やっぱり音楽は生じゃ。電気じゃあ、本物の音楽はつくれんわい。

常頭　そういうことを言うとるけ、時代にどんどん遅れるんじゃ。生もたしかにええ。じゃが、電気の音楽もまた違うよさがあるんじゃ。

平岡　機械でつくったもんは、しょせん嘘よ。

常頭　いや、わしはそうは思わん。

平岡　夢まぼろしよ。写真もそうじゃ。写真に写った恋人眺めて、接吻してみても、本当の満足を得るこたあできん。だが、写真は、本物以上の、真実を写し出すことでき

る。映画とはちがう。
常頭　なんじゃと！あばたの女を修正に修正重ねて見合い写真にして、それが何の真実じゃ！おまえの撮っとるような写真はみんな嘘っぱちじゃ！
平岡　わりゃあ、いつか世界シネマのスクリーン、引きやぶっちゃるき、覚えとけ！
正光　まあまあ、喧嘩はそれくらいにしんさい。相沢さんが帰ってきて、これでまた、お祭りの復活じゃ。やっぱり、カフェーには音楽がなけんとのう。映画館にはバイオリン、カフェー・テンジンには相沢さんの弾くピアノじゃあ。
平岡　映画館にバイオリンか。活動時代を思い出すのう。
常頭　川本さんのバイオリンは、数ある楽士の中でも、ずば抜けとった。最高じゃった。
平岡　その最高の楽士の仕事を奪って、映画館から追い出してしもうたんはどこの誰じゃい。
常頭　……
平岡　川本さんのお陰で世界シネマは持ち直したようなもんじゃのに、活動がすたれるとお払い箱……
常頭　……その話は……すまんと思うとる……じゃが……
川本　常頭さん。わしは何とも思うとりゃせん。あんたは、このわしに、ようしてくだすった。あれは時代の流れじゃ。流れには、人の力で太刀打ちはできん。
常頭　わしは……いつか、あんたに……そう思いながらついつい日が過ぎてしもうた。
川本　そう思ってくれる心で十分です。わしのバイオリンを今でも覚えてくれている人がここにいる。それだけで、十分です。
相沢　浪江、今日は元気がないな。どうした。
浪江　……
正光　ふふふ……相沢さんと同じ病じゃ。
相沢……
浪江　恋って……苦しいもんなんよねえ……
常頭　相沢さんに好きな人ができたのか。
平岡　どこの誰じゃ、教えてくれ。
常頭　さぞ別嬪じゃろうのう。
平岡　相沢さん、今まで黙ってるなんて、水臭い。教えてください。どこの誰です。今度、無料で記念撮影しますけん。
常頭　わしは世界シネマに二人、招待します。
浪江　相沢さんはうちのことを聞いてくれてたのよ！
相沢　そうだ、浪江の元気のないわけだ、話を戻そう。
正光　恋の病なら、つける薬はないわい。
浪江　……うちね。今の切ない気持ちを詩にしてみたの。苦しくて、苦しすぎて……書かずにいられなかったの。

浪江、詩を書いたノートを相沢に見せる。

相沢　浪江。これを歌にして歌ってみろ。もっと気分が晴れるぞ。
浪江　歌？いきなり、無理じゃ。
相沢　私が和音を弾くから、その詩、即興で歌ってごらん。
浪江　即興で？無理じゃあ、そんなあ……。
相沢　歌手になるつもりなら、できるはずだ。

相沢がピアノで和音を鳴らす。

相沢　長調でいくか、短調でいくか。
浪江　長調がいい。
平岡　ちょうちょの歌？
常頭　ぱか！
相沢　じゃあ、ト長でいこう。

相沢、和音を弾くが、浪江、うまくメロディーが出てこない。そこで、川本が、即興演奏のバイオリンでメロディーを誘ってやる。
しばらく戸惑ったり考えていた浪江だが、やがて、ピアノやバイオリンの音をつかみ、歌い出す。

ソング「恋した人」

船に乗ってあの人はやってきた
盛り上がった肩
ごつごつした手

岩をも動かす
川の流れと格闘した
そのあとに
あの人は鼻歌歌いながら去っていった
風に吹かれてあの人はやってきた
口下手なその人は
振り向きもせずに
私の心をさらっていった

相沢　（ピアノを弾き終わって）合格だ。浪江。
浪江　（喜んで）ええ、本当！嬉しい……じゃって、上海帰りの相沢さんに認められたんだもの……歌ってええねえ。万病を治す薬よ。うち、もっと歌う。歌って、もっと元気になる。元気になって、正太郎さんに好かれるような女になる。
常頭・平岡　正太郎……

浪江、顔を赤らめる。
角で占いの店を出していた天明が、楽しそうな音楽につられて、カフェー・テンジンの戸口にきて、耳をすましている。
お加代、表に水をまこうと天城屋から出てきて、カフェー・テンジンの戸口で体を揺すっている天明を見つける。
お加代　天明さん……こんなとこで何してるん？
天明　ああ、ちょっと、肩凝りがきつうてのう。（肩を回してみる）
お加代　中へ入って、一緒に歌ったら？
天明　あ、いや、とんでもない……（逃げていく）

歌が終わり、暗転。
天明にスポットがあたる。

天明　わしは、この天神町が好きじゃ。天神町の人々が好きじゃ。カフェー・テンジンに集う音楽好きの人達が好きじゃった。だが、わしはカフェーの仲間には入ってはいかんかった。わしは、占い師じゃ。占い師には、占い師の歌がある。（歌う）

ソング「占い師の歌」

月が沈み
太陽が昇るとき
どのような運命が人を待ち受けているのか
月と星と太陽と
宇宙に支配された人間の運命
明日は我が身も知れぬ世相だから
人は占い師にたずねる
星の力が重いか
人間の力が重いのか
天秤にかけるのが占い師の仕事
明日は我が身も知れぬ世相だから
人は占い師にたずねる
手のひらに刻まれた
一筋の運命
おまえにはそれを克服していく力があるか
おまえには運命を変えていく力があるか。
明日は我が身も知れぬ世相だから
人は占い師にたずねる

第二幕

（第一場）

タイプライターの音と共に次の文字がスクリーンに写しだされる。
「8月6日、第20航空隊は、日本の目標を攻撃せよ。
第一目標　90・30　広島市産業地域。」

黒いマントの紳士　一九四五年八月五日、午

後十一時。原爆搭載機エノラ・ゲイ号の機長、チベッツは、作戦に参加する隊員たちを前に訓示した。

チベッツ機長　諸君。我々は今まで諸君が見たこともなく、聞いたこともない、まったく新しい爆弾を投下する使命をおびて出発せんとしている。この爆弾にはＴＮＴ火薬二万トンに匹敵する破壊力がある。

黒いマントの紳士　チベッツ機長はさらに、天気測定、飛行高度、通信電波の周波数、救助艇、救助機の位置などについて説明した。そして、合流地点は、硫黄島。攻撃順位、広島、小倉、長崎の順。

出発に先だって、従軍牧師のダウニーによる祈祷が行われた。

従軍牧師　主よ、戦いの終わる日の一日も早からんことを、今一度、地上に平和を持ち得ますことを、この夜、飛び立つものすべてが主の恩寵により守られ、無事に帰還しえますことを祈り奉ります。今も、そして、永遠に、主の恩寵の中にあることを知る我々は、あなたに全幅の信頼を捧げて出発致します。イエスキリストの御名によりアーメン。

数機のＢ２９のエンジン音。

やがてエンジン音が消えていき、科学者がスポットに浮かび上がる。

マンハッタン計画に参加した科学者

エノラ・ゲイが原爆投下のために広島に向かったという知らせを聞いたとき、私は傑然と立ちつくした……なんということだ……何百人もの科学者たちが集まり、知恵をしぼってだした答えが、これだったのか……。

科学者たちのコーラス隊が歌う。

ソング「原子爆弾はなぜ急がねばならないのか」

急げ、急げ、急げ
ナチスドイツが原爆を開発する
ヒトラーが原子爆弾をもてば
この世は闇
世界の破滅
眠られぬ恐怖の夜が訪れる

マンハッタン計画に参加した科学者

ナチスドイツは崩壊した。日本の軍国主義は、今まさに燃え尽きようとしている、ろうそくの火にすぎない。この、史上初の殺戮兵器によって、瀕死の日本にこれ以上追い討ちをかけることが、果たして、神の意思なのか……。

黙れ、黙れ、黙れ、
秘密を漏らすな
用心に用心を重ねろ
身内たりとも安心するな
スパイの目が光っている
新兵器の開発を敵に知られるな
情報を支配したものこそが
勝敗を支配する

黒いマントの紳士　目標地点が近づくにつれ、原爆投下に向けての忙しい作業や、作戦実行の不安感が交じりあった緊張のなかで、エノラ・ゲイの搭乗員たちは無口になっていった。

Ｂ29のエンジン音がきこえ、やがて消えていく。

暗転。

（第二場）

一幕の一か月後の夜。

スライド「１９３９年８月（昭和１４年８月）」

天神町界隈。満月が出ている。

夜店が出て人通りが多い。

相沢、風車を買って春奈に渡す。

春奈　うわあ……回るわ、回るわ、風が吹いているわ……。子供時代をもう一度やりなおしているみたい、ふふふ……。ねえ、私、明日休みなの。映画にでもいきましょうよ。

相沢　映画館など近頃は戦争映画ばかりだ。

春奈　それでもいいの。相沢さんと一緒に行ければ……。

相沢　……

春奈　……ごめんなさい。またいやなことを思い出させちゃって。

相沢　違うんだ。……実は、明日、呉の海兵団本部に呼び出されている。

春奈　……また、どこか遠くへ行くの？

相沢　明日にならないと分からない。

春奈　いや！　もう遠くへ行ったら……

相沢　軍人の宿命だ。こればかりはどうしようもない。

春奈、相沢の手を握る

相沢　とにかく、決まったら連絡する。今さら心配しても始まらん。なるようにしかならん。

軍人の一団が通りかかる。手を握りあう大胆な二人を見てあっけにとられている。

春奈　（視線に気づいて手を離し）まるで子供みたいなことしちゃって……。

相沢　人目なぞ気にしないでいい。明日のことも分からぬ夜だ。

相沢、春奈の手を握りしめる。

春奈　……ふふっ……。

相沢　じゃあ、今日はこれで。

春奈　きっと知らせて下さいね。

相沢　極秘事項だが、必ず知らせる。

春奈、去る。

相沢、天城屋へ行って行く。

一階の客間では、相沢博士が先に座って茶を飲んでいる。

相沢　ただいま。

八田　お帰りなさい。

お加代　あら、ちょうどよかった。相沢さん、お父さんがお見えですよ。

相沢　今晩わ……。

相沢博士　しばらくぶりだな。ずいぶん顔色がよくなった。ここの水がよかったみたいだな。

お加代　元気になられたでしょ。元気すぎて、悪い女にひっかかったりしたらと、うち、この頃心配しよるですよ。……いえ、大丈夫、私がついていますから。悪い女は近づけないようにします。ええ、任せといてください。うちがしっかり洋介さんをば守りますけん。あっ、そうそう、お茶、入れないと……。

相沢　どうぞ、おかまいなく。

お加代　（お茶の用意をしながら）あいにく女将さんが留守で、品のないこの私が相手で、すみませんねえ。

相沢・相沢博士　……

相沢　お父さんも、お変わりないようで。

相沢博士　相変わらず、帰るのはいつも星が天高く上ってからだ。……実は、今日、海軍の梅本少佐から連絡があった。明日、呉の海兵団本部へ呼び出されているじゃろう。おまえの新しい赴任先が決まったそうだ。江田島の海軍兵学校だ。

相沢　教官ですか……。

相沢博士　激戦地じゃなくて不満か。

相沢　……いえ。……実は……ほっとしました。

相沢博士　こんな時世だ。いつまた戦地へ行かされんとも限らんが、ま、しばらくは体力をつけなさい。……ここにはいつまで厄介になるつもりだ。

相沢　そろそろおいとませねばと思っていたところです。新しい任務も決まったようですし、二、三日のうちに帰ります。

相沢博士　それがいい。ここは軍用旅館だ。いつまでも居候していては、迷惑がかかる。

お加代　（お茶を持ってきて）いいんですよ、うちはいつまでいてくだすっても。……うちね、天神さんにお参りしましたよ、洋介さん、早く元気になって下さいって……ほんとに、顔の色艶もすっかりよくなって……やっぱり、うちが買ってきたオットセイ

の薬が効いたんかね。
相沢博士　お加代さん、しばらく水入らずで話させてもらえませんか。
お加代　ああ、すみませんねえ、気がつきませんで。（去る）

間

相沢博士　こうして、ゆっくり話すのも、久し振りだな。……向こうの情勢はどうだった。
相沢　日本軍は、支那を見くびり過ぎています。ノモンハンでも手痛い打撃を受けました。あがけばあがくほど泥沼にひきずりこまれていきます。
相沢博士　日清戦争以来、日本人は他民族を見下す習癖がついてしまった。近頃では子供までがチャンコロチャンコロと呼び慣らす有様だ。日本は、もっと早く火傷をしておけばよかった。……いずれドイツも事を起こすだろう。そうなれば……
相沢　……
相沢博士　おまえは、今でも軍人になってよかったと思っているのか。
相沢　……
相沢博士　わしは断固として反対したはずだ。いかなる屁理屈をつけようが、戦争は大量の人殺し合戦に過ぎぬ。
相沢　あなたは、満州がロシアの思うがままに占領されて、それでも傍観していればよかったと考えるのですか。軍事力のない、貧しい国々が次々と列強の餌食になっていくのを、黙ってみていればいいと言うのですね。
相沢博士　自分の国に攻め入ってきたのならともかく、海を渡って兵隊を送る必要がどこにある。分捕り合戦などに加わるとろくなことはない。人間の欲には際限がない。一度甘い汁を吸ったら大火傷を負うまで吸い尽くす。それが人間だ。
相沢　……日本は、貧しすぎる。
相沢博士　ほうら、本音が出たな。
相沢　お父さんはいつも冷静だが、あなたのは、日本国籍をもたない冷静さだ。それが科学ってやつですか。
相沢博士　……確かに、科学も両刃の刃だ。科学は生活を明るくし、人間に夢を与えてくれるが、同時に爆弾も、戦闘機も科学が産み出した。軍隊も、使う人間と、時と場合によれば役に立つこともある。しかし、時期が悪すぎる。おまえが、将校となって軍隊を変えていけると考えたのは浅はかな英雄主義だ。確かに海軍にも立派な人間は大勢いる。私もそういう人を何人も知っている。しかし、今や軍部の力は怒涛のような流れとなって、自由主義者までも次々となぎ倒していく。批判するものはすべて葬り去られた。今は、良識ある人間は、借りてきた猫のように黙って、情勢をうかがうのがせいぜいだ。
相沢　……
相沢博士　……科学というのも、つい夢中になって自分の研究にのめり込んでいく側面をもっている。しかし、科学者は常に自分の研究を批判する冷めた目が必要だ。今の軍部にはそれがない。……まったく、支那大陸の気候も風土もろくに知らん連中が、欲に目がくらんで、次々と無茶な命令を出しているんだからな。話になら。
相沢　日本丸は今、泥沼で身動きとれず、あちこちから浸水し始めている。
相沢博士　……それにしても、ずいぶん、派手に新聞に載ったな……町中評判だ。

間

相沢　……うううっ……

間

相沢博士　つらかったろう。小さい頃から、虫も殺せんようなお前だった。正義感にやむにやまれず軍人になったのだから。……
相沢　正義感か……。
相沢博士　……もし、その気があるなら、話してみなさい。そのほうが気分が楽になる。

なあに、おまえだけの責任じゃない。この日本丸に同乗している私にも責任がある。日本人、みんなに、責任がある。
相沢　……一昨年、日本軍は南京を攻略しました。自分も、荒鷲海軍航空隊の一員として渡洋爆撃に参加しました。……その後、私は爆撃の成果を確かめる命をうけ、上海陸戦隊と合流し、南京に向かいました。……そこでは、武器を持たぬ女や子供達が黒こげになって死んでいました。私が落とした爆弾のためにです。……それだけではなかった。長引く戦と敵の攻撃の恐怖に疲れ果て、殺伐とした日本兵たちは、村を次々と焼き払い、出てくる村人たちを片っ端から突き刺していった……。道路ぞいや川には赤い血を流し、黒こげになった支那人の死体が累々と続いていた。
相沢博士　……
相沢　……ある日、上官が数人の便衣隊を連行してきた。といっても証拠もろくに調べずつかまえてきた支那人です。後ろ手に縛った、そのうちの一人を、上官は銃剣で突き刺してみせました。……そして、今度は私に……
相沢博士　その先は言わずとも分かる。
相沢　いいえ、ぜひ聞いてください、一部始終……。
相沢博士　……
相沢　私はとてもできないと思いました。それも、十五からそこらの少年だ。部下たちは、「おまえにはできないだろう」とでも言いたげにニタニタ笑っている、上官も笑っていた。その時、その青年も嘲り笑っているように思った……その瞬間自分は一思いに突き刺した。血が吹き出した、だが、銃剣は急所を外れ、少年は血まみれになりながらのたうちまわって苦しんだ。「早く楽にしてやれ」、声が聞こえる。私は無我夢中で突き刺した、二十回、三十回、繰り返しただろうか……。私の足元には、ずたずたになった、ボロきれのような男が転がっていた……。
　それからは何かが吹っ切れたように私は戦った。私は、自分の命なぞもはやどうでもいいと思った。むしろ敵の銃弾がこの胸を撃ち抜いてくれることを願った。武漢攻略にも参加した。南昌の爆撃に参加した時は敵機の激しい反撃に出会った。私の飛行機は五、六機も撃ち落としただろうか。ついに、弾丸がなくなった。もはやこれまでか。私は、敵機に体当たり攻撃を仕掛けた。これで最後か！……しかし、自分の飛行機は狙いをわずかに外れ、右翼を失っただけだった。敵機はまともに体当たりを受け、きりきりと墜落していく。そして、私の飛行機は、片翼のまま上海の基地に着陸した。そこに待っていたのは、英雄を作ろうと待ち構えていた人々だった……。
相沢博士　皮肉なものだ……おまえの苦しみを、わしもしばし共有したよ……。
相沢　父上の言う通り……話せば、少しは楽になりました。
相沢博士　だれもかれも、言うに言われぬ苦しみを背負って生きねばならない時代だ……（時計を見て）明日の朝は早い。……お加代さん、タクシーを呼んでくれますか。
お加代　はあい。もうお帰りですか。はい、今すぐ。
相沢博士　……そうだ。外交という手もまだ残っているぞ。
相沢　……？
相沢博士　私は、科学に未来を託している人間だが……やはり、おまえにもかすかな希望を託している。江田島では新しい生き方が開けるはずだ。
相沢　……

人力の天神タクシーが天城屋の前に到着する。

お加代　先生、来ましたよ、天神タクシー。
相沢博士　では、これで。女将さんによろしくお伝えください。
お加代　はい、また寄って下さいね。

お加代、博士の靴を出し、送り出す。外では、占い師の天明が、店を出しなが

ら、こっくりこっくり居眠りをしている。軍服姿の、両手をなくした若者がやってくる。

若者　手相見よ、俺の運勢を占うてくれ。

天明　（目を覚まして）前金で、三十銭じゃが。

若者　俺の、胸のポケットに財布がある。出してくれ。

天明、若者に両手がないのを見て一瞬戸惑うが、若者の顔が真剣そのものなので、ゆっくりと胸のポケットから財布を取り出す。

若者　三十銭取って財布を元に戻してくれ。

天明、その通りにする。

天明　……

間

若者　金だけ取って、逃げようって魂胆か！

さあ、見てくれ。

戸惑っていた天明だが、ようやく心を決める。

天明　右手を。

若者、ゆっくりと体を傾け、右手を出した格好。

天明、虫眼鏡を出し、失われた右手の手相を見る。

天明の額から汗がたらたらと流れ落ちる。

天明　左手を。

若者、さっきと同じように体を今度は左に傾ける。

汗を拭いもせずに失われた左手の手相を見つづける天明。

間。

天明　……あなたの、生命線は、この七月で切れておる。つまり、あなたの生命はないと言うことじゃ。にもかかわらず、あなたはそこに立っておる。これは、大変な吉運を意味する。あなたは、体を動かすことよりも、文筆のほうに才能のある方じゃ。それだけに、両手をなくしたことが辛く感じられる。じゃが、生涯の伴侶が現れるとでておる。伴侶と力を合わせば、あなたの才能は開花されよう。身内の愛には恵まれず、苦労するが、身内だけが世間ではない。あなたが、心を曲げずに、素直に、一生懸命生きていけば、生涯を友とする、肉親以上の信頼を寄せることのできる友人が現れよう。両手をなくしたことなどくよくよせずに、自信を持って生きていきなさい。

若者　（喜びながらも半信半疑で）そ、それは、本当か、出たら目を言うたのなら、ただではすまさんぞ。

天明　……わしが支那大陸に召集されたとき、同じ連帯の親友に、副島天心というのがいた。その時、わしらは支那軍に悩まされ、疲労しきって進軍していた。しかし、その男だけは部隊でだれよりも元気じゃった。ある晩、そいつがわしに言う。「わしはもうあといくばくも命がない。もう少し若ければ、この自分の悪い運勢と戦っただろうが、自分にはもう気力はない。おまえは運の強い男だ。片足を吹っ飛ばされたくらいで死ぬ男ではない。わしが死んだら、占いの本と道具をすべてあげるから、形見に持っていってくれ」そう言った。わしは、いつもの冗談だと思うていたが、天心は、それから三日後に、支那兵に阻撃されてあっけなく死んだ。わしはその時もマラリアにかかって生死をさまよったが、不思議と命は取り止め、回復した。またノモンハンでは地雷を踏んで片足を失ったが、命だけは助かった。占いというものは、人の命がかかっておる。自分の死さえ、分かってしまうことがある。いったいどうしてでたらめに人の運命など判断できよう。……人は、

たとえて言えば樹木だ。あなたは二本の枝を失ったが、幹はちゃんと残っておる。太く、高く、大地の養分をいっぱい吸って、生きていきなさい。

間

若者　あ、ありがとうよ、手相見。

若者、明るい表情をみせ、足を引きずりながら去っていく。

天明、見送る。

カフェー・テンジンに千菊が入っていく。

正光　いらっしゃい。

千菊　むせるのう。あれ、この間までおった　あの白い服着たボーイはどこへ行った。

正光　とうとう召集されて、支那大陸へ行きよった。

千菊　そうか。親父も大変じゃのう。ビール。

正光　はいよ、小麦粉も砂糖も、日に日に不足してくるけん、ここのメニューも、いつまでだせるか。

千菊　戦争に勝たんことにはのう。早う勝ってくれれば、支那からどんどん資源が届いて、景気もようなろうけん、いつまでもこのままじゃ、暮らしは先細りになるばっかじゃ。親父さん、わし、今度、警防団の団長に選ばれたんじゃ。副団長が世界シネマの常頭さんじゃ。ま、これからいろいろ協力してもらわねばならんことがあると思うが、一つ、よろしく頼むわ。

正光　人をまとめるのがうまいあんたにはぴったりの仕事じゃ。しっかり、この天神町を守ってくださいよ。

千菊　……ところで、前の天城屋に居候している相沢ちゅう将校さん、天城屋とはどういう関係なんじゃ。

正光　天城屋の主人、吉兵衛さんと、相沢大尉のお父さん、相沢博士は、昔からの知り合いで、以前、天城屋の経営が傾いたとき、相沢博士があちこちへ口をきいてやって、ずいぶん助けてやった。お陰で、今の繁栄を築くことができたそうじゃ。ほじゃから、博士は、天城屋の恩人じゃ。このことはあんまりみんなにいいふらすなよ。

千菊　分かった分かった、わしの胸の中へ納めてちゃんと鍵をかけておく。わしゃ口はかたいけ、心配するな。

生駒がやってくる。

生駒　親分、時間です。

千菊　（残ったビールを飲み干して）行こか。あのな、ええこと教えちゃる。あの相沢大尉と天城屋とはな……

正光　これ、親分！　約束じゃ！

千菊　（気がついて）あっ、そうじゃったそうじゃった、へへへ……

生駒　なんじゃ、親分。

千菊　何でもない何でもない、さあ、行こう。

（去っていく）

珠江が人力車で天城屋に帰ってくる。

珠江　ただいま。遅くなっちゃって……

お加代　お帰りなさいまし。さっき、相沢さんのお父さんが見えて、帰られたところです。

珠江　あら、留守で失礼しちゃったわね。……お加代さん、表のタクシーの荷物運んでくれる。

お加代　はい。

お加代、旅館から出てくる。

天明、店仕舞いをしている。

お加代　あれ、天明さん、もう店閉めるの。

天明　もう、今日は疲れたわい。

お加代　あんまり根を入れ過ぎたらいけんよ。たかが占いなんじゃから。

天明　……

お加代、人力車から買い物の荷物を天城屋に運び込む。

しばらくして画家の池園大寒が、イーゼルとカンバスを掲げ、荷物を愛人の清川鈴子に持たせて天城屋にやってくる。

八田　いらっしゃいませ。
池園　四、五日滞在したいが、部屋はあいちょるか。
八田　はい、あいてございます。
　八田、荷物を上げ、案内する。
八田　（宿帳を出して）これに、住所と名前をお願いします。
　大寒、筆ですらすらと書く。
八田　（宿帳を受け取って）ありがとうございます。（名前を見て）……画家の、池園大寒先生ですか……。存じ上げております。先生に泊まっていただいて、大変光栄でございます。おサキさん、二階のせせらぎの間にご案内して。
　おサキ、二階の部屋へ案内していく。
　（天神町界隈）
　浪江と正太郎が夜店をひやかしながらやってくる。
浪江　ねえねえ、焼きするめ食べよう！
正太郎　わしは、綿菓子のほうがええ。
浪江　ふふ、じゃあ、綿菓子買おう！
　二人、綿菓子を買って食べる。
浪江　……今日は、楽しかった。船に乗せてもらえて。涼しいし、町の風景が全然違うのね、岸から見るのと、船から見るのでは。……まるで、回り灯籠ながめているみたいだったわ。それに、正太郎さん、歌もうまいし……
正太郎　わしらの歌う歌は、舟唄じゃ。あんたらの歌うとるような、人に聞かせるための、きれいな歌とは違う。わしらは、自分のために、船を動かすために歌を歌う。
浪江　ううん。……なんか……心ね。心があるわ。うちらの歌う歌は、ただきれいなだけで、まるでだめ。正太郎さんの歌は、だれにも真似のできないような、力強さがある。
正太郎　そんなにおだてんでくれ。わしは褒められるのになれちゃおらんけん、こそばゆい。
浪江　ねえ、また近いうちに船に乗せて。今度また新しい詩がかけそうな気がするの。
正太郎　……
浪江　だめ？　……ねえ、どうしてだめなの？
正太郎　……わしは、もう、船を降りるんじゃ。船の仕事は止めることにした。
浪江　どうして。どうして正太郎さん船を降りるの。
正太郎　……もう、船はみんな使わんようになった。船は、時間がかかるし、手間もかかる。
浪江　広島は、川で栄えた町よ。船がなくなったら、うちは寂しい。
正太郎　利用するもんがないんじゃけ、仕方ないじゃろう。
　間
浪江　それで、どうするん？　何か、仕事のあてはあるの。
正太郎　……
浪江　うち、お父さんに頼んでみようか。
正太郎　船頭が風呂屋に転職か。……わしは、一つ所にじっとしてられん性分じゃ。小さい頃から船で育った。……行商でもやってみようかとも思うとる。
浪江　正太郎さんが行商……いやじゃ、うちは船に乗っとる正太郎さんがええ。
正太郎　仕方ないじゃろが。わしも食うていかにゃいけん。
浪江　……船がなくなったら、広島はもう広島じゃない。
正太郎　それでも、わしらは広島で生きていくしかない。……船がなくなっても、川が流れている限り、広島はやっぱり広島じゃ。
浪江　……

正太郎　おまえがしょげてどうするんじゃ。わしはもうとっくに見切りをつけて、次の仕事を考えてるのに。
浪江　そうね……川は流れているんじゃもの。……川はまた新しい幸せを運んできてくれるわよ。元気出して、正太郎さん。
正太郎　じゃからわしはもうとっくにそういう気持ちになっとるんじゃって。元気出すのはおまえのほうじゃ。
浪江　ふふっ……
　正太郎と浪江、歩いていく。
　（天城屋）
　二階からお加代が転げ落ちるように降りてくる。
お加代　大変じゃあ、大変じゃあ？
珠江　お加代さん、どうしたの？
お加代　大変じゃ、絵描きの先生の部屋が大変じゃあ。
珠江　大変じゃ分からんから、落ちついて話しなさい。
お加代　あ、あの、今、先生の部屋へお茶持っていったらな、お、女が裸になって、すっぽんぽんの裸になって……
八田　死んでたのか。
珠江　先生は、その女の人の絵を描いていたんじゃないの。
お加代　そうなんですよ、あの人、裸の女の絵を……わあん（泣く）
　一同、困ったものだという顔をするものやら、クスリと笑うものやら。
　暗転
　（第三場）
　三日後。八月。
　天神町界隈。夕方。
　池園大寒が堤防で絵を描いている。
　平岡が袋にいれた写真機を授ってカフェーテンジンへ行って行く。常頭が先にコーヒーを飲んでいる。
　（カフェー・テンジン）
平岡　相沢さんはまだか。
正光　もうすぐ来るじゃろ。
平岡　あの別嬪の芸者さんと来るんじゃろうか。
常頭　賭けるか。
平岡　わしは一人で来るほうに一円。
常頭　よし乗った。わしは芸者と一緒にくるほうに一円じゃ。（平岡の写真機を見て）……おまえ、また写真パチパチやってきたな。広島は撮影禁止じゃ。警防副団長のわしの立場も考えてくれ。
平岡　へへへ、あとで記念撮影しちゃるけ、かたい事いいなさんな。風景はどんどん変わっていく。わしが撮った写真を、みんなが懐かしがってくれる時が必ずくる。
　アンダーソンがペイカーと一緒に入って来てコーヒーとケーキを注文する。
　堤防に相沢と春奈がやってきて、池園の描いている絵をじっと眺めている。
池園　……（絵筆を走らせながら）貧乏絵描きの絵が、そんなに珍しいか。
相沢　……見事だ。
春奈　いいわあ……
相沢　……豊かで、暖かい広島の風景が、ここにはある。……こんな絵でも、なかなか売れませんか。
池園　近頃売れるのは、軍人の肖像画ばっかりじゃ。……風景画なぞ、だれも買わん。
相沢……その絵が完成したら、ぜひ私に売って下さい。世話になった人に贈りたい。
池園　高いぞ。
相沢　少しは、蓄えはあります。いつ頃、完成しますか。
池園　早く欲しいなら、邪魔をせんでくれ。
相沢　他へは、回さんでください。
　相沢と春奈、しばらく、池園の描く絵を眺めた後、カフェーへ向かう。
　（カフェー・テンジン）
常頭　相沢さんも、立派な、ええ人じゃが、

春奈さんと歩くときは、もうちょっと離れて歩いてほしいもんじゃがのう。
平岡　おまえか、妙な噂流しとるんは。
常頭　ば、ばかなことをいうな。時節がら、ちょっと気になるだけだ。
正光　あんたの立場もあるじゃろが、あの方は激しい戦から帰って、この天神町でほっとしておるんじゃ。静かにしておいてやってくれ。
平岡　ああ、見苦しい、見苦しい、女にもてん男の妬みは、見ちゃおれん……。
常頭　なにを！　わりゃ、小学校のとき、花江に手紙を届けてやった恩を忘れたか！
平岡　なにが恩じゃ、花江とうまくいかなんだのも、もとをただせばおまえがたてた噂がもとじゃ！　おまえの腐った性根はこの四十年、変わっておりゃせんわ！
常頭　くそ！　川で溺れるのを助けた恩も忘れやがって！　この恩知らず！
平岡　世界シネマ建てるときの、百円、返せ、今すぐ、返せ！　この恩知らず！

相沢と春奈が入って来る。

相沢　今日は。
平岡　負けた……（常頭に一円渡す）
相沢……？
正光　主賓のお見えじゃ、さあさあ、奥へどうぞ、今日の主役じゃけ。
平岡　相沢さん。もう引っ越しはすませたんですか
相沢　ええ。昨日すませました。
正光　江田島の先生の、第一日目はどうでしたか。
相沢　慣れん仕事で、緊張しましたが、なんとかやれそうに思います。若いものとつき合うのはいいものです。それに、軍隊と違って、命令ばかりじゃないので、楽しい。……
平岡　相沢さんが、天城屋におらんようになると、さびしくなるのう。
相沢　ちょくちょくここに寄ります。私もみなさんと同じ、親父さんのコーヒーの中毒者です。
平岡　そうか、どうもすぐにここのコーヒーが飲みたくなると思ったら、親父さん、コーヒーに阿片をいれとったのか。

一同、笑う。

相沢　アンダーソン先生。一つ教えてほしいことがある。先生は、広島女子学院で教えておられるが、先生は何を信念にしておられますか。
アンダーソン　シンネン？
相沢　つまり、その、教えるにあたって一番大切にしていることです。
アンダーソン……自由です。
相沢　自由？
アンダーソン　自由な雰囲気があれば、生徒はどんどん学んでいきます。押さえつけたり、無理に知識を叩き込もうとしても、それ以上成長しません。自由は、人間を育てる最良の肥料です。
常頭　そりゃ、不自由よりは自由のほうがええ。しかし、自由で戦争には勝てん。
アンダーソン　私は、戦争に勝つ方法を言ってるのではありません。教育の方法として、自由が一番いいということです。
相沢　自由……自由で秩序が保てるのですか。自由で、国が強くなることができるのか。
アンダーソン　どうして、国が大きくならないといけないのですか。私の国は大きい、日本、小さい。でも、日本、いいところです。大きい、国も、小さい、国も、仲良く、幸せにやっていけます。
相沢　残念ながら、小さい日本は、今幸せとはいいがたい……。
アンダーソン　……
相沢　自由で豊かになれたら……教育も、音楽も、映画も、人間も、自由で、しかも豊かになれたら、本当に素晴らしいのだが……。親父さん、いつかそんな時代が来ると思いますか。
正光　さあ……でも、音楽だけでも、どこでも、どんな曲でも、自由に弾いたり聞いたりできたら、それはもうそれだけで素晴ら

しい。わしは、そんな時代がきたら、少々腹べこでも我慢しますがね。
常頭　何言うとる、音楽で腹はふくれんわい。
平岡　映画で腹がふくれるか。
常頭　映画なら、自由に世界の映画が見られるようになったら、わしは少々の腹べこなら我慢できる。

一同、笑う。

正光、　みんなにビールとちょっとしたつまみをだす。
正光　さあさあ、材料が不足して何もありませんが、乾杯といきましょう。
浪江　ねえねえ、これ、うちがつくったポットケーキ。みんなでもやいっこしよう。
平岡　そうか、それはありがたい。
常頭　先に手を出すな！
平岡　なにを！
正光　さあさあ、けんかはやめて、常頭さん、乾杯を言うてくだされ。
アンダーソン　私たちも、いていいのでしょうか。
正光　この店に来る客は、みんな兄弟じゃ。兄弟に遠慮はいりません。（アンダーソンにビールをつぐ）

それぞれ、ビールの入ったグラスを手に持つ。

正光　さあ、乾杯じゃ。
常頭　……では、相沢大尉の江田島兵学校教官としての再出発を祝して、乾杯！

一同　乾杯！

一同、しばらく、ケーキを食べたり談笑する。

正光　（相沢の側へきて小さく）相沢さん……年寄りのたわごとと思って、怒らんで聞いてください。
相沢　……
正光　外では、春奈さんとはあまり目だたんほうがええと思うんじゃ。
相沢　……
正光　近頃、憲兵やら、教護連盟やらの連中が目を光らせて街を徘徊しちょる。相沢さんは有名人じゃ。思わぬ災難が降りかかっても困る。
春奈　ごめん……うちが悪いんよ。
相沢　……すまんことです。親父さんに余計な心配かけてしまって。
正光　街では、夫を戦争でなくした未亡人や、戦争で傷を負うた若者やらが大勢いる。そうした連中が、幸せそうな人間を妬んで、あれこれ噂をたてたり、根も葉もないことを言ったりする。……いやな世の中になってきたものじゃ。……おっと、今のは内緒にして下さいよ。
川本　ピアノじゃ！　……何か足らんと思うたら、ピアノが足らん。相沢さん、弾いてくれ。何かと不自由な世の中だが、カフェー・テンジンではまだピアノが聞ける。
ベイカー　私たちにも、聞かせてください。

相沢、ピアノの前に座る。

相沢　……実は……浪江に刺激されて、私も歌をつくってみました。この天神町を歌った歌です。……何せ、初めて詩を書いたもので、自信がないんですが、聞いてくれますか。
平岡　もったいをつけないで、早くやって下さい。
浪江　ええ、聞かせて。
相沢　まだ、一番しか歌詞ができてないんですが……

相沢、ピアノを弾き、歌う。

「天神町一番地」

住みなれた　この路地の奥
あこがれの　影をうつして
時にはカフェー　コーヒーのかおり
行き来するざわめきの中で
人はここで出会い　別れた

白粉の匂い
この町には　お似合いだった
天神町一番地

平岡　ええ歌じゃ。この歌、レコード会社に売り込むとええ。相沢さん、早く二番、三番、四番とつくって下さいよ。そうだ、ディック・ミネがええ。あれに歌わせたら大ヒット間違いなしじゃ。

常頭　いやあ、ディック・ミネよりも藤山一郎がええ。

平岡　いや、絶対ディック・ミネじゃ。

常頭　藤山一郎じゃ言うのに。わしは映画館で上映前と休憩時にこの歌を流す。

平岡　わしは店に来た客に無料で歌詞を配るわい。この広島で生まれた歌が、ディック・ミネの歌で全国に流れる。想像するだけでわくわくするのう。

正太郎が入口の戸を開ける。

浪江　正太郎さん。どうしたの。

正太郎　家へ行ったら、ここに来てると聞いたんで……。

浪江　さあ、入って。今日は相沢大尉のお祝いの会なの。

正太郎　……召集令状が来た。……しばらく会えんので、お別れを言いに……。

常頭　それはおめでとう。……立派にお国のために働いてきて下さいよ。あんたみたいな勇敢な若者がどんどん軍隊に入れば、支那大陸ももうすぐ日本のものじゃ。

正太郎　……浪江……わしゃ、口下手じゃけ、うまく言えんが……わしは、あんたのこと、ずっと、……ええなあ、って風に思うとった……。

正太郎、浪江から顔をそらし、急ぎ足で去っていく。

浪江　……

千菊が入ってくる。

千菊　おい、みんな。今、ラジオで聞いたんじゃが、ドイツがポーランドへ進撃したぞ。英仏が宣戦するのも時間の問題じゃ。世界中が戦争じゃ。ここは、もう一つ、きばらにゃあいけんようになってきたぞ！

一同　……

暗転。

第三幕

（第一場）

B29のエンジン音が不気味に聞こえてくる。

黒いマントの紳士　テニアン空港を飛び立ったのは原爆搭載機、エノラ・ゲイ号、広島に向かう気象観測機、ストレートフラッシュ号、長崎に向かう気象観測機、フルハウス、小倉へ向かう気象観測機、ジャビット3世号、そして科学者たちを乗せた、原爆の効果の観測機、グレートアーティスト号、予備爆撃機のトップシークレット号である。

広島か、小倉か、長崎か。いずれの都市かがこれから四時間以内に地図の上から消滅するだろう。しかし、目標として選ばれている都市のどの一つが絶滅されるだろうかという事は、現在、だれも知ってはいない。最後の選択は運命が決める。日本上空の風が、その決定をする。もし、風が、第一目標の上に大量の雲を運ぶならば、その都市は、少なくともその雲のある時間だけは助かるだろう。その都市の住民のどんな人も慈悲深い運命の風が頭上を通っているのを知らないだろう。しかし、その同じ風が、他の都市の運命を決定するのである。

タイプライターの打つ音とともに、次の文字がスクリーンに写し出される。

「雲量全高度を通じ3以下。具申意見。第一目標（広島）攻撃可能。」

エンジン音がつづいている。

やがて大きな満月が浮かぶ

満月の上を、雲がゆっくり通り過ぎていく。

チベッツ機長　諸君、これからは会話に気をつけてくれたまえ。この作戦は、歴史的な作戦だ。諸君らの声はすべて録音されている。

エノラ・ゲイの搭乗員A　見ろ。満月だ。奇麗な月だ。

エノラ・ゲイの搭乗員B　不気味な月だ。

エノラ・ゲイの搭乗員A　この飛行機が何を積んでるのか知ってるかい。

エノラ・ゲイの搭乗員B　原子爆弾のことか。

エノラ・ゲイの搭乗員A　太陽を積んでるんだ。

照明が消え、エンジンの音も消えていく。

（第二場）

スライド「1940年（昭和15年夏）」

七月。天神町界隈。夕方。

電信柱には「ちょっと待て　スパイの目がある　耳がある」「考へよ　言ってよい事と　悪いこと」などの標語を書いたポスターが張ってある。

天城屋には池園大寒の描いた、天神町の絵が飾ってある。

子供達が遊んでいる。夏子もいる。

夏子　風車って、ええねえ。どっちから風が吹いてきているか分かる。

千菊が近づいて来る。

千菊　夏子、今、どっちから風が吹いている。

夏子　（指さして）あっち。

千菊　違うぞ、夏子。日本は神風の国じゃ。今は日本から支那大陸へ、東から西へ風が吹いとるんじゃ。

夏子　……

千菊　ところで、おまえんとこへ、アンダーソンというアメリカ人が出入りしているそうじゃが、いったい何しにくるんじゃ。

夏子　先生は、時々、スープを届けてくれたり、お話をしてくれたりする。

千菊　お話って、どんな話じゃ。

夏子　神様が、いつもそばにおられるという話や、外国のお話。

千菊　何か、おまえから聞きだそうとはせなんだか。

夏子　……先生は、母ちゃんの病気のこととか、ごはん食べてるかとか、いろいろ聞いてくれる。

千菊　……そうか。じゃがのう、夏子。あんまり親切にしてくれる人間には警戒せんといかんぞ。親切な人間にはな、必ず下心と言うものがあるんじゃ。分かったな。

夏子　……

千菊、カフェー・テンジンに入っていく。店では川本がコーヒーを飲んでいる。

千菊　親父、ビールくれ、ビール。

正光　ビールはない。ミルクもなし。あるのはコーヒーと砂糖だけじゃ。砂糖も、いつまで続くか……。

千菊　じゃあ、水くれ。……世界シネマも一昨日閉館したし、この店もそろそろ潮時かもしれんのう。

正光　あんたらがカフェーを目の敵にするけん、客も減るばっかりじゃ。

千菊　立場上、仕方ないんじゃ。親父さんに恨みはないけん。しかし、わしは、日本ももうちょっと引き締めにゃならんと思うちょる。支那戦線もあと一息じゃいうのに、世間はふわついとる。とくに若いもんがいけんのう。戦時というのに、男と女が平気で並んで歩いとる。

正光　あんたも若い自分は天神町随一の色男でならしたに。泣かされた女はなんぼでもおる。

千菊　わ、わしは隠れてやってたわい。昼日中堂々と女と歩いたりはせん。それに時代が違う。今は非常時だ。……そうそう、ちょくちょく天城屋にやってくる絵描きさん、ただのヘボ絵描きじゃと思うてたが、有名

な絵描きだったんじゃな。今度、陸軍の吉岡中尉も、その絵描きに肖像画を描いてもらう言うてた。あちこちから注文があるらしゅうて、近頃じゃえらい羽振りじゃ。

正光　いつの時代も、世渡りのうまいものはおる。

千菊　親父さんもちっとは頭を切り替えたらどうじゃ。そうだ、ここを饅頭屋にしたらどうだ。天神饅頭……いや、紀元二千六百年饅頭がええ。

正光　砂糖や大豆はどこから手にいれる。

千菊　そういう事なら、わしも軍に口を利いてやってもええ。

正光　……わしも、年じゃ。

常頭が入ってくる。

千菊　常頭さん、さぞ寂しいことよのう。じゃが、これも国のため、戦争に勝つためじゃ。

常頭　分かってます。……。悔しいが、仕方ありません。……川本さん、待たせてすまなんだ。

川本　いいえ。

常頭　これを……あんたにもろうて欲しいと思うんじゃ。

常頭、手に持っていた「世界シネマ」の看板を川本に渡す。

川本　こんな大切なもの……ええんですか。

常頭　……あんたには世界シネマで、えらいお世話になった。十分報いられなかったけん、せめて、これをもろうてやってくれ。

川本　……（看板をなでながら）これを……わしの、お守りにして、大事に、この看板に励ましてもらいながら、生きていきます。

正光　……また一つ、町の灯が消えたのう……

川本、看板を大事そうに抱いて去っていく。

（天城屋）

天城屋の二階から千歳がどたどたと走り降りてくる。池園大寒がそれを追って来る。

池園　これ、待て。……この、池園大寒がおまえのあそこの絵を描いてやるというのに、なぜ逃げる。……わしに裸の絵を描いてほしがっとる女はなんぼでもおる。（千歳の腕をつかむ）

八田　先生、乱暴なことはやめてください。

池園　うるさい！（千歳を引っ張っていこうとする）

千歳　やめてください！　うちは芸者です。芸を売るのが仕事です。

池園　芸人も絵描きも、客が喜ぶことはなんでもするのが仕事じゃ。さあ、来い！　ほら、金なら何ぼでもある。（懐から札束を取り出してちらつかせる）

千歳　いや！　離して！

八田　（池園を離そうとして）先生……

池園　客に何をする！

八田、池園に突き飛ばされる。

八田、ゆっくり立ち上がって、今度は毅然とした態度で池園にのぞむ。

八田　……江田島で、最近あなたが描いた絵を見ました。あなたはもう芸術家でもなんでもない。ただの御用絵描きです。御用絵描きは御用絵描きらしく、色町へ行って遊んできて下さい。ここは天城屋。由緒格式正しい旅館です。

池園　な、なにをっ！

八田、客間にかけてある絵の近くまで行く。

八田　……この絵を描いた魂と気迫はどこへいってしまったのですか。さあ、もう一度よく絵を見てください。かつてあなたはこのような絵を描いていた。

いつの間にか珠江が来ていて、様子を伺っている。

八田　画家は、立派な絵を描いてこそ尊敬されます。今のあなたを、私は尊敬することはできない。

池園　たかが旅館の丁稚が……おまえなんぞに絵が分かってたまるか！　知ったようなことをぬかすな。

八田　……たかが旅館の丁稚や、女中が、仕事の合間にふと絵をながめて、ああ、今日も一日がんばろうと、励まされたり、冷たい冬にも、心を暖かくしてくれるような、そんな絵を、もう一度描いてください。池園先生。お願いします。

池園　……不愉快だ！　わしは帰る。千歳、あとで荷物を届けろ！

池園、憤然と出ていく。

八田　（珠江に気づいて）……すみません……大事なお得意をなくしてしまって……。

珠江　……ええよ。あんたも男じゃ。男は一世一代の台詞をはかねばならん時がある。

八田、深々と頭を下げる。

暗転。

（第三場）

「1941年（昭和16年）夏」

八月　天神町界隈。昼

路地のほうで人の騒ぐ声が聞こえる。しばらくして、アンダーソンが巡査と憲兵に連れられてやってくる。

野次馬が集まってくる。

朝鮮人の朴も心配して成り行きを見守っている。

村井巡査　さあさあ、道あけて。

平岡　アンダーソン先生が、どうかなさったか。

村井巡査　スパイ容疑だ。あ、平岡さん、ちょうどええ。

平岡　……

村井巡査　あんた、この辺の写真を撮っているらしいな。困るじゃないか。法律を知らん訳でもあるまい。没収じゃ。あとで写真とフィルム全部残らず、駐在所へ届けなさい。

平岡　あ、あれはわしがこの二年間……

村井巡査　言う事が聞けんなら、自宅を捜索して強制没収じゃ。

平岡　ちょ、ちょっと待ってください。都合の悪いものなら出しますが、わしが撮っとる写真はただの……

村井巡査　今はどういう時代だと思っておる！　ここは軍都広島だ。重要機密をねらって、スパイがうようよ嗅ぎ回っとるんじゃぞ！　……相手がわしだからこのくらいのことですんでおる。

平岡　……分かりました。全部もって行きます……。

夏子　先生、先生……どこへ行くの。先生、行ったらいやじゃ。

アンダーソン　夏子ちゃん、あとのことは、ベイカー先生に頼んでるから、心配しなくていいのよ。

村井巡査　話したら駄目だ。さ、早く歩け。さ、あけてあけて……

アンダーソン、巡査と憲兵に連れられていく。

人々、散っていく。

天明　……星の動きが、変わってきたな……。

朴　え？

天明　あ、いや、独り言じゃ。……

朴　あの、立派な、アンダーソン先生が、スパイ……。

天明　朴さん、今日は風呂屋は、休みか。

朴　はい。今日は、夕方、銃後生活更新運動の集会ある。朝鮮人、みんな、参加する。

天明　ひとつ、占ってあげようか。

朴　……

天明　あ、いや、お代はいらん。今日は客も来んし、暇つぶしだ。

朴　ありがと、ございます。……でも、わたし、いいです。明日のこと、分かってしまったら、明日も生きていく楽しみ、なくなる。

天明　それもそうじゃ。……朴さん……おかしな事を聞いて悪いが、朴さんは、自分は幸せな人生を送ってきたと思うか。

朴　……それ、難しい質問。天神町の人、みんないい人。私、幸せと、思うこと、ある。……でも、悲しいと思うこと、ある……。

天明　わしは、何百人もの運命を見てきた。幸せな運命もあった。苦労ばかりの人もあった。……わしはこの頃思うんじゃが、神様は平等とも言うが、あれは、嘘じゃ。わしらに平等に光を注いでくれるのは、太陽だけじゃ。……（雨の一滴を感じて）あっ、雨が降ってきたな。今日はこれで店仕舞いじゃ。……そうそう、雨も、幸せな人間にも、不幸な人間にも、平等に降ってきよる。

朴　……

天明、急いで道具を片づけ、去る。
急激に雨が降ってくる。

（天城屋）

珠江　あら、雨……。

お加代　いけない！　洗濯物！

珠江　サキさん、洗濯物いれて頂戴。

サキ　はい。

お加代、サキ、出ていく。
相沢博士が雨の中を駆け込んでくる。

珠江　先生……

相沢博士　ごぶさたしています。……ああ、ひどい雨だな。出るときは、あんなに晴れていたのに、まったく天気というものは分からん。

珠江　（手ぬぐいを出して）さあ、どうぞ、どうぞ。

珠江、博士を客間に通し、お茶を出す。

珠江　ほんとにごぶさたですわ。お忙しかったんですか、研究が。……一体、どんな研究なさっているんでしょうねえ。一度のぞいてみたいものですわ。

相沢博士　……

二階から宴席の嬌声が聞こえてくる。

相沢博士　二階は、昼日中からにぎやかだな。

珠江　送別会なんですよ、第五連帯の将校さんの。

相沢博士　この頃、多いのか。

珠江　ええ。毎日のようですわ。……軍用旅館やってますとね、新聞読まなくても、兵隊さんはいま支那で苦労してるな、とか、新しい作戦があるなとか、手にとるように分かります。もっとも、新聞読んでも、本当のことは分からないっていう話ですけど。……あら、こんなこと言ったら、スパイにされちゃいますわね。

相沢博士　……

珠江　……さっきね、宣教師のアンダーソン先生が逮捕されたの。スパイ容疑だって。それはもう献身的に、子供達の面倒をよく見てくださっていたのよ。医者にかかれない、病気の子供を見つけたら、あの人は、自分のお金で医者に連れていってくださってたわ。そんな事、一度や二度ではないの。そして自分は、新しい洋服を買うでもなし、ほとんど一年中同じ服で質素な暮らし。とても人に真似のできることじゃない。

相沢博士　とても真似のできぬような献身ぶりが、怪しい理由というわけか。……外国人だけじゃない。最近では、日本人同志、身内同士、スパイ探し、密告合戦が大流行だ。学校の中や会議の席はおろか、市役所、銀行、郵便局、八百屋、風呂屋、映画館、電車の中、いつどこにいても、一言一言よく考えて慎重に言葉を選ばねばならん。まったく嫌な時代になってきたものだ。……市役所に張ってあった標語にこんなのがあった。「口に　門　心にふんどし」

珠江　ふふ……

相沢博士　「スパイの住まい　口のなか」「口につけこむ　ヤマイとスパイ」「乗るなスパイの口車」……こんなのもあったな。「話の蔓に　這いよるスパイ」「スパイはどこに　自分の口に」……この調子だと、

息もできんな。

珠江　今日は、饒舌なんですのね。

相沢博士　ここだけだよ。思ったことを言えるのは。

珠江　私も……スパイかも知れなくてよ。

相沢博士　……実は……スパイの珠江さんに、重要な軍事機密をもってきた。

珠江　……？

相沢博士　私は、東京へ行くことになりました。しばらく広島にはいないので、今日はしばしのお別れを言いにきました。これは、つまらない物だが、召し上がってください。

珠江　……それ、冗談じゃありませんの。

相沢博士　あなたをスパイと言ったのは冗談です。

珠江　やはり、研究のお仕事ですか。

相沢博士　……科学も、独自の立場を取り続けることは、困難になってきた……。

珠江　……

二階の宴席がたけなわとなってきて、三味線の音や笑い声が聞こえてくる。

相沢博士　……庶民は質素倹約で、陸軍はドンちゃん騒ぎか……。

珠江　大切な、お仕事ですのね……。

相沢博士　私は、物理学という研究をしてきたのだが、初め、科学は政治とは独立せねばならないと考えていました。しかし、それは青臭い理想論だということはすぐに分かりました。科学は善悪の二面をもっています。私はそれを常に肝に銘じてきたつもりです。そこで次に、では、科学の善の部分だけを政治に生かせばよいではないかと考えました。……しかし、私が善だと考えるものと、今痛烈に科学を必要としている人達が善だと考えるものとが、食い違うのです……。

珠江　……

相沢博士　それよりもっと困るのは……私自身……善悪の判断が、迷うことがあるのです……。

宴会が続いている。

相沢博士　こんな事、こんな面白くないこと、話して申し訳ない。あなたにはまったく関係のないことだ。

珠江　いいえ。続けてください。

相沢博士　……

珠江　科学が、私たちの生活とどうして関係ないのですか。大ありじゃないですか。先生、話してください。

相沢博士　……どんな科学でもそうですが、物理学というのも、地味な、根気のいる学問です。毎日何回も何回も複雑な計算を繰り返し、ある時は何万回もの単純な実験を繰り返します。しかし、ほとんど無駄とも思える、実験や作業を何年も繰り返していると、ある時、今まで誰も考えもつかなかったような発見に行きつくことがある。それは、奇跡に近いようなできごとなんだが……実は、その発見に行きついた物理学者がいる。……しかし、その発見が余りにも人類にとって大きな発見だったので、今のところ、それが善であるのか、悪であるのか……いや、科学の発見は善に違いない、利用するものの問題なんだが……それが、人類に幸せをもたらすのか、不幸をもたらすのか、私自身、分からないところがある……。

宴会が少し静かになる。

相沢博士　長らく、思うことも言えないでいたので、こうして話すことができて、少し心がすっきりしました。今日は、お邪魔してよかった……。

珠江　口に門、心にふんどしの状態だったんですね。

相沢博士　そう、口に門、心にふんどし。もう一つ、寄りたいところがあるのだが、雨のほうはどうですか。

八田、外へ出て雨の様子を見る。

八田　まだまだ激しいですよ。

珠江　……そうだわ。先生は、手品師なんだ

わ。
相沢博士　？
珠江　いつか、ずいぶん前に、先生、すべての物ができている、一番小さい粒の事を私に説明してくれたことがあったでしょ。先生は、いとも簡単に、世界のすべてを説明してみせてくれた。私はまるで煙にでも巻かれたようにただただ感心していたのを覚えている。……私にとっては先生は、手品師だったのよ。……善悪の判断のつかない人には、あの時の調子で煙に巻いてやりなさいよ。
相沢博士　……
八田　先生、こりゃだめです。洪水でも来そうな雨ですよ……。
相沢博士　……

雨が降り続けている。
ゆっくりと暗転

（第四場）
翌日。天神町界隈。昼。
天気は晴れている。
千菊がうろうろしながらカフェー・テンジンの様子をうかがっている。
しばらくして相沢と春奈が川を眺めながら、堤防をやってくる。

春奈　昨日の雨で、すっかり水かさがふえたわね。あんなにやせ細ってたのに……。
相沢　元安川も、やっと川らしくなった。
春奈　それにしても激しい雨だった。昨日の天気が嘘のよう。

相沢、カフェーに入っていく。
アンダーソンとベイカーは大きな鞄を持っている。

正光　ああ、みえたみえた。
相沢　こんにちわ。みなさん、みえていますか。常頭さんは……。
正光　みえんのう。
相沢　確かに、連絡したのだが。
アンダーソン　急なことで、申し訳、ありません。
相沢　いろいろ、大変でした。
ベイカー　昨日は、アンダーソン先生、逮捕されたり、釈放されたらすぐに帰国の準備やら、学校の後始末やら、大騒ぎです。アンダーソン先生も、私も、ほとんど、眠ってません。
アンダーソン　船の中で、ゆっくり眠れますよ。眠ってる間に、アメリカに着きます。
ベイカー　ふふ。それほど眠れるかしら。
相沢　アンダーソン先生とベイカー先生には、この町は計り知れないほどの恩恵を受けています。時節がら、こんなささやかな会しか開けないのが残念です。
正光　こんないい先生方が、去っていかれるとはのう。
川本　もう少し、日本におることは、できんですか。
アンダーソン　私は、この広島に骨を埋めるつもりでいました。でも、日本とアメリカとの関係、今、良くありません。本国から、何度も、帰国命令、来ました。他の外国人の先生は、みんな帰ってしまいました。私も、とうとう昨日警察に、逮捕されました。……もう、限界です。私の命、神様に捧げています。私は、どんな迫害を受けても、広島にいたい。でも、これ以上いると、学院に迷惑がかかります。

浪江が常頭を無理やり引っ張ってくる。

浪江　ああ、疲れた……常頭さん、ちっとも自分で歩いてくれんのじゃもの。うち、無理やりここまで引っ張ってきたんよ。
平岡　へっ、どうせ、何か後ろめたいことがあるんじゃろ。
常頭　わしゃ、警防副団長じゃけん……。
浪江　副団長が何よ、町のまとめ役じゃろ。どこへでも顔を出すのが仕事よ。それに、今日は、このカフェー・テンジンのお別れの日でもあるのよ。
常頭　……親父さん、ここ、閉めるのか。
正光　今日まで頑張ってきたが、もう限界じゃ。第一、豆が手に入らん。……さあさあ、最後のコーヒーじゃ。思う存分飲んでくださいよ。（みんなにコーヒーを配る）
常頭　……
平岡　コーヒーで乾杯か。そりゃええわい。
相沢　では、みなさん、コーヒーカップを持って……アンダーソン先生、ベイカー先生。お二人は、本当に長い間尽くしてくれました。どうか、本国へ帰っても、この町のことを忘れずにいていただきたい。お二人の前途を祝して、乾杯。
一同　乾杯。

一同、しばらく談笑する。

アンダーソン　……私は、二十年前、四十日間船に乗って、この未知の町、広島にきました。初めて街を歩いたとき、何て貧しい町だろうと思いました。でも、ここで暮らすうちに、何て、人の心、……そう、ニンジョウ、何てニンジョウ豊かなところだろうと、思いました。遠くからながめていても、町の心、分かりません。町の心、町の人と一緒に住んでみて、初めて分かります。いつか、日本とアメリカ、町の心、分かりあえるときがきます。その時まで、しばらくのお別れです。ほんの、しばらくの間の……（胸がつまる）

夏子や数人の子供達が戸をあけてのぞく。
夏子はきょうちくとうの花を持っている。

春奈　（子供達を招き入れ）さあさあ、入って。お別れよ。

夏子、アンダーソンとベイカーに花を渡す。

夏子　先生。さよなら。
ベイカー　夏子さん……どうも、ありがとう。
アンダーソン　これでお別れね。でも、先生たちは、アメリカで、みんなの幸せ、いつも祈ってます。だから、どんなことあっても、くじけないでね。
夏子　……先生……
アンダーソン　なあに。
夏子　私たち、先生方にとてもお世話になりました。それから、先生に言われたこと、できるだけ守るようにします。でも、みんなでさっきも話し合ったんですけど、一つだけ守れないことがあるんです。
アンダーソン　何なの？　……言ってごらん。
夏子　私たち、イエス様を信じることはできません。みんなのうちは昔から仏教で、キリスト様にかわることはできないんです。お母さんも、そう言ってました。
アンダーソン　いいのよ、そんなこと気にしなくて。先生、みんなに、一度でも、仏教やめてキリスト教に改めなさいって、言ったこと、ある？
夏子　……（首を振る）
アンダーソン　神様は、仏教であれ、どんな宗教の人にも、分け隔てなさいません。だから、みんなも、そんな事、気にせずに、一生懸命、勉強や家のお手伝いをしてあげてちょうだい。

子供達、うなずく。

常頭　……
平岡　お別れに、みんなで歌おう。相沢さん、ピアノを弾いてください。
相沢　何の歌がいいかな。（ピアノの前に座る）
平岡　……そうじゃな。何がええかな。
正光　そうだ、相沢さんの作った天神町の歌、あれがええ。みんなも覚えとるじゃろ。
相沢　しかし、あれは一番しかできてない。あのままだ。
正光　一番を四回歌えばええ。
平岡　そうそう、それで行こう。

相沢、ピアノの前奏を始める。
春奈、子供達に歌を教えている。

「天神町一番地」
住みなれた　この路地の奥

あこがれの　影をうつして……

歌の途中で三枝憲兵軍曹が、吉井、村岡の二人の部下を連れてはいってくる。憲兵たちは、まず、子供を帰す。他のものは察して歌うのを止めるが、相沢は一人で歌い続ける。

相沢　時にはカフェー　コーヒーの香り
　　行き来するざわめきの中で
　　人はここで出会い　別れた

相沢がなおも歌いやめないので、三枝、横からガーンとピアノを鳴らす。

相沢　……失礼な奴だな……

三枝憲兵軍曹　これは、何の会だ。

相沢　広島女子学院の先生方の、送別会だ。

三枝憲兵軍曹　アンダーソンはスパイ容疑がかかっておる。帰国を条件に罪を不問にすることになっている。容疑者を囲んでの、このような会は許可できん。

相沢　どこにその証拠がある。

三枝憲兵軍曹　証拠？　いろんな情報がある わ。

相沢　情報をひとつひとつ吟味もせずに容疑にするのか。証拠だ。証拠はどこだ。

三枝憲兵軍曹　……相沢大尉。あなたは支那戦線の英雄だということはよく知っちょる。私もそれなりの敬意を払っているつもりだ。だが、いくら英雄でも、余り図に乗らんでもらいたい。

相沢　今日はこの天神町が世話になった人を送る大切な会だ。わしは邪魔をせんでもらいたいだけだ。

三枝憲兵軍曹　それが駄目だと言うておるのだ。

相沢　世話になった人に礼を言う。それが日本人の礼儀じゃろうが！　貴様は軍隊で礼儀も習わんかったのか！

三枝憲兵軍曹　……命令だ。今すぐ解散しろ。

相沢　断る。

三枝、吉井と村岡に合図する。

相沢　寄るな！　……わしも軍人だ。

間

三枝憲兵軍曹　……命令違反だぞ。ただですむと思ってるのか。……私はあなたの輝かしい名誉に傷をつけたくない。おとなしく帰りなさい。

相沢　くどい。断る。

三枝憲兵軍曹　……

アンダーソン　……私たち、これで失礼します。今日は、本当にありがとうございました。

アンダーソン、ベイカー、立ち上がる。

相沢　帰る必要はありません。

天明が入ってくる。

天明　憲兵さん……あなたは、スパイの摘発やら、流言蜚語を取締まるのが仕事じゃ。実は、わしはあなたに告白したい。近頃巷に広がる、えん戦気分の原因は、このわしじゃ。じゃから、このわしを逮捕して帰ってもらいたい。

三枝　証拠もなしにそんな事ができるか。

天明　わしは、占いを見た何人かに、この戦争は一年や二年では終わらず、まだまだ長引くと予言した。多分、それが町に広がって、そこのアメリカ人にまであらぬ疑いがかかってしまった。すべての原因はこのわしじゃ。どうか、わしを逮捕してもらいたい。……ただ、その前に、一つだけ願いを聞いてほしい。わしは、ノモンハンの戦いで、右足を失った。今、その右足が無性に恋しい。歌を聞いているときだけ、わしは右足がないことを忘れることができる。わしは、いつもそこに立ちながら、この人達がここで歌うのを聞いて、心を慰められていた。聞かせてくれ。終わったらわしはあんたについていって尋問を受けよう。

三枝憲兵軍曹　そんな都合のいい作り話を信用するほど、憲兵隊はやわじゃないわ。

天明　……あんた……前にわしが占ったことがあったな。

三枝　……

天明　そうそう、胃病じゃ、胃病があると見立てた。あれから調子はどうじゃ。

三枝憲兵軍曹　……

天明　もうひとつあなたは病気を……あ、そうそう、あれは性病……

三枝憲兵軍曹　個人的な話はするな！

天明　……これでもわしは、天皇陛下のために命懸けで戦った傷夷軍人じゃ。たっての頼みを、聞いてくれ……。

間

三枝憲兵軍曹　……そんなに聞きたいのなら、歌が終わるまで外で待つ。歌が終わったら解散しなさい。

三枝、部下とともに外へ出て待つ。

浪江　天明さん……

相沢　とんだ邪魔が入ったな。

常頭　……許してください……。

一同……？

常頭　……わしは、わしは……アンダーソン先生は、自分を犠牲にして、何の見返りも求めず、この町の教育や、貧しい人達のために尽くしてこられた。今日、やっと本当のことが分かった……わしは、わしは、この自分が、恥ずかしい。警防団副団長の、自分が、恥ずかしい……

平岡　……

間

アンダーソン　……いいのですよ。神様はすべてご存じです。……そして、すべて、許してくださいます。

相沢　……雨は、私たちの心を憂鬱にします。

一同　……

相沢　でも、昨日の雨で、元安川も、広島の七つの川も、たっぷりと水をたくわえ、広々と、流れています。私たちも、つらいことや、苦しいことがあるごとに、広い心をもって生きていくようにしましょう。

一同　……

相沢がピアノを弾く、みんなで「天神町一番地」を歌う。

外では三枝憲兵軍曹らが様子をうかがっている。

「天神町一番地」

住みなれた　この路地の奥

あこがれの　影をうつして

時にはカフェー　コーヒーの香り

行き来するざわめきの中で

人はここで出会い　別れた

白粉の匂い

この町には　お似合いだった

天神町一番地

芝居がとぎれるように、舞台全体の照明が、パッと消える。

しばらくして、明りがつくと、舞台は前とそのままであるがだれ一人としていない。

天明がやってくる。

天明　占い師は、いつも目に見えぬものをみようとしておる。……みなさんは、この舞台には誰もいないと思うてるかもしれんが、わしにははっきり見えるんじゃ、賑やかに出ている夜店や、浴衣がけの町の人々が。……そして、この耳にはっきり聞くことができる。……ほらほら、みなさんにも、聞こえてくるじゃろうが、川本さんの弾くあのバイオリンの音が……祭りの太鼓や、祭りの夜の賑わいが……はっきり聞こえてくるじゃろう……

バイオリンの音や、太鼓の音が、回想のように聞こえてくる。

それと同時に、舞台のあちこちから、すべての登場人物が登場し、祭りの賑わいをつくりだす。人々は無言である。

斜幕が下りてくる。

斜幕に大きくスライドが写しだされる。

「昭和二十年八月六日　午前八時十五分、旧天神町北組は爆心地に極めて近かったため、一瞬のうちに全滅してしまいました。

当時この町には美しい元安川に沿って一三二世帯、約三八〇名の人が住んでおりました。」

バイオリンの音が響く中で幕が下りる。

終

（一九九五・一・六脱稿）

主題歌「天神町一番地」は池田正彦作詞によるものである。

以下の資料より一部引用した。

土屋清「はだしのゲン」（未稿）

F・ニーベル／Cベイリー著

笹川正博／杉渕玲子訳

「もはや高地なし」

ウィリアムL・ローレンス著

崎川範行訳

「0の暁」

「ゲーンズ先生物語」小田切快三編

（広島女学院刊）

〔お断り〕

この作品は六月十八日に南一誠一座によって広島市で上演されました。作者は第四稿まで書きすすめ、その後は演出の園山土筆氏がテキストレジーを行い作者の承認のもとに上演されました。今回編集部より掲載にあたりできるだけ短くしてほしいという要請があったため、園山氏による上演台本も参考にしながら作者の手で一部削除したのを掲載していただきました。

（楠本幸男）

●作者住所●
〒640　和歌山市加納二七一－一四
〇七三四－七三－七五八九
楠本　幸男

〔編集部より〕

『天神町一番地』は、演劇会議87号にある、東西合同作家会議の報告に詳しくその評価が記されている。87号をあらためてご参考に。

また、作家会議の評論等を受けて掲載の運びとなった。

戯曲を編集部（発行所）へ
どしどし、お寄せ下さい。

毎号、戯曲を掲載して欲しい、と要望が沢山あります。よりよい作品を掲載したいと願ってます。みなさんのご協力を期待します。

十七歳の敗戦日記

（一九四五年四月六日～一九四六年一月一日）

津田　伸　著

（光陽出版社　定価二〇〇〇円）

津田伸さんは前進座のベテラン俳優です。「石るつ」の六月公演（山本周五郎作／津田伸脚色『四人囃し』・藤沢周平作／境野修次脚色）の稽古中、津田伸さんから『十七歳の敗戦日記』を自主出版されると聞いて、敗戦五十年ということもあり是非と、の思いで読みました。

陸軍特別甲種幹部候補生に志願―から四六年一月一日―いわゆる「天皇人間宣言」―まで綴られています。激しいB29襲来、仇、撃でやまじ―20歳になったら兵隊となって死ぬのだ、御国のために、愛する人のため―初恋、勤労動員にあけくれする学生生活。日々死をみつめながらの、青春の息吹が伝わってくる。そして敗戦によるとまどい。戦後の民主主義。豊かな感性がほとばしる。

（境野）

事務局だより

震災カンパ百二十七万円に

阪神大震災で被害を受けた全リ演加盟の仲間集団に対しカンパを送る運動をしてきましたが、最終的に五十七集団（未加盟を含む）から総額百二十七万八千百七円のカンパが寄せられました。事務局では、印刷、切手代などの経費五万五千四百九十一円を差し引いた金額百二十二万二千六百十六円を神戸地区の劇団に送りました。

皆さんの熱いご支援に心からお礼申し上げます。また、神戸の劇団からも「ほんとうにありがとうございます。大きな励ましとなります」との礼状が届いたことをご報告します。（カンパの詳細は別項のとおりです）

―東　会　議―

劇団名古屋	二〇、〇〇〇円
劇団夜明け	二四、〇〇〇円
劇団はぐるま	一〇四、〇〇〇円
劇団やまなみ	二〇、〇〇〇円
劇団展望	五、〇〇〇円
高橋寛（だいこん座）	一〇、〇〇〇円
上野市民劇場	一二、〇〇〇円
黒石演劇研究会	一〇、〇〇〇円
劇団石るつ	五、〇〇〇円
劇団阿修羅	一〇、〇〇〇円
仙台小劇場	三〇、〇〇〇円
丸子礼二（名古屋演集）	二〇、〇〇〇円
劇団名古屋演集	二〇、〇〇〇円
東京芸術座	三〇、〇〇〇円
劇団群馬中芸	一〇、〇〇〇円
京浜協同劇団	五〇、〇〇〇円
青年劇場	六五、〇〇〇円
劇団からっかぜ	二〇、〇〇〇円
劇団埼芸	三〇、〇〇〇円
劇団アポストロフィ	六、〇〇〇円
劇団名芸	二〇、〇〇〇円
劇団静芸	一〇、〇〇〇円
岡崎演劇集団	二〇、〇〇〇円
劇団支木	三〇、〇〇〇円
世仁下乃一座	一〇、〇〇〇円
劇団やませ	二〇、〇〇〇円
劇団火の鳥	二一、〇〇〇円
劇団弘演	一〇、〇〇〇円
演劇研究所（未加盟）	七、〇〇〇円
劇団すがお	五一、〇〇〇円
友好劇団	
劇団はにわ	一〇、〇〇〇円
演劇サークル麦の会	一〇、〇〇〇円
三二集団	七二〇、〇〇〇円

―西　会　議―

劇団コーロ	三九、一〇〇〇円
劇団潮流	五、〇〇〇円
テアトルハカタ	五、〇〇〇円
劇団月曜会	五〇、〇〇〇円
劇団ごじか座	一五、〇〇〇円
人形劇団クラルテ	一〇、〇〇〇円
劇団あしぶえ	一〇、〇〇〇円
劇団大阪	五五、〇〇〇円
劇団未来	一〇、〇〇〇円
劇団京芸	一〇、〇〇〇円
福岡現代劇場	三〇、〇〇〇円
大阪府職演研	一〇、〇〇〇円
関西芸術座	五〇、〇〇〇円
劇団演劇街	三〇、〇〇〇円
宇部市民劇団若者座	二〇、〇〇〇円
劇団阿波っ子	三、〇〇〇円
劇団きづがわ	三六、六九八円
演劇集団和歌山	一〇、〇〇〇円
劇団息吹	五〇、三〇九円
劇団コーロ有志	二四、〇〇〇円
劇団生活舞台	一〇、〇〇〇円
演劇サークルトラム	五〇、〇〇〇円
演劇集団あり	一〇、〇〇〇円
劇団未来	五、〇〇〇円
友好集団	
向山登（高岡演鑑）	一〇、〇〇〇円
二五集団	五五八、一〇七円
合計	**一、二七八、一〇七円**

神戸でのフェスティバル一年延期を決める

全リ演は東西合同の議長団会議を五月十三、十四の両日、大阪市内でひらき、次のことがらについて話し合いました。

一、全日本演劇フェスティバル
二、「演劇会議」新編集体制と今後
三、全リ演の財政確立
四、加盟劇団をふやす活動
五、「演劇会議」前編集長故萩坂桃彦氏の一周忌
六、その他

まず、来年（一九九六年）夏に兵庫県で開催する予定だった東西合同の全日本演劇フェスティバルの件ですが、阪神大震災によって開催は不可能と判断し、一年延期し、場所についても西会議が中心となって再検討することになりました。

これまで、神戸市での開催を予定し諸準備をすすめてきましたが、予定していた県や市の助成金が一月に発生した大震災により見込めなくなったこと、会場も被害を受けており、甲子園（高校野球）と時期が重なることもあって会場や宿泊の面でムリだと判断せざるをえなくなったからです。

「演劇会議」は、萩坂編集長から早川昭二編集長体制に変わり、すでに二つの号が出ましたが、新しい誌面は「読みやすくなった」、「編集方針が明確で期待がもてる」、「編集が集団体制になったので意見が出しやすくなった」など、おおむね好評の感想が出された。しかし、一方で、掲載戯曲の選定に対する意見、誌代の回収についての心配などの意見も出されました。また、編集にあたってどうしてもかかる経費については予算化していくことなどを話し合いました。

なお、萩坂前編集長の一周忌については、一周忌の集いそのものはご遺族と地元の川崎文化会議等におまかせすることにし、全リ演としては二月ごろ、萩坂さんが提起されたリアリズム演劇論について、われわれ自身が考えるシンポジウムのような集いを企画していくことにしました。

全リ演の加盟劇団をふやしていく活動についても討論し、今年八月に東、西それぞれが行う演劇ゼミ、演劇フェスティバルに、友好劇団を積極的にさそうことを通じて加盟を促進していくことにしました。

全リ演活動の広がりに伴い、財政はかなりひっ迫していますが、経費がかかるからやめるという考え方でなく、必要であれば経費をかけてでも活性化させていくことにし、東西それぞれの分担金をふやしていくことにしました。

編集後記

●特集「敗戦五十周年を迎えて（私の戦争責任）」は、いよいよ89号（11月発行予定）をもって終了となります。この企画のまとめにあたって、更に「敗戦五十周年」と私たちの演劇運動との関連で、敗戦五十周年の意義を深めていきたい。従来の特集原稿として七、八頁分を劇作家の大橋喜一氏に依頼し、すでに承諾を得ております。更に二頁分（四〇〇字・五枚余）を最低数名の人達からの寄稿を期待しています。私たちの演劇運動を通して、五十年を考えたいのです。

●敗戦五十年の節目に、沖縄戦の状況やヒロシマ・ナガサキ等、また、花岡事件、とその真実を明らかにすることと同時に戦争責任が問われている。各地域などでは、戦争を考えるイベントや展示等が行われている。学童疎開時の子供達の生活や生活用具の展示。又、七三一部隊（森村誠一著「悪魔の飽食」参考に）の写真展等も行われている。私たちも、演劇会議として、五十周年をまとめていきたい。

●萩坂心一氏の『感謝と喜びの気持で』の文章に目頭が熱くなり、涙が滲出てしまった。目に焼きついているのは、あの萩さんの顔です。石るつの芝居を観た後で、楽屋に来ていただき、チューハイを飲みながらの叱咤激励。あの時の、本根を吐いている萩さんの顔だ！

萩坂心一氏の八……父が、「自伝」というものを書き残さなかったことは子としても心残りです。父の八十年の生涯をあとづけていくことが私の務めとなりそうですが……〉。私達も何かする必要があると思います。これまでの萩さんの劇評やエッセイなどを整理し、萩坂桃彦氏の仕事とその生涯を記録に残すことを提案したい。

●今号は、劇評が少なかった。十頁の予定が半分になってしまった。劇団ニュースだけでは、創造的な動きが見えてこないのではないだろうか。創造的豊かさがあるいは創造的課題などが読みとるには劇評にその部分があると思う。劇評の少ないのは編集委員の各劇団や評論家氏への働きかけの弱さである。

●こんな芝居を観た、感じた、黙っていられない、書きたくなった。ということも創造活動に必要だ。是非、劇評も寄稿して下さい。もとより編集委員会も劇評体制、準備を考えたい。

●あいかわらず、読者のコーナーは成り立ってない。何故か、演劇会議の読了感、編集に対する意見、何んでも寄せて欲しい。『演劇会議』は面白いのか、読みにくいのか、演劇運動に刺激を与えているのか。…等。

（文責　境野）

演　劇　会　議　88号　1995年7月10日発行
定　価　700円（送料240円）
編集委員　早川昭二　境野修次　石垣政裕　栗原　省　赤松比洋子　楠本幸男
発行所　演劇会議発行所
〒135 東京都江東区森下5－11－8　荒川ビル　吉川複写工業㈱内（境野修次）
電話 03(5600)0270　FAX 03(5600)0271
誌代振込先（郵便振替）口座番号00200-4-78639
全日本リアリズム演劇会議事務局（〒211 神奈川県川崎市幸区古市場2－109（京浜協同劇団・城谷護）